

茨城県教育財団文化財調査報告第223集

辰海道遺跡 2

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成 16 年 3 月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第223集

辰^{たつ}海^{かい}道^{どう}遺^い跡^{せき} 2

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成 16 年 3 月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景(北から)



第648号住居跡出土遺物

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町長方地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である辰海道遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年8月から平成15年3月まで発掘調査を実施しました。

本書は、辰海道遺跡の調査成果を取録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字長方に所在する長海道遺跡（チチホウド）の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成14年8月1日～平成15年3月31日
整理 平成15年4月1日～平成16年2月29日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木美治のもと、以下のものが担当した。
調査第2班長 村上 和彦 平成14年8月1日～9月30日
調査第1班長 萩野谷 悟 平成14年10月1日～平成15年3月31日
主任調査員 浅野 和久 平成14年8月1日～12月31日
 嶋志田祐一 平成14年8月1日～9月30日
 川上 直登 平成14年10月1日～10月31日
 榎 雅彦 平成14年11月1日～11月30日
 芥川 修 平成15年1月1日～3月31日
 島田 和宏 平成15年2月1日～3月31日
調査員 鹿島 直樹 平成14年12月1日～平成15年3月31日
 越田貞太郎 平成15年1月1日～3月31日
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、調査員越田貞太郎が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、墨書・刻書土器の文字の判読について国立歴史民俗博物館副館長兼教授の平川南氏にご指導いただいた。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、 $X = +39,920\text{m}$ 、 $Y = +22,120\text{m}$ の交点を基準点 (A1a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。






大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C・・・、西から東へ1, 2, 3・・・とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c・・・j, 西から東へ1, 2, 3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

その他、調査年次等による名称は第2図に示した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。
3 遺構番号は平成13年度調査からの継続である。遺物番号も平成13年度調査からの継続であるが、今年度報告分は5001から付した。
4 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

住居跡-SI 掘立柱建物跡-SB 土坑-SK 井戸跡-SE 溝跡-SD 道路跡-SF
欄跡-SA ビット群-PG 柱穴-P 攪乱-K

- 5 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）および『日本の傳統色 その色名と色調』（長崎盛輝著 青幻社）を使用した。
6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。
7 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・釉・赤彩・貼床  炉・火床面・漆・石器使用痕・被熱痕 
竈部材・粘土・炭化材・黒色処理・金属付着  柱痕・油煙・煤・炭化物  硬化面 
土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△ 瓦▲ 木製品■

- 8 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
(1) 遺構全体図は250分の1と600分の1、遺構は60分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。
(2) 遺物は3分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。
(3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。
9 「主軸方向」は、炉または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した (例 N-10°-E)。
10 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
(1) 計測値の単位は、cm及びgで示した。なお、現存値は ()、推定値は| |を付して示した。
(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
(3) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。
11 遺構一覧表における計測値は、現存値は ()、推定値は| |を付して示した。
12 住居跡で建て替えが行われていると判断できたものは、番号の後に古い順から「A」「B」「C」と付した。

抄 録

ふりがな	たつかいどういせき に							
書 名	辰海道遺跡 2							
副 書 名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	Ⅱ							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第223集							
著 者 名	越田 真太郎							
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団							
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発 行 機 関	財団法人 茨城県教育財団							
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発 行 日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査 期間	調査面積	調査原因
辰海道遺跡	茨城県西茨城郡 岩瀬町大字長方 字北辰海道 155番地ほか	08324 - 082	36度 21分 30秒 (36度 21分 45秒)	140度 05分 05秒 (140度 08分 23秒)	43 ～ 51 m	2002 0801 ～ 2003 0331	5,333.52㎡	北関東自 動車道 (協和～ 友部)建 設事業に 伴う事前 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
辰海道遺跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡	23軒	土師器、須恵器、石器・石製品(紡 錘車・双孔川板・砥石)、土製品 (支脚・有孔土錘)		遺構・遺物 は奈良・平 安時代を中 心としてお り、鉄・漆 関連の工房 跡、灰 軸・ 緑軸陶器な どが出土し ている。	
		奈良・平安	竪穴住居跡	51軒	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑軸 陶器、石器・石製品(紡錘車・砥 石)、土製品(輪羽口・紡錘車)、 金属製品(刀子・釘・鉄織)、木 製品(山物)			
			掘立柱建物跡	3棟				
			鍛冶工房跡	1軒				
		中・近世	土坑	1基				
			井戸跡	1基				
			溝跡	1条				
		中・近世	溝跡	12条	土師質土器、陶器、磁器、古銭			
			道路跡	1条				
	その他	時期不明	土坑	283基	土師器、須恵器、土師質土器、瓦 質土器、陶器、磁器			
			井戸跡	8基				
			溝跡	7条				
			柵跡	3列				
			ピット群	5か所				

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	58
(1) 竪穴住居跡	58
(2) 堀立柱建物跡	166
(3) 鍛冶工房跡	170
(4) 土坑	177
(5) 井戸跡	178
(6) 溝跡	180
3 その他の遺構と遺物	181
(1) 土坑	181
(2) 井戸跡	195
(3) 溝跡	200
(4) 道路跡	211
(5) 欄跡	212
(6) ビット群	214
(7) 遺構外出土遺物	220
第4節 まとめ	232
付章 茨城県長海道遺跡出土木製品の樹種調査結果	269
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成11年3月15日に岩瀬町長方地区において現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年9月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に辰海道遺跡が存在する旨回答した。

平成13年1月26日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。その結果、茨城県教育委員会教育長は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、辰海道遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年8月1日から辰海道遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

平成14年度の調査は、平成14年8月1日から平成15年3月31日まで実施した。調査経過については、下表のとおりである。

年度 月	平成14年度					平成15年度		
	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
工程								
調査準備	■							
表土除去		■			■	■		
遺構確認	■				■	■		
遺構調査	■	■	■	■	■	■	■	■
洗浄・注記・写真整理作業		■	■	■	■	■	■	■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

辰海道遺跡は、茨城県西茨城郡岩瀬町大字長方字北辰海道155番地ほかに所在している。

岩瀬町は、茨城県の中西部に位置している。北には富谷山、南巻山及び高峰山があり、栃木県奥州市・益子町・茂木町に接している。町は山地で取り囲まれた盆地をなしている。町の北東部に位置する鉾柄峠の山間、鏡ヶ池に源を発する桜川が町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、筑輪川などの流域と山間部に入り込んだ谷状の低地などである。

当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層とこれを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、鹿沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また、水田に利用されている桜川流域一帯などは、河川の浸食・堆積作用による沖積地である¹⁾。当遺跡は、岩瀬町西部の長方地区にあり、桜川の支流である泉川右岸の標高43～51mの台地上に立地し、調査前の現況は畑地・杉林である。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の桜川及びその支流の台地上には縄文時代から中世にかけての遺跡が多く分布し、また、低地を臨む丘陵上には古墳が数多く存在している²⁾。

縄文時代には、桜川流域の沖積地から入り込む支谷に面した台地上の縁辺部に、集落が形成されるようになり、遺跡は長辺寺遺跡〈1〉、防人遺跡〈2〉、猪俣遺跡〈3〉、犬田神社前遺跡〈4〉などが所在している。このうち、犬田神社前遺跡は平成14年度に発掘調査が行われ、中期の遺構・遺物が多数出土している³⁾。また、当遺跡から南約1.8kmの大和村の桜川右岸には高森遺跡〈24〉、高森西遺跡〈25〉が位置している。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布している。これまでに栃木県との県境に近い大泉地区から細頸壺形土器と筒形土器が出土しており、下館市に所在する女方遺跡出土の土器に類似している。また、南飯田遺跡と番匠免遺跡出土の土器は那珂川・久慈川流域に分布する弥生時代後期の土器と類似し、この時期に集落が営まれていたと想定されている⁴⁾。

古墳時代になると、遺跡数は増加の傾向を見せるようになり、現在のところ46か所の古墳群、170基を超える古墳が確認されている。また、町の南に隣接する大和村では、桜川流域に沿って7か所の古墳群と4基の古墳が確認されている⁵⁾。それらの古墳や古墳群は、桜川流域の沖積地を臨む丘陵上に位置している。これまでに調査された古墳は、狐塚古墳〈5〉、間中古墳群〈6〉、青柳古墳群〈7〉、花園古墳〈第3号墳〉〈8〉、西沢古墳〈9〉、稲古墳群〈10〉、松樹古墳群〈11〉、犬田山神古墳〈12〉である。狐塚古墳は当遺跡から東約3.3kmの長辺寺山西麓に所在し、昭和42年に工場建設のために緊急調査が実施された。古墳の軸線は正南よりわずかに東にふれ、規模は全長約40m、高さ約4m（後方部墳丘）の前方後方墳である⁶⁾。また、標高約130mの長辺寺山山頂には、長辺寺山古墳〈13〉が所在している。この古墳は未調査であるが、全長約120m、前方部を南東に向けて築造された前方後円墳であり、旧新治岡東部地方における最大規模の古墳である。これら二つの古墳は岩瀬盆地のほぼ中央の独立丘陵上に築造されており、古墳時代前期の首長墓と考えられ、当遺跡とは桜

川と二つの支流が流れる沖積低地を挟んで約3kmで対峙している。当遺跡からは古墳時代の方形区画を呈する
と考えられる濠や9mを超える大形住居跡などが確認されており、狐塚古墳や長辺寺山古墳をはじめ、飯沼古
墳群（14）などとの関連がうかがえ、岩瀬盆地が古墳時代の枢要の地であったことが推測される。

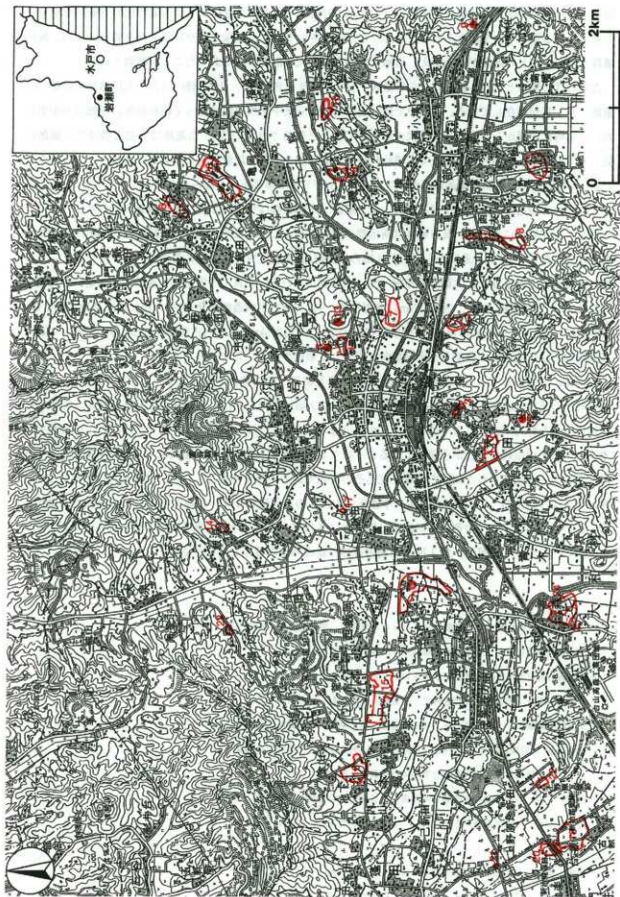
古墳時代の集落とされる遺跡は、金谷遺跡（15）、当向遺跡（16）、山王遺跡（17）、大田神社前遺跡、磯部
遺跡（18）等が所在している。この中で磯部遺跡は、町立東中学校建設に伴って昭和45年に発掘調査が実施さ
れ、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落跡であると報告されている⁹⁾。当遺跡は当初古墳時代の集落跡と
見られていたが、今回の発掘調査で古墳時代から平安時代まで続く比較的大きな集落であることが確認されて
いる。古墳時代に拠点的な集落形成がすめられ、やがて律令体制下へと組み入れられていったと考えられる。
また、これらの遺跡の中で、松田古墳群・金谷遺跡・当向遺跡は平成14年度に発掘調査が行われている¹⁰⁾。

奈良・平安時代になると、長方地区は新治郡に編入されることとなり、『和名類聚抄』中の新治郡坂門（戸）
郷に比定されている¹¹⁾。当遺跡から南西約4kmの協和町古郡地区付近には新治郡衙跡（19）が位置し、その北
側に隣接する上野原地区には新治縣寺跡（20）が位置している。奈良・平安時代の遺跡は、当遺跡から西南西
約3.6kmに上野原遺跡（21）、西約1.5kmに金谷遺跡、約2.6kmに当向遺跡、北東約1.4kmに山上遺跡、約6.0kmに
岡中遺跡（26）が、南西約3.3kmに上野原瓦窯跡（22）、北約2.5kmに瀬の内古窯跡群（23）等が位置しており、
当遺跡周辺は新治郡衙の機能を支える郡営工房として形成されていた可能性もある。

その後、中央から下ってきた貴族たちが在地土豪と結び、その勢力を増大していく中で、天慶2（939）年
の平将門の乱後、討伐に功勞のあった平貞盛の子孫が次第に勢力を伸ばし、筑波山西南麓を拠点に真壁、筑波、
新治の三郡を勢力下に置くようになる。このような状況の中で岩瀬地方は「中郡」と呼ばれ、摂関藤原氏を
本宗とする大中臣姓中郡氏が台頭してくるようになる。在地領主となった中郡氏は平安時代末期になると後白
河法皇によって創設された京都の蓮華王院へその所領である中郡を寄進し、以後、岩瀬地方は中郡荘（庄）と
呼ばれるようになる¹²⁾。そして寄進後、中郡氏は中郡荘の下司職となり、在地領主としての確固たる地位を保
持していった。しかし、中郡氏の居館跡は明らかにされておらず、今後の調査研究が待たれるところである。
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註)

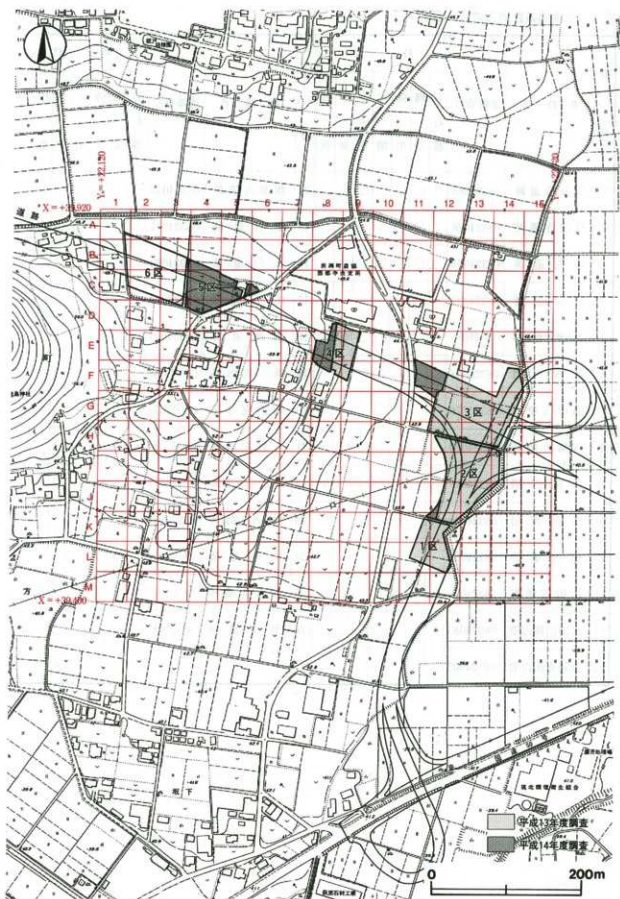
- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会 『日本の地質3 関東地方』 共立出版 1986年 10月
- 2) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 2001年 3月
- 3) 調査報告書は茨城県教育財団より平成16年3月発行予定。
- 4) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町 1987年 3月
茨城県史編集会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 1991年 3月
- 5) 瓦吹 暁 『岩瀬盆地考古学点検』『領域の研究-阿久津久先生選題記念論集-』
阿久津久先生選題記念事業実行委員会 2003年 4月
- 6) 西宮 一男 『常陸狐塚古墳調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1969年 4月
- 7) 野村 幸希 『磯部遺跡調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1972年 7月
- 8) 註2)と同じ。
- 9) 池邊 彌 『和名類聚抄郡郷里縣名考證』 吉川弘文館 1981年 2月
- 10) 中山 信名 『新編常陸国誌』 福書房 宮崎報恩会版 1979年 12月



第1図 辰海海遺跡周辺遺跡分布図

表1 辰海道遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	遺跡番号	時 代						番 号	遺 跡 名	遺跡番号	時 代					
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世				近 世	旧 石 器	縄 文	古 墳	奈 平	中 世
◎	辰海道遺跡	08324082	○	○	○	○	○	○	14	飯沼古墳群	08324046			○			
1	長辺寺遺跡	08324026		○	○				15	金谷遺跡	08324081				○	○	
2	防人遺跡	08324068		○	○	○	○		16	当向遺跡	08324080		○	○	○	○	
3	猪窪遺跡	08324027		○	○				17	山王遺跡	08324064				○	○	
4	大田神社前遺跡	08324086		○	○	○	○	○	18	磯部遺跡	08324005		○		○		
5	狐塚古墳	08324048				○			19	新治郡衙跡	08505038					○	
6	間中古墳群	08324076				○			20	新治庵寺跡	08505039					○	
7	青柳古墳群	08324050				○			21	上野原遺跡	08505028					○	
8	花園古墳	08324019				○			22	上野原瓦窯跡	08324051					○	
9	西沢古墳	08324060				○			23	堀の内古墳群	08324032					○	
10	桶古墳群	08324004				○			24	高森遺跡	08504001		○				
11	松田古墳群	08324020	○	○	○	○		○	25	高森西遺跡	08504025		○			○	
12	大田山神古墳	08324085		○	○	○	○	○	26	間中遺跡	08324087					○	
13	長辺寺山古墳	08324003				○											



第2図 辰海道遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査区は、便宜上1～6区に分けた(第2図)。平成13年度の調査区は1～4区、平成14年度の調査区は2～4区(一部)、5区、6区(一部)で、平成15年度の調査区は6区の一部である。今回報告するのは、平成14年度に調査した2～5区の5,333.52㎡分についてである。調査の結果、古墳時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺構は、壘穴住居跡74軒(古墳時代23、奈良・平安時代51)、掘立柱建物跡3棟、鍛冶工房跡1軒、井戸跡9基、溝跡20条、道路跡1条、ピット群5か所、土坑284基、槽跡3列などである。

遺物は、遺物コンテナ(60×40×20cm)に78箱出土している。出土した主な遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土師質土器、陶器、磁器や、石器・石製品(紡錘車、双孔円板)、土製品(支脚、輪羽口、右孔土鎌)、金属製品(刀子、釘、鉄鏝、古銭)、木製品(曲物)などである。

第2節 基本層序

調査3区の南部(D5c3区)にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った(第3図)。以下、テストピットの観察結果から土層の解説を行う。

第1層は黒褐色の表土である。粘性・締りは普通。層厚は8～15cm。

第2層は褐色のソフトローム層で、第一黒色帯(BBI)に相当する。粘性・締りは普通である。層厚は6～15cm。遺構は本層の上面で確認できた。

第3層は黄褐色のソフトローム層で微量のガラス質粒子が認められ、始良丹沢テフラを含む層と思われる。粘性・締りは強い。層厚は7～18cm。

第4a層はにぶい黄褐色のハードローム層である。粘性・締りとも強いがソフト化が進んでおり4b層よりはやや柔らかい。層厚は2～21cm。

第4b層はにぶい黄褐色のハードローム層である。粘性は強く、締りは非常に強い。層厚は3～19cm。

第5a層は暗褐色のハードローム層である。粘性・締りとも強いがソフト化が進んでおり5b層よりはやや柔らかい。層厚は4～18cm。

第5b層は暗褐色のハードローム層である。粘性は強く、締りは非常に強い。層厚は7～25cm。

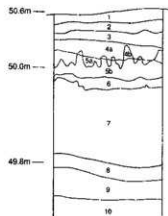
第6層はにぶい黄褐色の鹿沼バミス(以下KPと略す)との漸移層である。層厚は2～14cm。

第7層は明黄褐色のKP純層である。粘性は弱く、締りは非常に強い。層厚は70～82cm。

第8層は暗褐色のハードローム層である。7層との境目付近に直径2～7mmの黒色スコリア粒子を微量含む。粘性・締りは強い。層厚は10～18cm。

第9層は暗褐色のハードローム層である。粘性・締りは強い。層厚は15～38cm。

第10層はにぶい黄褐色のハードローム層である。粘性は強く、締りは非常に強い。層厚は現状で15cm以上あるが下層が未掘のため本来の厚さは不明である。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡2軒を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。なお、平成13年度の調査で一部が報告されている遺構については「茨城県教育財団文化財調査報告第222集 辰海道遺跡1」（以下、『辰海道遺跡1』と略す）から実測図を一部転載し、今回調査した部分と併せて報告する。

(1) 竪穴住居跡

第271号住居跡（第4図）

位置 調査区東部のF12g6区に位置し、平坦部に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第608号住居跡を掘り込み、第272号住居と第1604・1746・1748号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約4.9mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は6~18cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、今年度調査区域内では壁溝が周回している。

竪 北壁の中央部に付設されているが、第1604・1746号土坑に掘り込まれているため、右袖部の一部と壁外への掘り込みは不明である。袖部はロームと粘土で構築されている。また、左袖部は床面と同じ高さの地山面に構築されているが、右袖部と火床面は20cmほど掘りくぼめた部分に、暗褐色土を床面と同じ程度の高さまで埋め戻した上に構築されていたと推測される。

覆土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼上ブロック微量
2 暗褐色	焼上粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼上粒子・炭化粒子微量、締り強	9 黒褐色	ロームブロック・焼上ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量、締り強
4 暗褐色	ロームブロック・焼上ブロック・粘土粒子少量	10 黒褐色	ロームブロック・焼上ブロック・粘土ブロック微量、締り強
5 暗褐色	焼上ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、焼上ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量、締り強
6 暗褐色	焼上ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	12 黒褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼上ブロック・炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは50~60cmである。P5は深さ12cmで、南壁際中央の竪に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

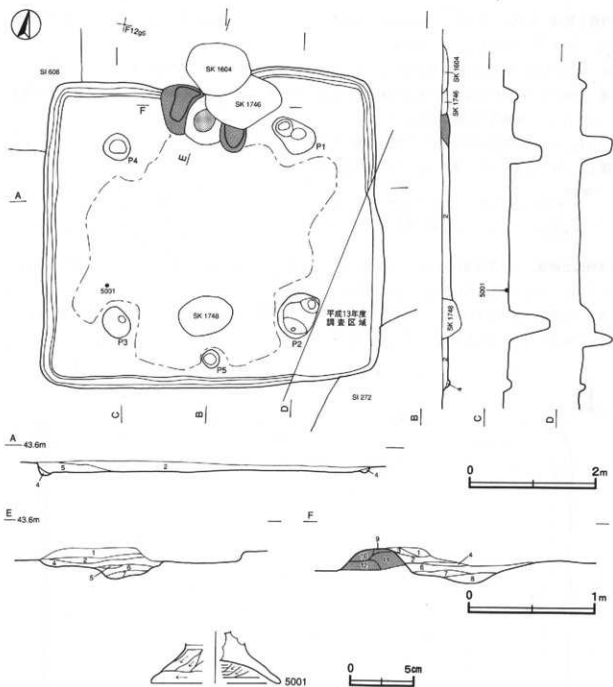
覆土 5層に分層される。『辰海道遺跡1』と土層番号は対応しているが、第1・3層は今年度調査区域内では確認できず、第5層は今年度調査区域内でのみ確認されたものである。堆積状況は各層に焼土・炭化物を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色	ロームブロック・焼上ブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック中量、焼上ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼上粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	焼上ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼上ブロック少量		

遺物出土状況 今年度調査区域からは土師器片441点（坏42、高坏3、甕395、ミニチュア1）、須恵器片7点（高台付坏1、甕5、瓶1）、灰釉陶器片1点（長頸瓶）、縄文土器片1点が中央部から西側にやや集中して出土している。覆土上層から下層にかけて散在しており、細片が多く図示できるものは少なかったが、5001が南西部の床面から出土している。須恵器片と灰釉陶器片は覆土上層から出土し、流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。



第4図 第271号住居跡・出土遺物実測図

第271号住居跡出土遺物観察表 (第4図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5001	土師器	高坏	-	(4.1)	[10.2]	金雲母	にぶい橙	普通	側部内外面横ナデ	南西部床面	20%

第430号住居跡 (第5・6図)

位置 調査区南部のK12a4区に位置し、平坦部に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第426・513号住居と、第836～838・857・858・1818・1819号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は6.5mで、短軸は約6.2mの方形と推定され、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は約20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は今年度調査区域内ではほぼ全周している。

竈 北壁際の中央部やや西寄りに床面が焼けている部分があり、火床面の痕跡と考えられる。耕作により削平されており、上部構造の痕跡はとどめていない。

ピット 1か所。深さは約12cmで、性格は不明である。

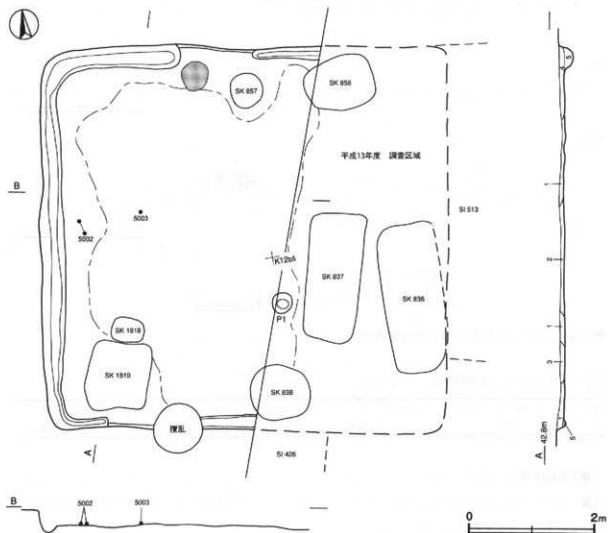
覆土 5層に分層される。覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

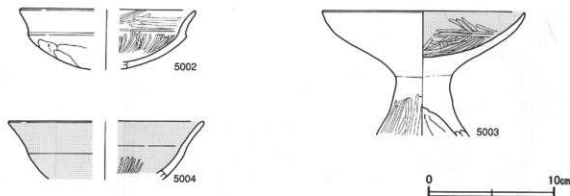
- | | | | |
|--------|------------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・炭化粒子微量、糖り弱 | 4 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 今年度調査区域からは土師器片48点（坏18、高坏10、甕20）、縄文土器片3点が散在して出土している。5002・5003は西側の覆土下層から出土している。

所見 時期を「辰海道遺跡1」では、出土遺物、住居の主軸方向や形態などから6世紀前葉と推測している。今年度出土した土器もそれを裏付けるものであると考えられる。



第5図 第430号住居跡実測図



第6図 第430号住居跡出土遺物実測図

第430号住居跡出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
5002	土師器	杯	[13.8]	(4.8)	-	長石	赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ	西側下層	20%
5003	土師器	高杯	16.2	(10.1)	-	長石, 白雲母	にひ赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ	西側下層	50%
5004	土師器	高杯カ	[15.6]	(4.2)	-	長石, 白雲母	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ	覆土中	20%

第484号住居跡 (第7図)

位置 調査区中央部のE9a1区に位置し、平坦部に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第1077号土坑と第45号ピット群のP1に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.6m、短軸4.9mの長方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は13~30cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部と南壁際が踏み固められており、壁溝が東壁を除いて巡っている。

ピット 5か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~60cmである。P5は深さ20cmで南壁際中央に位置し、出入り口施設に伴うものと考えられる。

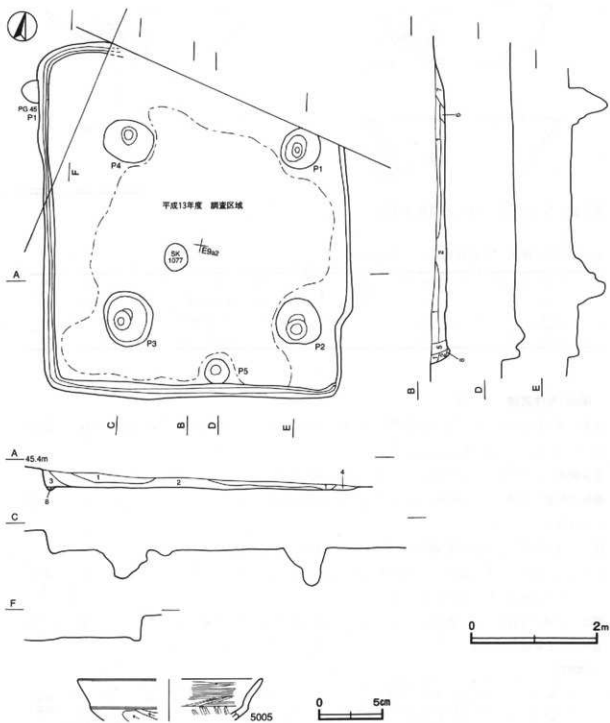
覆土 8層に分层される。各層にロームブロック・粒子を含み、人為堆積と考えられる。土層番号は「辰海道遺跡I」と対応している。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5	黒色	ローム粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック微量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 今年度調査区域からは土師器片3点(杯1, 甕1, 甌1)が出土している。5005は覆土中からの出土である。

所見 遺構の大半が平成13年度調査区域に位置し、今年度調査区域は狭小であった。時期を「辰海道遺跡I」では、出土土器から6世紀前葉と考えており、今年度出土した土器も少量であるがそれを裏付けられるものと考えられる。



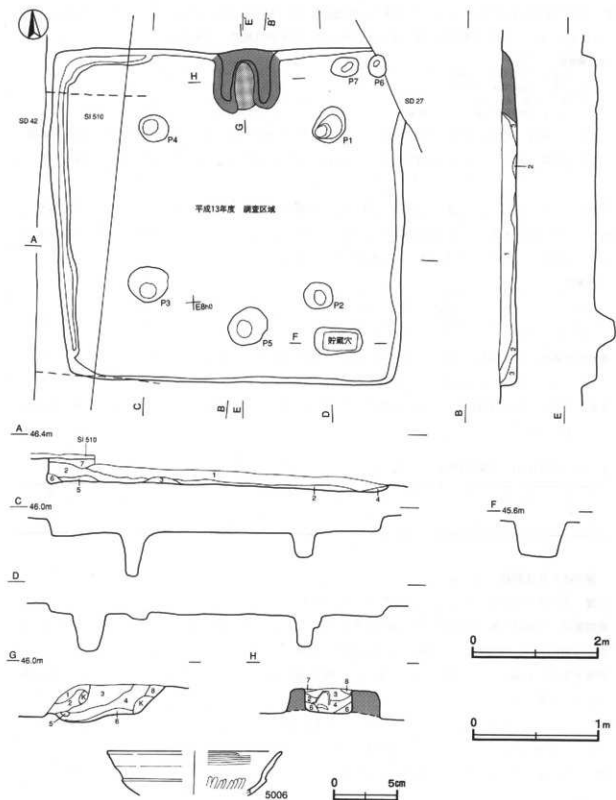
第7図 第484号住居跡・出土遺物実測図

第484号住居跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5005	土師器	坏	[14.8]	(3.4)	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナデ	覆土中	10%

第493号住居跡（第8図）

位置 調査区中央部のE 8 g0 区に位置し、平坦部に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。



第8図 第493号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 第510号住居，第27号津に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.6m，短軸4.4mの方形で，主軸方向はN-9°-Eである。壁高は15～25cmで，各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦である。壁溝が西壁際から北壁際の一部にかけて確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは90cmで，壁外への掘り込みはほとんどない。袖部幅は110cmである。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ，火床面は被熱し赤変硬化している。

壁土層解説

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック微量 | 5 赤褐色 焼土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量 | 6 暗赤褐色 焼土粒子微少 |
| 3 赤褐色 焼土粒子少量 | 7 赤褐色 焼土ブロック微量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子微量 | 8 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子微少 |

ピット 7か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは27～70cmである。P5は深さ30cmで南壁際中央の竈に対面する位置にあり，出入り口施設に伴うものと考えられる。P6・P7は深さ26cmと36cmで性格は不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長軸80cm，短軸40cm，深さ60cmの長方形で，底面は平坦である。

覆土 7層に分层される。「辰海道遺跡1」と対応しているが，第5～7層は今年度調査区域内でのみ確認された。各層にロームブロックを含み，人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 褐色 ロームブロック微量 | 7 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微少 |
| 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 今年度調査区域からは土師器片80点（坏12，甕68），須恵器片1点（蓋），土師質土器片1点（指鉢）が出土している。5006は覆土中から出土したものである。

所見 時期を「辰海道遺跡1」では，6世紀前半と考えており，今年度出土した遺物もそれを裏付けるものであると考えられる。

第493号住居跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5006	土師器	坏	11.8	(3.6)	-	辰石	明褐色	普通	口縁部外周線ナテ，外器外縁へツ張り	覆土中	10%

第603A号住居跡（第9図）

位置 調査区東部のG12a5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 当初は1軒の住居跡として調査を進めたが，2回にわたり建て替えが行われていると判断し，古い頃から第603A号・第603B号・第603C号住居跡として調査を実施した。

規模と形状 長軸3.5m，短軸3.4mの方形で，主軸方向はN-0°である。壁高は，四方の壁がすべて拡張されており不明である。

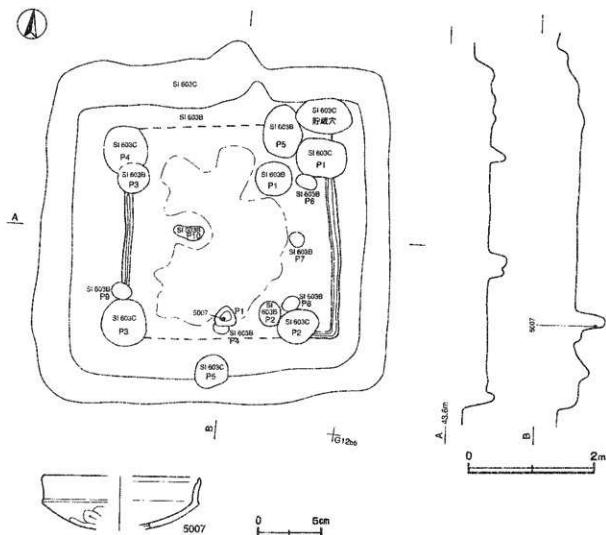
床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝が第603B号住居の床下から検出されたが，東壁際と西壁際に一部残存しているのみで，北・南壁際では確認できなかった。

竈 拡張の際に取り壊されたと推測され，痕跡をとどめていない。火床面の痕跡もなく，使用期間が短かった可能性が考えられる。

ピット P1が第603B号住居の床下から検出された。深さは45cmで，出入り口施設に伴うものと考えられる。

遺物出土状況 5007がP1の覆土下層から出土している。

所見 本跡は第603B号住居への拡張・建て替えを行う以前の住居である。時期は出土土器と第603B号住居の時期から、6世紀中葉と考えられる。



第9図 第603A号住居跡・出土遺物実測図

第603A号住居跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5007	土師器	坏	[12.4]	(4.2)	-		石灰、長石	に多い場	普通	口縁部内外側傾ナテ、内面ナテ	P1覆土下層	15%

第603B号住居跡 (第10図)

位置 調査区東部のG12n5区に位置し、平坦部に立地している。

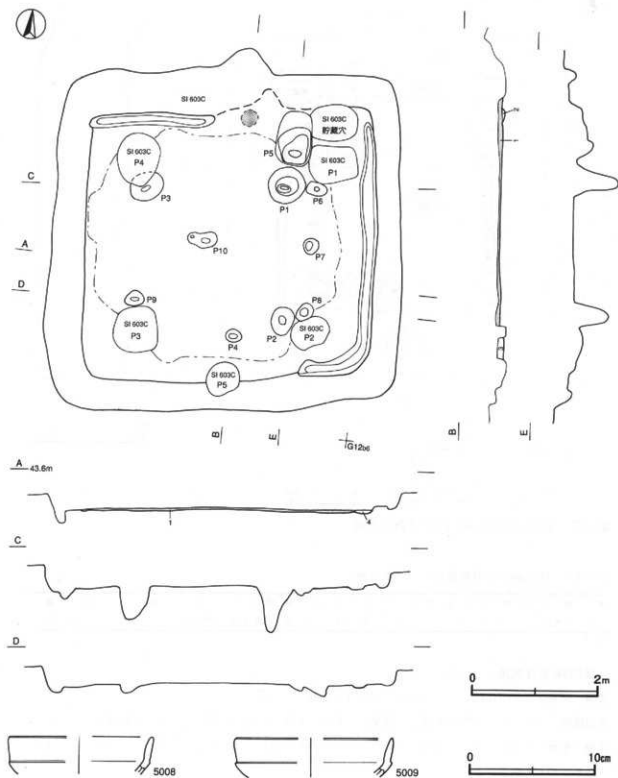
重複関係 第603A号住居跡を拡張して構築しており、本跡を拡張して第603C号住居が構築されている。

規模と形状 長軸約4.6m、短軸約4.3mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は、四方の壁がすべて拡張されており不明である。

床 ほぼ平坦で、中央部は貼床され壁際を除き踏み固められている。壁溝は東壁際と、北・南壁際の一部に残

存しているのみである。

竈 北壁際の中央部に床面が焼けている部分があり、火床面の痕跡と考えられる。あまり焼け締まってはならず、使用期間が短かった可能性が考えられる。竈は拡張の際に取り壊されたと推測され、上部構造の痕跡はとどめていない。



第10図 第603B号住居跡・出土遺物実測図

ピット 10か所あり、すべて第603C号住居の床下から検出された。主柱穴はP1～P3が相当し、深さは54～68cmである。南西の主柱穴は第603C号住居を構築する際に埋されたものと考えられる。P4は深さ16cmで南側中央にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P5～P10は性格不明である。

覆土 4層に分層される。第1層は貼床で、第2層は火床面の痕跡と考えられる部分である。

土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量、粘り強
2 黒褐色 粘土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
3 灰褐色 ロームブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 木跡に明確に伴うといえる遺物は少なく、多くが細片であるが、P1の覆土中から5008・5009が出土している。

所見 時期は、第603A号住居跡を拡張して構築した住居であることと出土土器から、6世紀後半と考えられる。

第603B号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	形状	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5008	土師器	坏	〔11.2〕	(3.0)	-	金雲母、赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内外面横ナア	P1覆土中	10%
5009	土師器	坏	〔12.4〕	(3.2)	-	金雲母、赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部内外面横ナア	P1覆土中	10%

第603C号住居跡 (第11～13図)

位置 調査区東部のG12a5区に位置し、平坦部に立地している。

遺構関係 第603B号住居跡を拡張して構築している。第1617号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が約5.5mの方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は20～29cmで各壁とも外傾して立ち上がっている。

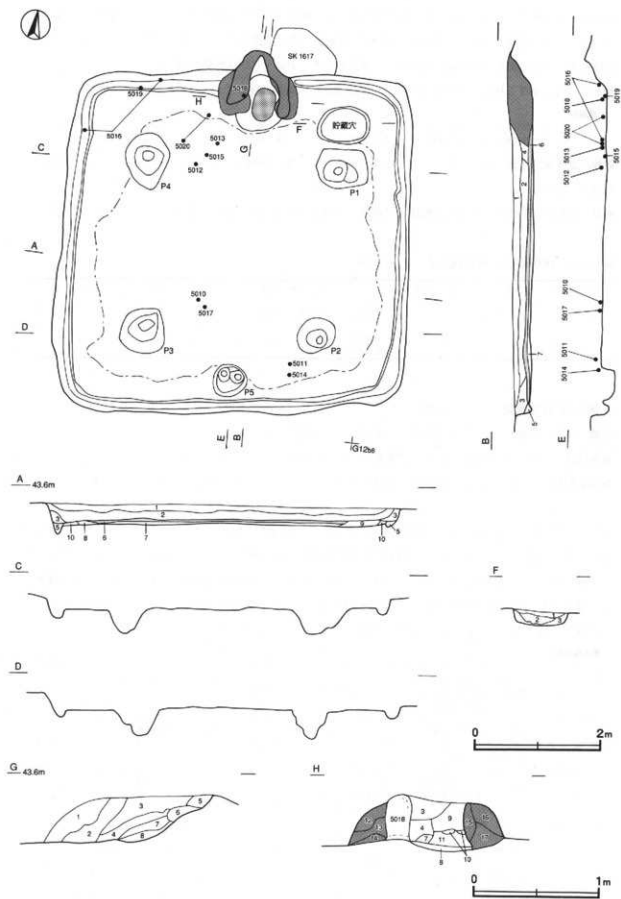
床 はほぼ平坦で、中央部は貼床され踏み固められている。溝が全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは125cmで、壁外へ30cmほど掘り込んでおり、袖部幅は125cmである。天井部は残存しておらず、第9層が崩落した天井部の構築材と考えられる。袖部は砂質粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
2 暗褐色 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
5 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
6 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
7 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・粘土粒子・灰少量、炭化粒子微量
8 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・灰少量
9 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・砂粒中量、炭化粒子微量
10 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量、砂粒少量、炭化粒子微量
11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・灰少量
12 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
13 黒褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
14 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
15 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
16 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子少量
17 褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは34～40cmである。P5は深さ22cmで南壁際中央の竈に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。



第11图 第603C号住居跡实测图

貯蔵穴 長径83cm, 短径61cmの楕円形で, 深さは25cmである。竈の北東側に位置し, 底面は皿状を呈する。土層は3層に分層され, レンズ状の堆積状況を示し, 自然堆積と考えられる。

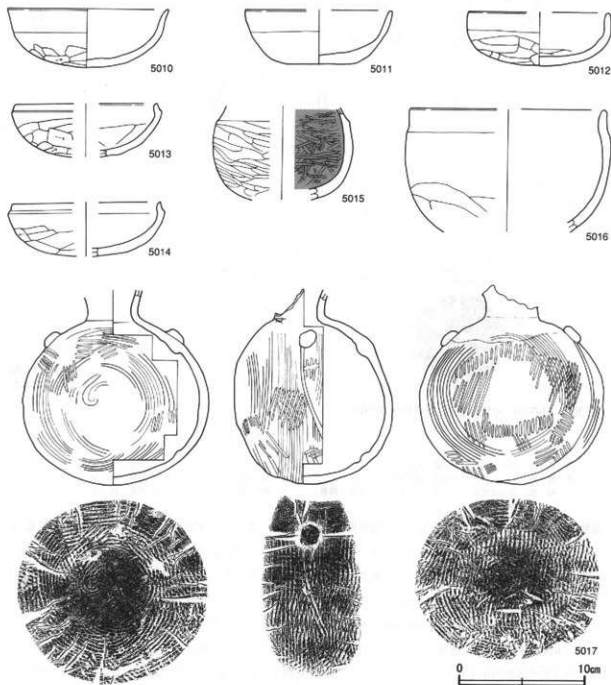
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 細り強
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子・粘土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量

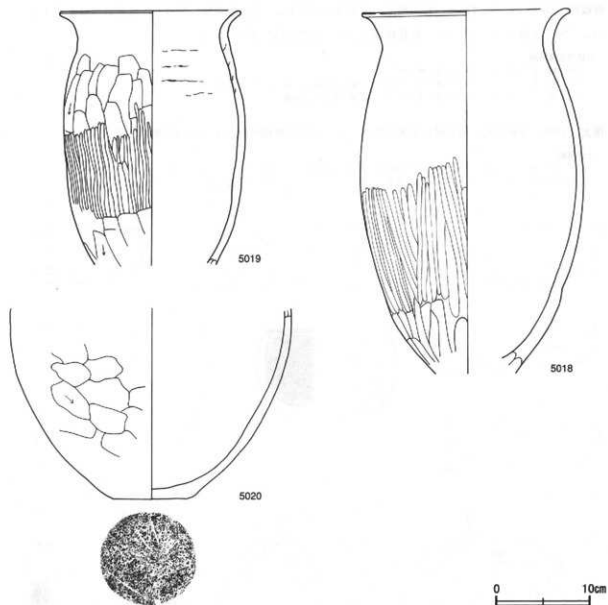
覆土 10層に分層され, 第6層は貼床である。レンズ状の堆積状況を示し, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 黒色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量



第12図 第603C号住居跡出土遺物実測図(1)



第13図 第603C号住居跡出土遺物実測図(2)

- | | | | |
|-------|-------------------------------|--------|---------------|
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量、締り弱 | 8 褐色 | ロームブロック多量、締り強 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック中量、締り強 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量、締り強 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・炭化粒子微量、
締り強 | 10 黒褐色 | ロームブロック中量、締り強 |

遺物出土状況 遺物は北西側を中心に土師器片762点(坏207、甕555)、須恵器片7点(坏2、甕4、提瓶1)が出土している。5010は南部の、5015・5019・5020は中央部から北西部にかけての床面から出土している。5017は南部の覆土下層から出土しており、破断面もあまり摩滅しておらず、住居の廃絶後それほど時間をおかずに廃棄されたものと考えられる。5018は甕の左袖部の先端に逆位で埋め込まれていた。甕の内側に向いていた部分だけが焼けて赤変しており、袖部の補強材として使用されたものと考えられる。

所見 本跡は第603A号住居跡・第603B号住居跡の2度にわたる拡張・建て替えを経て構築されており、当遺跡における当該期の中心住居の一つといえる。5017は肩部の把手が退化してボタン状になっており、焼成がやや甘く、近在の甕のものと考えられるが、産地の特定はできなかった。時期は出土土器と第603A・603B号住

居跡との関係から、7世紀前半と考えられる。

第603C号住居跡出土遺物観察表 (第12・13図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5010	土師器	坏	12.7	4.7	—	小粒、石英、赤色粒子	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	南東部床面	80%、PL.26
5011	土師器	坏	[11.5]	4.2	5.2	白雲母	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ、体部、底部外面ヘラ削り後ナデ	南東部中層	80%、PL.26
5012	土師器	坏	[11.1]	4.3	—	赤雲母、純灰子	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北西部下層	45%
5013	土師器	坏	[11.2]	(4.2)	—	石英、赤雲母、赤色粒子	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北西部下層	35%
5014	土師器	坏	[11.7]	(4.3)	—	赤色粒子	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	南東部下層	30%
5015	土師器	碗	—	(7.5)	—	赤雲母、赤色粒子	灰白	普通	普通	口縁部外面横ナデ	北西部床面	20%
5016	土師器	碗	[15.5]	(9.8)	—	小粒、石英、赤色粒子	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北西部下層	30%
5017	灰磁器	磁瓶	—	(15.4)	—	小粒、石英	灰白	不良	体部カキ目模刻み、肩部小突起あり付	南東部下層	90%、PL.26	
5018	土師器	壺	21.0	(37.3)	—	小粒、石英、長石、赤雲母	明赤褐色	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	臺外縁部内	80%、炭熱灰、PL.26
5019	土師器	壺	18.8	(27.1)	—	石英、長石	灰白	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北西部床面	75%、炭熱灰、PL.26
5020	土師器	甕	—	(19.8)	8.5	石英、長石	灰白	普通	普通	内面ナデ、底部外面本素焼	北西部床面	30%

第606A号住居跡 (第14図)

位置 調査区東部のF12f3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第608号住居跡を掘り込んでいる。当初は1軒の住居跡として調査を進めたが、2回にわたり建て替えが行われていると判断し、古い順から第606A号・第606B号・第606C号住居跡として調査を実施した。
規模と形状 長軸4.7m、短軸4.3mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は、四方の壁がすべて拡張されており不明である。

床 ほぼ平坦で、中央部は貼床され踏み固められている。壁溝が全周しており、間仕切り溝が北東側と南西側に1条ずつ検出された。

竈 北東側の中央部に床面が抜けている部分があり、火床面の痕跡と考えられる。竈は拡張の際に取り壊されたと推測され、上部構造の痕跡はとどめていない。

ピット 5か所。P1・P2は25~30cmで主柱穴の可能性もあるが、確定はできない。P3は深さ13cmで、南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P4・P5は深さ10cmで、間仕切り溝に伴うものの可能性がある。

P3土層解説

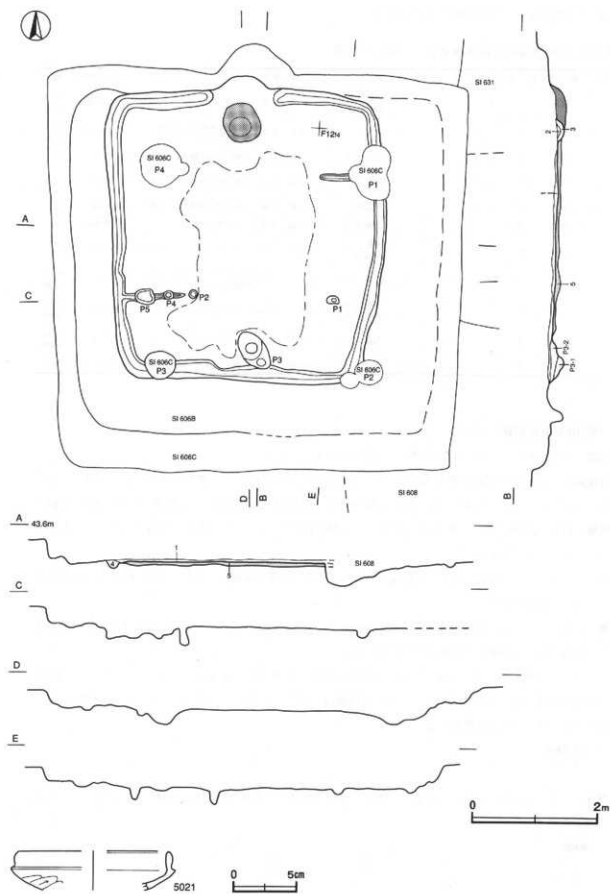
- 1 黒褐色 ロームブロック微量 2 灰褐色 ロームブロック少量

覆土 5層に分层され、第5層は貼床である。本跡を拡張して第606B号住居を構築しているため、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 4 暗褐色 ロームブロック少量
2 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量 5 褐色 ロームブロック少量、埴り強
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片27点(坏5、甕22)が出土しているが、多くが細片で図示できるものは少なかった。



第14图 第606A号住居跡・出土遺物実測図

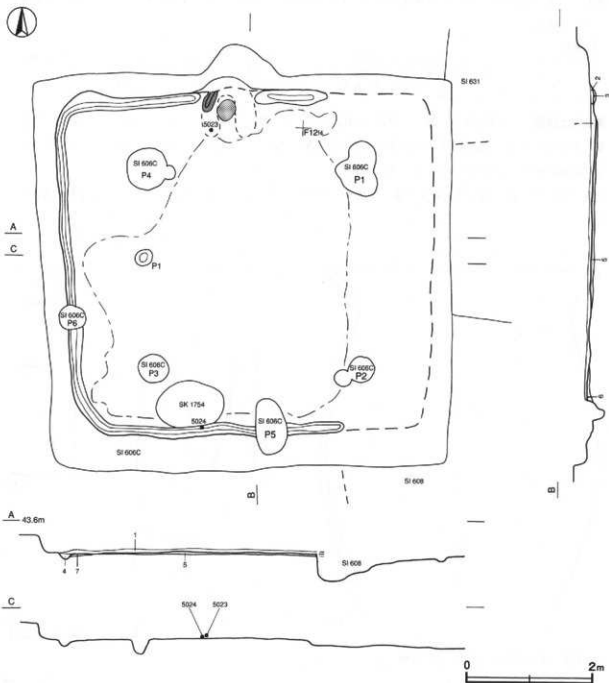
所見 第606B号住居への拡張・建て替えを行う以前の住居であり、時期は出土土器と第606B号住居の年代から、7世紀初頭から前葉と考えられる。

第606A号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
5021	土師器	坏	[12.0]	(3.1)	—	石英、長石	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	覆土中	10%

第606B号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区東部のF12f3区に位置し、平坦部に立地している。



第15図 第606B号住居跡実測図

重複関係 第606A号住居跡を拡張して構築しており、本跡を拡張して第606C号住居が構築されている。第608号住居跡を掘り込み、第1754号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸約5.9m、短軸5.4mの方形と推定され、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は、四方の壁がすべて拡張されており不明である。

床 ほほ平坦で、中央部は貼床され踏みめられている。溝溝が東壁以外の三方の壁際を巡っている。

竈 北壁際の中央部に床面が欠けている部分があり、火床面の痕跡と考えられる。竈は拡張の際に取り壊されたと推測され、上部構造の痕跡はほとんどとどめていない。

ピット 1か所。P1は深さ12cmで、西側中央にあるが、性格は不明である。主柱穴は拡張後の第606C号住居でも同じ場所を柱穴として使用したために、検出されなかったものと考えられる。

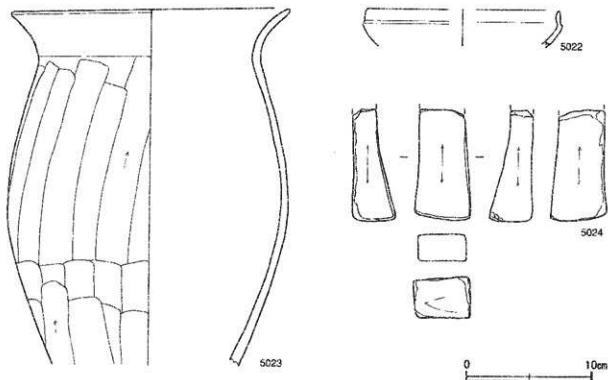
覆土 7層に分類され、第5層は貼床である。本跡を拡張して第606C号住居を構築しているため、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、粘性強 | 5 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック散見、埴り強 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量、粘性強 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック散見 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、粘性強 | 7 灰褐色 | ロームブロック少量、埴り強 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片80点（坏6、甕74）、須恵器片1点（甕）、石器1点（砥石）が出土している。5023は竈の左袖部があったと推測される場所からつぶれた状態で出土し、片面だけが被熱し赤変していることから、袖部の補強材として使用されていたと考えられる。

所見 時期は、第603A号住居跡を拡張して構築した住居であることと出土土器から、7世紀前半と考えられる。



第16図 第606B号住居跡出土遺物実測図

第606 B号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	変成	手法の特徴	出土位置	備考
5022	土師器	坏	(18.3)	(3.0)	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	覆土中	10%
5023	土師器	甕	22.2	(28.7)	-	小礫、良石、墨赤母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	甕左縁部内	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5024	甕石	(9.0)	4.6	3.3	173	褐色凝灰岩	紙面4面、溝状の溝痕2本	南壁際内	PL46

第606C号住居跡 (第17・18図)

位置 調査区東部のF12f3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第606B号住居跡を拡張して構築しており、第608・631号住居跡を掘り込み、第1754号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.6m、短軸6.4mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は24~26cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部は貼床され踏み固められている。壁溝が全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。笑口部から煙道部までは125cmで、壁外へ50cmほど掘り込んでおり、袖部幅は170cmである。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は赤変しているものあまり焼け締まっていない。頻繁に灰の掻き出しを行いながら、長期間燗を使用していたと推測される。

覆土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量、締り強	11 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量
2 粘土ブロック		12 灰褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	13 にぶい赤褐色	粘土ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、締り強
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック微量	14 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
5 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック微量	15 にぶい赤褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、締り強
6 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	16 暗褐色	ローム粒子・粘土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量、粘性・締り強
7 焼土ブロック		17 灰褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量
8 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、ローム粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性・締り強
9 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	19 灰褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
10 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子・小礫微量、粘性弱	20 灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量

ピット 7か所。主柱穴はP1~P4が相当し、深さは40~70cmである。P5は深さ46cmで、南壁際中央の竈に對する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P6・P7の性格は不明である。

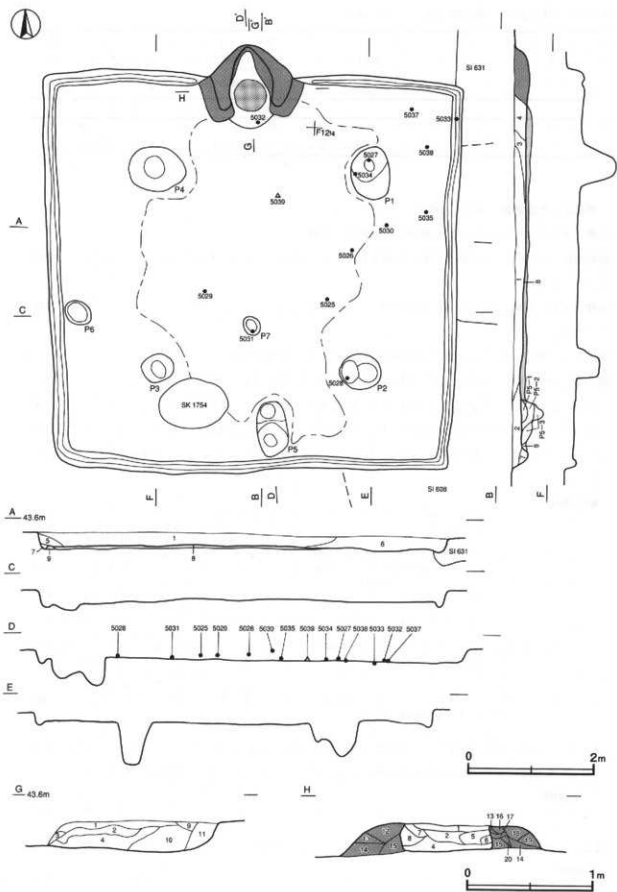
P5土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	3 暗暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量、粘性強
2 灰褐色	ロームブロック少量、粘性強		

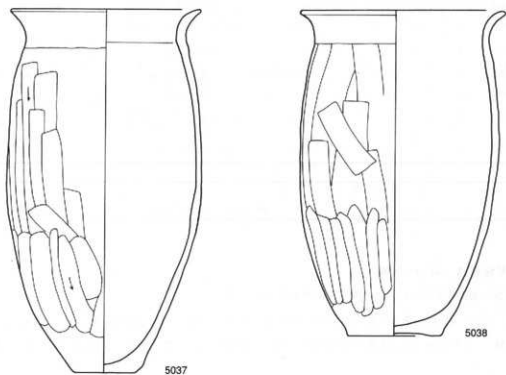
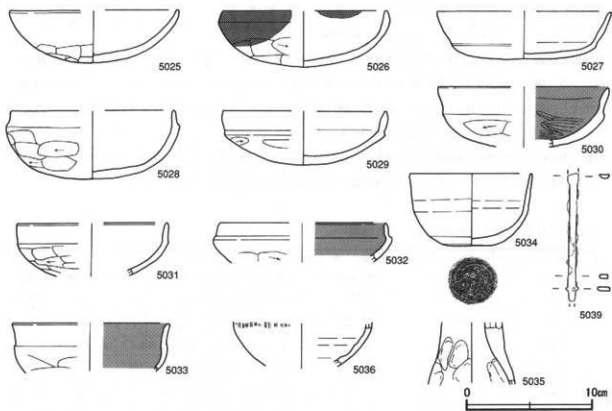
覆土 9層に分層され、第8層は貼床である。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土ブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	5 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		



第17图 第606C号住居跡実測图



第18图 第606C号住居跡出土遺物実測図

- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化穀子・粘土上ア
ロック散見
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化穀子少量
- 8 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子少量、粘土・粘土上ア
- 9 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量、粘土上ア

遺物出土状況 土師器片591点（坏165、甕426）、須恵器片10点（坏7、甕2、甕1）、土製品1点（支脚）、鉄製品1点（鐵）が中央部から北東部にかけてやや多く出土している。5027・5028・5034・5037～5039は床面から出土し、特に5037・5038は土圧でつぶれた状態で出土しており、これらは住居の廃絶時に遺棄されたものと考えられる。5032は竈内から、5033は東側の壕溝中から出土している。

所見 第606A号住居跡・第606B号住居跡の2度にわたる拡張・建て替えを経て構築されており、当遺跡における当該期の中心住居の一つといえる。時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。

第606C号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	紋様	手法的特徴	出土位置	備考
5025	土師器	坏	[13.4]	4.1	-	黒石・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	中央部中層	60%, PL26
5026	土師器	外	[13.0]	4.5	-	黒雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	東部中層	20%, 保存者
5027	土師器	坏	[13.8]	3.9	-	赤・赤石・黒雲母・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、底部内外面ヘリ張りナデ	北東部床面	20%
5028	土師器	坏	[13.0]	5.6	-	赤・赤雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	南東部床面	40%
5029	土師器	坏	[13.0]	4.3	-	黒雲母・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ、底部外表面ヘリ張りナデ	中央部中層	30%
5030	土師器	坏	[13.5]	(4.9)	-	赤・赤雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ	東部上層	30%
5031	土師器	坏	[11.9]	(4.2)	-	黒雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	中央部下層	20%
5032	土師器	坏	[13.2]	(3.2)	-	赤色粘土	灰褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	竈内	3%
5033	土師器	坏	[12.6]	(3.7)	-	赤石・赤色粘土	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ	東部壕溝内	10%
5034	須恵器	坏	9.7	3.8	3.4	長石	黄灰	普通	底部四角ヘリ切り、体部内外面口ロナデ	北東部床面	75%, PL26
5035	土師器	高坏	-	(5.0)	-	長石・白雲母	褐灰	普通	内外面指掛凹	東部下層	5%
5036	須恵器	甕	-	(3.5)	-	長石	灰	良好	体部内外面口ロナデ	東上中	3%
5037	土師器	甕	19.2	37.3	6.2	石英、長石	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ、底部外表面水受け	北東部床面	20%, 焼熟度, PL27
5038	土師器	甕	20.7	33.5	9.6	石英、長石	にぶい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北東部床面	95%, 焼熟度, PL27

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5039	甕	(10.2)	0.9	0.33	(10.6)	鉄	器身先端、基部欠損、研削	中央部床面	PL48

第608号住居跡（第19・20図）

位置 調査区東部のF1214区に位置し、半田部に立地している。

重複関係 第631号住居跡を掘り込み、第271・606A・606B・606C・607号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一边が約6.7mの方形と推定され、主軸方向はN-10°-Wである。竈高は24～32cmで各壁ともほぼ直立している。

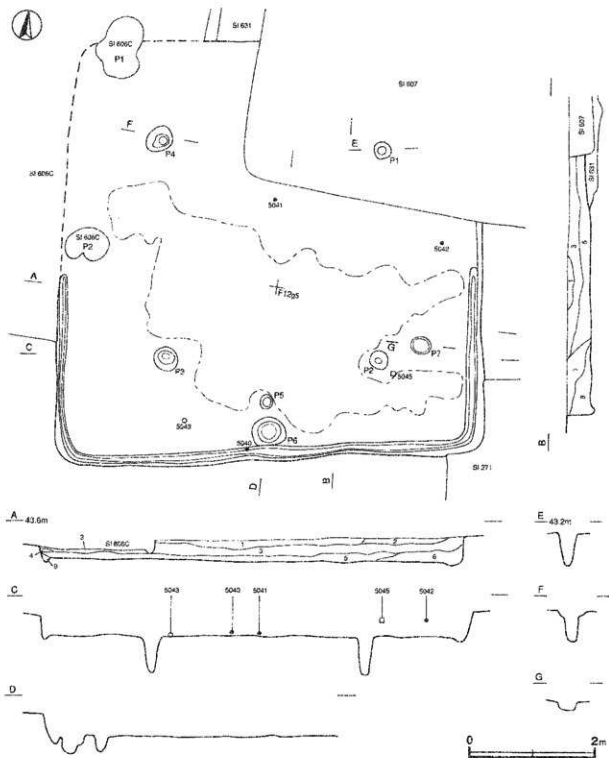
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壕溝は中央よりも南の壁際を半周しており、他の遺構に掘り込まれている部分にも巡っていたものと推測される。

ピット 7か所。P1～P4は深さ50～60cmで主柱穴と考えられる。P1は第631号住居跡の床下から検出された。P5・P6は深さ約30cmで、南壁際中央にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P7は深さ12cmで、性格は不明である。

覆土 9層に分層され、レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

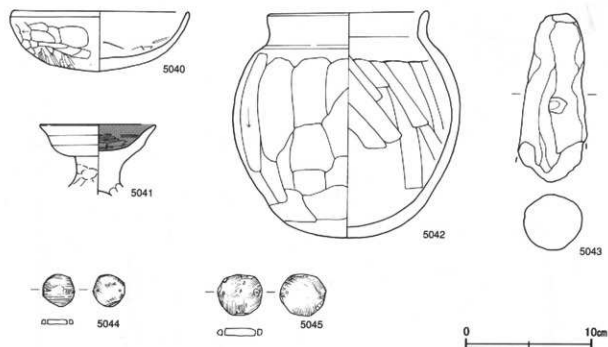
- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、締り強 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |



第19図 第608号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片277点(環90, 高環2, 甕185), 須恵器片10点(環2, 甕8), 弥生土器片3点, 土製品1点(支脚), 石器1点(磨石), 石製品2点(双孔円板)が全域に散在して出土している。5040は南壁際中央部, 5041は中央部の覆土下層からそれぞれ出土し, 5042は東壁際中央部, 5045は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 7世紀初頭から前葉と考えられる第606A号住居跡に掘り込まれていることと出土土器から, 6世紀後葉と考えられる。



第20図 第608号住居跡出土遺物実測図

第608号住居跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5040	土師器	坪	13.8	4.8	-	長石, 赤色 粒子	にぶい赤黄	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 輪積み痕	南壁際中層内	80%, PL27
5041	土師器	高環	9.3	(5.7)	-	長石, 黒・金雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ 後ヘラミガキ, 脚部外面指頭圧痕	中央部下層	60%, PL27
5042	土師器	小形甕	12.8	18.1	-	長石, 赤色 粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	東壁際中層	80%, PL27

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5043	支脚	(13.5)	(5.5)	2.9	(330)	粘土	ナデ, 指頭圧痕, 被熱痕, 粘土に石英, 長石含む	南西部床面	PL44

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5044	双孔円板	2.6	2.5	0.3	4.0	滑石	両面研磨	覆土中	100%, PL45
5045	双孔円板	3.3	3.6	0.5	10.3	滑石	両面研磨	南東部中層	95%, PL45

第623A号住居跡 (第21図)

位置 調査区東部のF11c8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第604号住居、第42号掘立柱建物跡、第1756・1758・1793号土坑、第38号溝に掘り込まれている。
 また、当初は1軒の住居跡として調査を進めたが、南・西側を拡張して建て替えが行われていると判断し、建て替え前を第623A号住居跡、建て替え後を第623B号住居跡として調査を実施した。

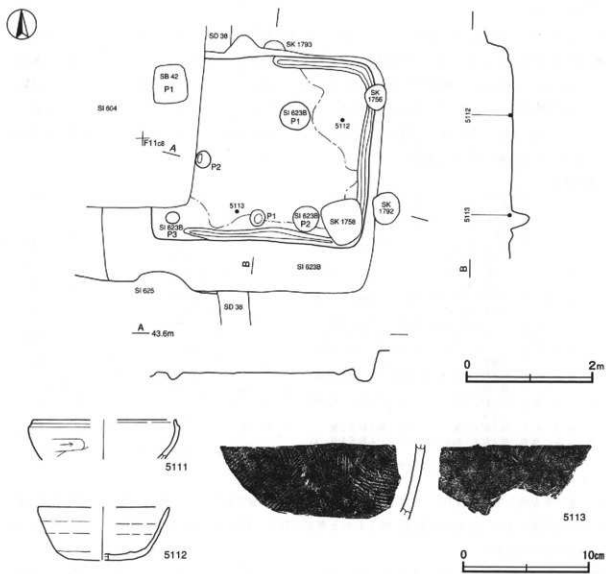
規模と形状 長軸3.4m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は、四方の壁がすべて拡張されており不明である。

床 ほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。壁溝が西側と北壁の一部を除き巡っている。

ピット 2か所。P1は深さ30cmで南壁際中央に位置し、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2は深さ10cmで西部に位置するが、性格は不明である。

遺物出土状況 土師器片13点(坏7, 甕6), 須恵器片1点(甕)が出土している。

所見 時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。



第21図 第623A号住居跡・出土遺物実測図

第623A号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色	調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
511	土師器	坏	[11.4]	(5.2)	-	-	長石	明赤褐色	普通	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	甕上甲	10%
512	須恵器	坏	[16.4]	4.3	[5.4]	-	長石、黒色鉄	黄灰	普通	普通	底部同軸へちま切り	北東部床面	20%
513	須恵器	甕	-	(6.0)	-	-	長石	黄灰	普通	普通	外面叩き	南部床面	10%

第623B号住居跡 (第22・23図)

位置 調査区東部のF11c8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第623A号住居跡を拡張して本跡を構築している。第604・625号住居、第42号掘立柱建物跡、第1756・1758・1792・1793号土坑、第38号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.3m、短軸3.8mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は8~25cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平川で、北東部を除き踏み固められており、壁溝が他遺構に掘り込まれた部分を除き巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは90cmで、壁外へ25cmほど掘り込んでおり、袖部幅は115cmである。天井部が一部残存している(第1・2層)。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に壁土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は地山を10cmほど掘り込んだ部分を、炭化粒子や粘土を含む土で埋め戻した上にあり、火床面は被熱し赤変硬化している。第13層が火床面で、第14~16層は竈の掘り方である。

竈土層解説

1	褐褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量、粘性弱、締り強	14	灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子少量、締り強
2	黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量、締り強	15	灰褐色	粘土粒子少量、焼土粒子中量、ロームブロック少量、締り強
3	褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、締り強	16	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘性強
4	褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、締り強	17	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量
5	灰褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘性強	18	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
6	暗赤褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	19	灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量、締り強
7	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、粘土粒子微量	20	灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量、締り強
8	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	21	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量、粘性・締り強
9	暗赤褐色	粘土粒子少量、粘土粒子中量、ローム粒子微量、締り強	22	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
10	暗赤褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	23	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
11	暗赤褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量	24	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、締り強
12	にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量、粘性強	25	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
13	赤褐色	粘土粒子少量、粘土粒子中量、ローム粒子少量、粘性強			

ピット 6か所。主柱穴はP1~P3が相当し、深さは48~55cmである。P4は深さ30cmで南壁際中央の竈に對面する位置にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。P5・P6は深さ10cmで中央部に位置しているが、性格は不明である。

覆土 7層に分層される。各層に炭化物、焼土があり、ロームをブロック状に不均一に含むことから、人為堆積と考えられる。また、竈の前面に粘土・焼土塊が見られる。

土層解説

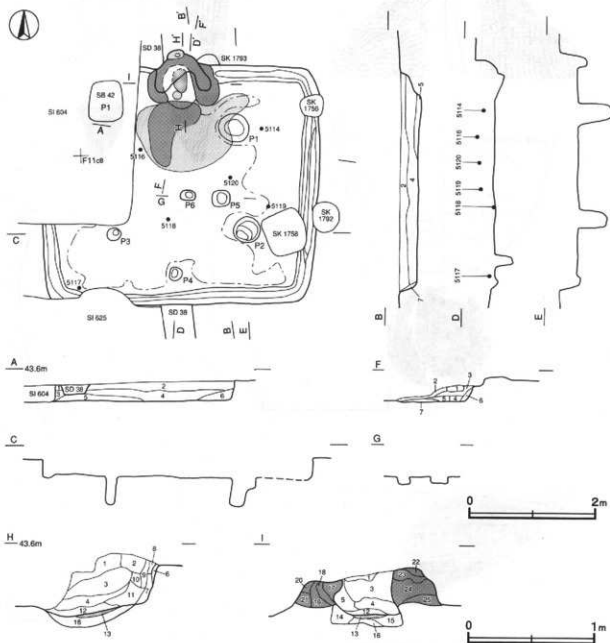
1	灰褐色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子微量、締り弱	2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量、締り強
---	-----	-------------------------	---	-----	-----------------------------

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|----------------------|
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量、締り弱 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量、締り弱 |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量、締り弱 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量、締り弱 |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

粘土・焼土層解説

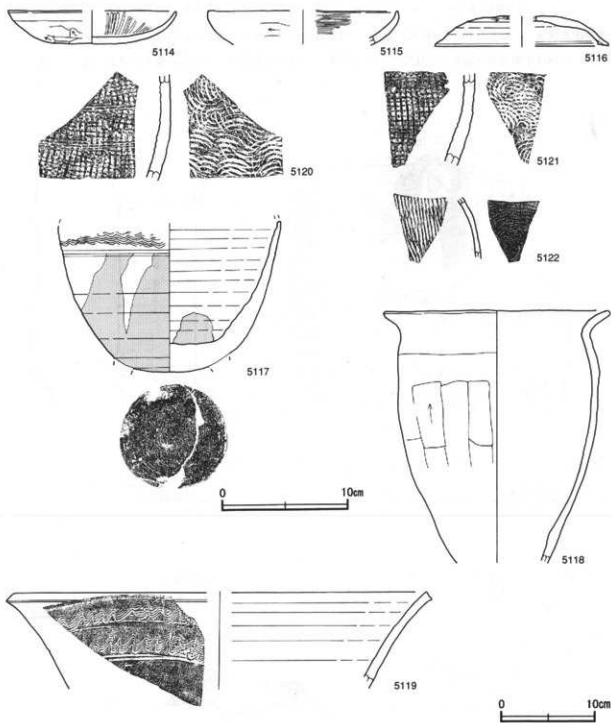
- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|-----------------------------------|
| 1 灰褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量、締り強 | 5 暗褐色 | 粘土粒子・焼土粒子少量、ローム粒子微量、粘性強 |
| 2 暗褐色 | 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 灰褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量、締り強 |
| 3 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量、粘性強 | 7 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量、粘性・締り強 |
| 4 灰褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子極微量、締り強 | | |

遺物出土状況 土師器片107点(埴27, 甕80), 須恵器片10点(埴2, 蓋1, 台付長頸瓶1, 甕6)が出土している。5118は中央部の床面から土圧でつぶれた状態で、5117は南西コーナー部の覆土下層から出土している。



第22図 第623B号住居跡実測図

所見 竈の前面に粘土・焼土塊があり、住居の廃絶時に投棄されたもの、あるいは住居の壁が倒壊したものと推測される。5117はもともと台付長頸瓶であったが、破損後に椀に整形し、転用したものである。体部の破断面を打ち欠き、研磨して擬口縁とし、高台の分離した貼り付け部を研磨して丸底状にしている。時期は、出土土器から7世紀末葉から8世紀初頭と考えられる。



第23図 第623B号住居跡出土遺物実測図

第623B号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

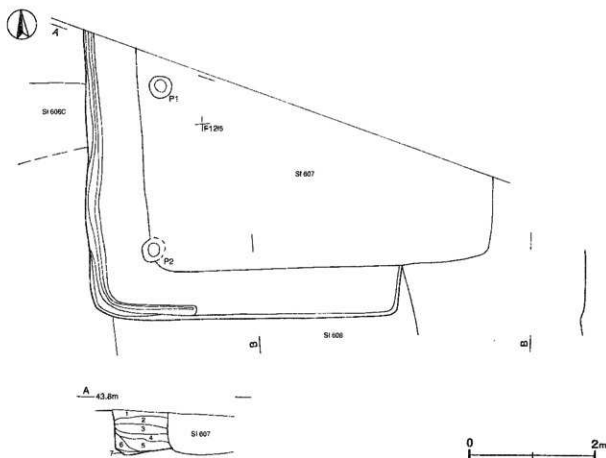
番号	種別	容体	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5114	土師器	坏	13.4	2.6	-	長石	赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ、内面放射状ヘラミガキ	北東部中層	20%
5115	土師器	坏	15.0	(2.7)	-	長石	明赤褐色	普通	口縁部外面横ナデ	覆上中	10%
5116	須恵器	壺	13.8	(2.4)	-	石英、長石	灰白	普通	大井部回転ヘラ削り	中央部上層	20%
5117	須恵器	白付長頸瓶	-	(11.8)	-	小礫、長石、黒色粒子	暗灰	良好	ロクロ成形、体部上方波状沈線(3本1単位)・沈線、高台貼り付け	西面下層	CS、須恵器類の土質調査結果より、本器は須恵器類に属するものと認められる。
5118	土師器	甕	23.4	(27.0)	-	石英、長石	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	中央部底面	80%、PL27
5119	須恵器	甕	43.6	(10.4)	-	小礫、長石	灰	普通	口縁部下波状沈線(4本1単位)・沈線	東部中層	10%
5120	須恵器	甕	-	(8.5)	-	長石、黒色粒子	灰白	普通	外面厚き、内面同心円状で具痕	中央部中層	5%
5121	須恵器	甕	-	(7.5)	-	長石、黒色粒子	暗灰	普通	外面厚き、内面同心円状で具痕	覆上中	5%
5122	須恵器	甕	-	(4.7)	-	長石	灰白	普通	外面厚き、内面同心円状で具痕	覆上中	5%

第631号住居跡 (第24図)

位置 調査区東部のF12f4区に位置し、平坦部に立地している。

電線関係 第606B・606C・607・608号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は4.9mで、南北長は北側が調査区外へ延びており、4.6mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。壁高は70cmで、各壁ともほぼ直立している。



第24図 第631号住居跡実測図

床 はほぼ平坦である。壕溝が西壁から南西コーナー部にかけて確認された。

ピット 2か所。P1・P2はその位置から主柱穴と考えられる。

覆土 7層に分層される。良好に残存している部分は少ないものの、レンズ状に堆積していると推定され、自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量、粘性強
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量、粘性強	7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘り強
4 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 木跡に明確に帰属する遺物はない。

所見 時期は6世紀後葉と考えられる第608号住居に掘り込まれていることから、それ以前であると考えられる。

第632号住居跡（第25区）

位置 調査区東部のF11e9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第633・634号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.2mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は42～45cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。また、壁が半円筒状に10cmほど掘りくぼめられた場所が西・南壁に2か所ずつある。

床 はほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。壁溝が北・南壁際の一部にのみ確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは60cmで、壁外へ25cmほど掘り込んでおり、袖部幅は85cmである。天井部は残存していない。袖部はロームと粘土で構築されているが、右袖部が第634号住居に掘り込まれており、左袖部も遺存状態が悪い。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ36cmで南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出人口11施設に伴うものと考えられる。P2は深さ32cmで、竈前にあり柱穴とは考えにくく、性格は不明である。

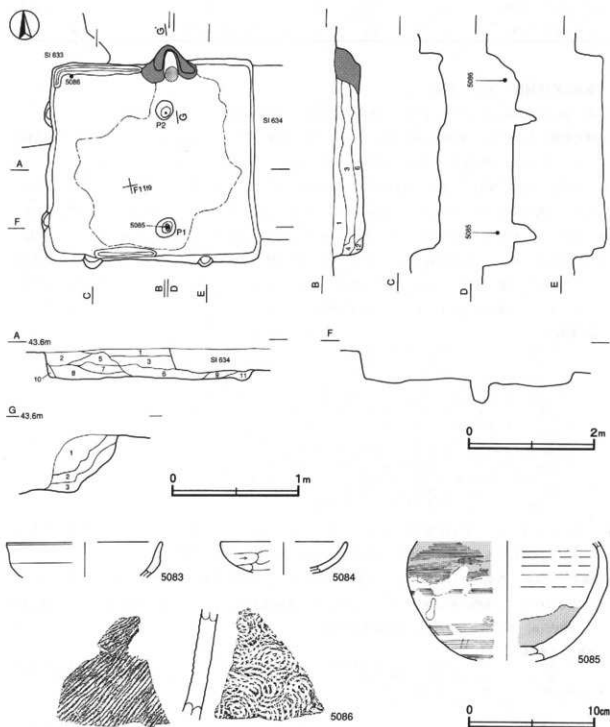
覆土 11層に分層される。ブロック状に堆積し、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量	7 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック微量、粘り弱	10 黒褐色	ロームブロック少量、粘り弱
5 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	12 黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片132点（坏43、甕89）、須恵器片12点（坏4、甕1）、長頸瓶1、甕6）、灰釉陶器片1点（碗カ）が南部にやや集中して出土しているが、多くが細片で図示できるものは少なかった。灰釉陶器片は北東部の覆土中から出土しているが、時期から判断して第634号住居のものである可能性があり、細片のため一覧表（表13）に記載した。

所見 壁外へ半円筒状に10cmほど掘りくぼめた場所が西と南の壁に2か所ずつ計4か所あり、第634号住居に掘り込まれている東壁にもあった可能性がある。4か所とも床面は掘り込んでいない。計画的な配置がうかがえ、堅穴住居の壁を支える柱の跡である可能性がある。時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。



第25図 第632号住居跡・出土遺物実測図

第632号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	口径	口径	底径	胎土	色調	焼成	平法の特徴	出土位置	備考
5083	土師器	坏	[12.2]	(2.7)	-	灰石・赤褐色	明赤褐色	普通	1.縁部内外面横ナテ	覆土中	10%
5084	土師器	坏	[10.0]	(2.5)	-	灰石	にぶい赤褐色	普通	1.縁部内外面横ナテ	覆土中	10%
5085	須恵器	長頸瓶	-	(9.6)	-	灰石・赤褐色	黄灰	良好	カキ目調整	南部中層	3%, 4% 内自 当量 2.5% 程度
5086	須恵器	壺	-	(8.9)	-	灰石	灰	普通	外面叩き、内面滑て其肌	北西部下層	5%

第666号住居跡 (第26~29図)

位置 調査区西部のD5 a4区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

規模と形状 長軸6.8m、短軸6.7mの方形で、貯蔵穴1が南壁の壁外へ80cmほど張り出している。主軸方向はN-9°Eである。壁高は24~44cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 南東から北西へ傾斜しており、北西部では床面は確認できなかった。東部へのみ硬化面が確認されたが、中央部から西部も踏み固められていたと推測される。壁溝が北壁の東半分から東・南壁にかけて確認された。

竈 東壁のやや南寄りにつ設されている。焚口部から煙道部までは115cmで、壁外へ15cmほど掘り込んでおり、袖部幅は90cmである。天井部は残存していない。袖部は砂質粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は地山を15cmほど掘り込んだ部分を、ロームを主体とする土で埋め戻した1にあり、火床面は被熱し赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量、糊り強
- 2 暗赤褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック多量、粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量、粘性・糊り強
- 4 暗赤褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量、粘性強
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗赤褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量、糊り強
- 9 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 10 暗赤褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 灰褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量、粘性・糊り強
- 12 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量、糊り強
- 13 にぶい赤褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。P1~P4は深さ20~65cmで支柱穴と考えられる。P5は深さ30cmで、南壁際中央にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P6は深さ50cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は長軸150cm、短軸130cmの長方形で、南壁を掘り込み壁外へ80cmほど張り出している。深さは65cmで、東西の壁は途中で段になっており、底面は平坦である。貯蔵穴2は南東コーナー部に位置し、径約55cm、深さ15cmの円形で、底面は凹状である。

貯蔵穴1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 産沼バミス中量、ロームブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量

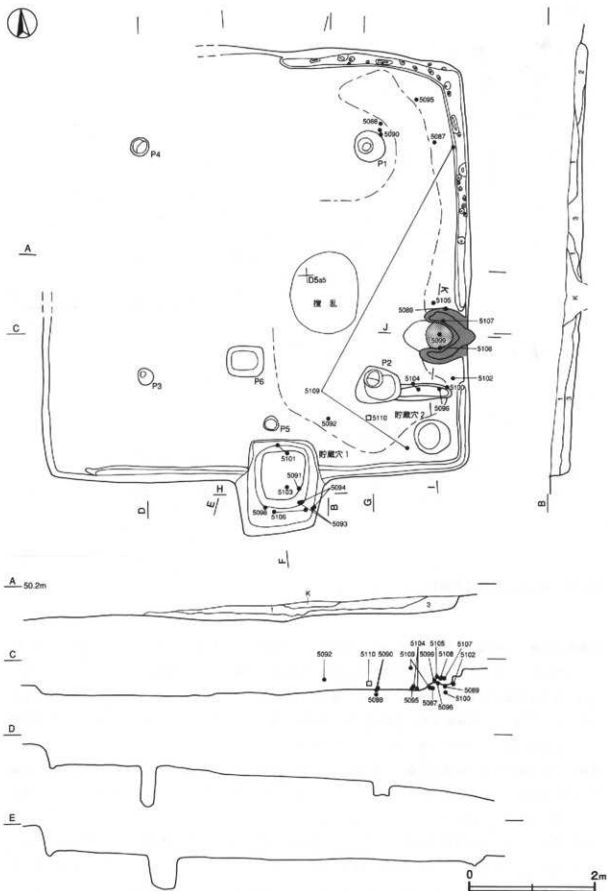
貯蔵穴2土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、糊り強
- 2 暗赤褐色 ロームブロック・産沼バミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量、糊り強

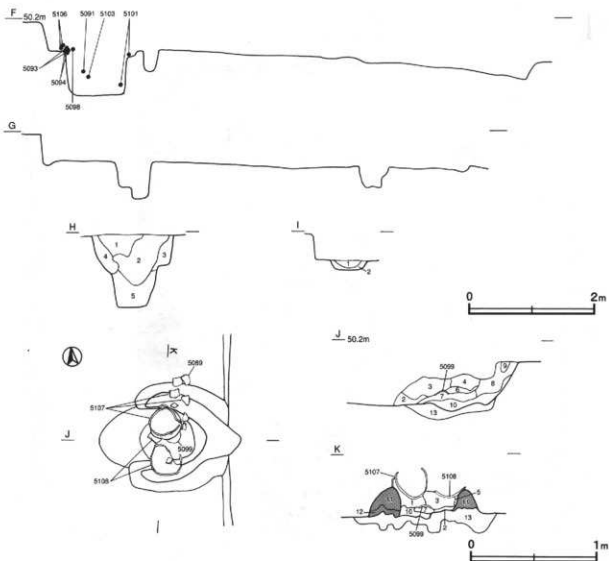
覆土 3層に分層される。南側から流れ込んだ縁相を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化物少量、ローム粒子微量、糊り強
- 2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、糊り強
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、糊り強



第26图 第666号住居跡実測图(1)

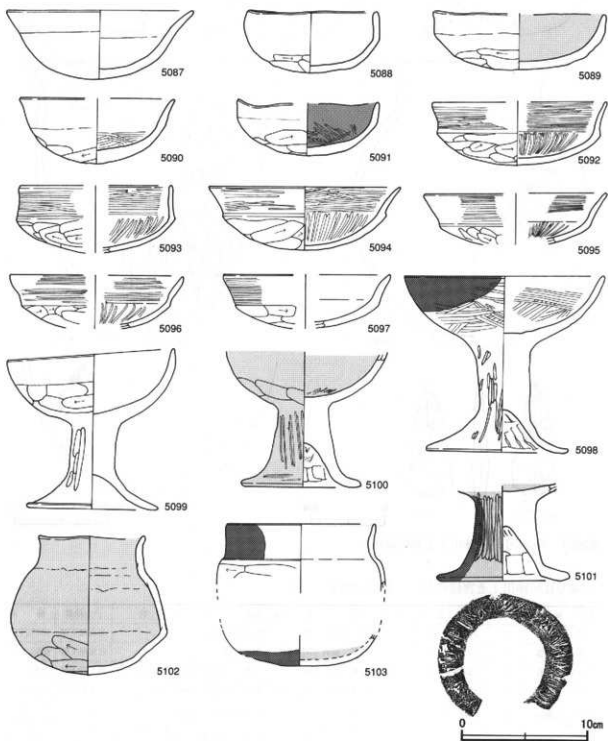


第27図 第666号住居跡実測図(2)

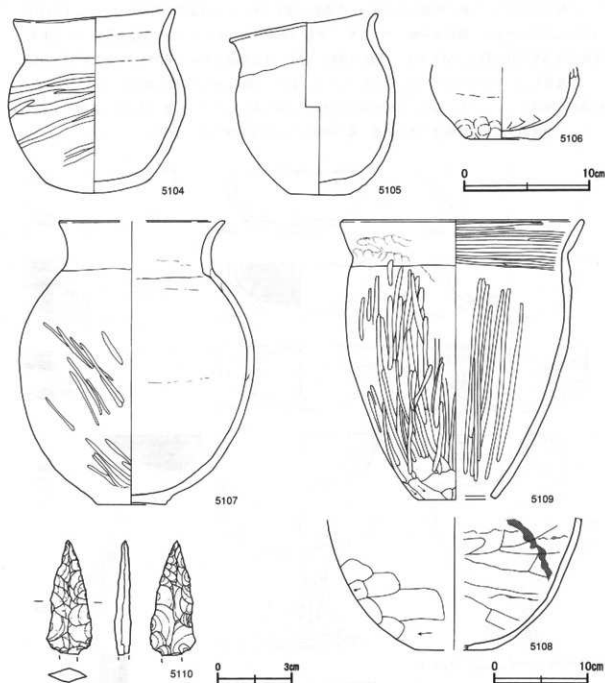
遺物出土状況 土師器片542点(坏167, 碗6, 高坏14, 小形甕19, 小形甕61, 甕230, 飯45), 須恵器片2点(坏), 弥生土器片20点, 石器1点(有舌尖頭器)が北東部と南東部及び竈内からやや集中して出土している。5100・5102・5104は南東部の床面から出土している。竈内からは向かって左に5107, 右に5108が火床面の約15cm上に正位で並んで出土し, 火床面上やや左寄りに5099が逆位で出土している。また, 貯蔵穴1内の主に覆土中層付近からは5091・5093・5094・5098・5101・5103・5106が出土している。

所見 壁外へ張り出す, 特異な貯蔵穴(貯蔵穴1)を持つ遺構である。貯蔵穴1内からは土師器高坏や内面に赤色顔料が付着した土師器坏などが出土している。これらはおおむね覆土の中ほどから出土しており, 貯蔵穴1の東西の壁が途中で段になっていることから判断すると, 中間に板などの仕切り(棚)が付設されていた可能性が考えられる。竈は東壁に付設されており, 火床面より約15cm上から土師器甕が並んで出土している。天井部は残存していなかったが, ほぼ使用時のまま埋没したものであると仮定した場合, 二掛け横並び竈である可能性がある。茨城県内の那珂川以北における切石組みの二掛け横並び竈では, 袖幅が50cm以上あるものは二掛け横並び竈になる可能性があり, 支脚が左に位置することが多いことと, 左右の甕の大きさや使用痕跡など

から左側で米を蒸し、右側で水物を煮るといった機能分化がされていた可能性が指摘されている(櫻村宣行「那珂川以北を中心とする「切石組み甕」の一考察」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集—』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会2003年4月)。本跡の袖幅(内寸)は約55cmであり、逆位で出土している5099は支脚として使用していたと考えられ、左にやや寄っている。また、右側の5108は土師器甕の体部下半のみであるが、破断面が摩滅していること、内部に帯状の炭化物付着が認められることから、甕の体部下半を鍋のように使用したことが推測される。時期は、出土土器と甕の形態から6世紀初頭と考えられる。



第28図 第666号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 第666号住居跡出土遺物実測図(2)

第666号住居跡出土遺物観察表 (第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5087	土師器	坏	14.8	5.5	-	長石, 赤色粒子	橙	普通	内外面ナデ	北東部下層	100%, PL28
5088	土師器	坏	10.3	5.0	-	石英, 長石	明赤褐	普通	内面ヘラナデ	北東部下層	80%, PL28
5089	土師器	坏	[13.8]	4.6	-	石英, 長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	竈北脇下層	70%, PL28
5090	土師器	坏	[12.3]	5.3	-	石英, 長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	北東部下層	60%, PL28
5091	土師器	坏	[11.3]	4.5	-	石英, 長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	貯蔵穴1内	60%, 内面赤色 磨研付着, PL28
5092	土師器	坏	[13.9]	5.1	-	長石	赤	普通	内面放射状ヘラミガキ	南部中層	60%, PL28
5093	土師器	坏	[11.9]	(5.4)	-	石英, 長石	赤褐	普通	内面放射状ヘラミガキ	貯蔵穴1内	45%, 内面 器面完れ

番号	類別	器種	口径	器高	地径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5094	土師器	坏	15.0	5.1	-	石英、長石	赤	普通	内面放射状ヘラミガキ	貯蔵穴1内	45%
5095	土師器	坏	[14.6]	[4.1]	-	石英、長石	赤褐	普通	内面放射状ヘラミガキ	北東部下層	25%
5096	土師器	坏	[13.9]	[4.3]	-	長石	明赤褐	普通	内面放射状ヘラミガキ	南東部中層	10%
5097	土師器	坏	[13.2]	[4.3]	-	長石	明赤褐	普通	口縁部内面横ナテ	覆土中	10%、P1,28
5098	土師器	高坏	15.8	14.2	11.0	石英、長石、白雲母	にぶい褐	普通	頸部外面ヘラミガキ・内面ヘラナテ	貯蔵穴1内	95%、P1,28
5099	土師器	高坏	13.3	12.9	10.4	石英、長石、白雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナテ、底部・頸部内面ナテ	壺内	90%、北東部中層、P1,28
5100	土師器	高坏	-	[10.9]	9.5	石英、長石、白雲母	赤褐	普通	頸部外面ヘラミガキ・内面ヘラナテ	南東部中層	60%
5101	土師器	高坏	-	[7.6]	10.6	石英、長石	赤	普通	頸部外面ヘラミガキ・内面ヘラナテ、頸部後面に縦筋線状凹痕	貯蔵穴1内	60%、外面横ナテ
5102	土師器	壺	8.5	11.2	-	石英、長石、白雲母	赤	普通	口縁部内外面横ナテ、頸部み頃	南東部中層	95%、P1,28
5103	土師器	壺	11.8	[11.4]	-	長石	赤褐	普通	口縁部内外面横ナテ	貯蔵穴1内	60%、内面放射状・赤褐色横ナテ
5104	土師器	小形壺	12.8	14.8	-	石英、長石、白雲母	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ヘラナテ	南東部中層	95%、P1,28
5105	土師器	小形壺	11.6	14.7	4.8	石英、長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ナテ	北東部下層	95%、P1,28
5106	土師器	小形壺	-	[5.8]	6.0	石英、長石、白雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラナテ、頸部み頃、頸部横ナテ	貯蔵穴1内	30%
5107	土師器	壺	[17.6]	20.3	7.4	石英、長石、白雲母	褐	普通	口縁部内外面横ナテ、輪郭み頃	壺内	90%、北東部中層、P1,28
5108	土師器	壺	-	[14.0]	[8.0]	石英、長石	にぶい褐	普通	内面ヘラナテ、輪郭み頃、或る外面不定方向ヘラ開り	壺内	95%、北東部中層、P1,28
5109	土師器	瓶	25.7	29.8	8.2	石英、長石、白雲母	褐	普通	頸部外面横ナテ	北東部下層、南東部上層	75%、内面放射状、P1,28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5110	有蓋瓦	(4.5)	1.8	0.7	(3.90)	瓦質	基部を欠く	南東部下層	P1,45

第667号住居跡 (第30図)

位置 調査区西部のC4f0区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 長軸4.2m、短軸4.1mの方形で、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は30cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 南から北へ非常に緩やかに傾斜しており、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは90cmで、壁外へ40cmほど掘り込んでおり、袖部幅は60cmである。大井部は残存しておらず、袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床面は披熟し赤変硬化している。

壁土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性强、練り弱
- 2 灰褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子微量、粘性非常に弱、練り弱
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量、粘性強、練り弱
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性强、練り弱
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子中量

ピット 5か所。P1～P4は位置から支柱穴にあたると思われるが、深さが10～15cmと浅い。P5は深さ30cmで南壁際中央の竈に對面する位置にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。

覆土 6層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

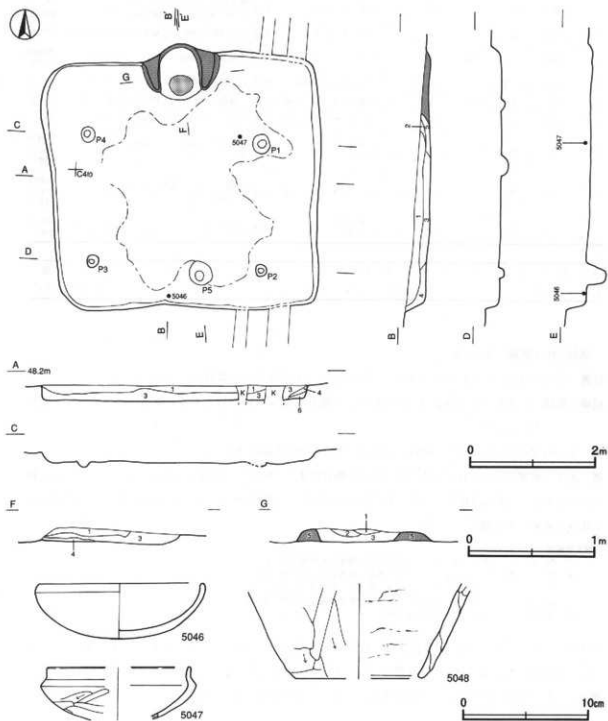
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘性强
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、粘性弱

- 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片34点(坏26, 甕4, 瓶4), 弥生土器片4点がほぼ全域に散在して出土している。5046は南壁際, 5047は北東側の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から7世紀前半と考えられる。



第30図 第667号住居跡・出土遺物実測図

第667号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5046	土師器	杯	13.0	4.4	-	長石, 赤色粘土	にぶい橙	普通	口縁部内外面ナデ, 内面ナデ	南壁際下層	80%, PL29
5017	土師器	杯	[11.3]	(4.2)	-	長石	橙	普通	口縁部内外面ナデ, 内面ナデ	北東部下層	30%
5018	土師器	瓶	-	(7.3)	[10.0]	石灰, 長石, 金 雲母, 赤色粘土	赤褐	普通	内面ナデ, 輪襷み度	覆土中	5%

第670号住居跡 (第31・32図)

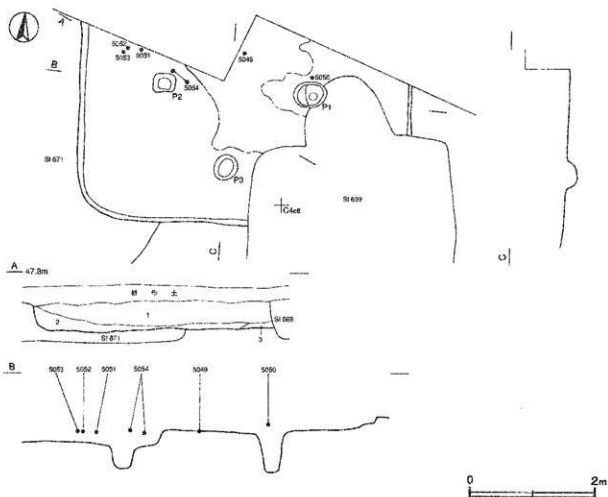
位置 調査区西部のC4e7区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第671号住居跡を掘り込み、第669号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は5.3mで、南北長は北側が調査区域外へ延びており、3.4mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。壁高は20cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ約60cmで主柱穴と考えられる。P3は深さ18cmで南壁際中央に位置し、出入口施設に伴うものと考えられる。



第31図 第670号住居跡実測図

覆土 3層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

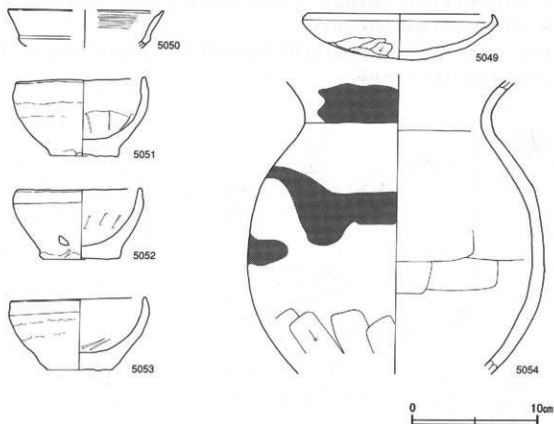
1 黒色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、綿り弱

2 黒褐色 ロームブロック微量、綿り弱

遺物出土状況 土師器片53点（坏15、高坏2、鉢7、甕29）、須恵器片1点（高台付坏）、弥生土器片3点が出土している。5049・5051～5054は中央部から西部にかけての床面から出土しており、特に5051～5053は図示できなかつたが同種のものと思われる底部片を含めると、4点が一か所からまとまって出土している。

所見 北側の大半が調査区域外にあり、南東側が第669号住居に掘り込まれているため、全容を知ることができないもの、時期は出土土器から7世紀前半と考えられる。5051～5053はほぼ同じつくりで、輪積み痕を残し、粘土粒を外面に付けたまま焼成するなど成形・調整が雑であり、日常使用するものではなく祭祀に関わる土器である可能性がある。



第32図 第670号住居跡出土遺物実測図

第670号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5049	土師器	坏	14.7	3.7	-	石英、黒雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	中央部床面	85%、内面器面残1、PL29
5050	土師器	坏	[12.2]	(3.0)	-	長石	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	中央部中層	5%
5051	土師器	鉢	10.1	6.3	5.2	長石、赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、輪積み痕	西部床面	98%、PL29
5052	土師器	鉢	9.9	5.7	6.1	長石、赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	西部床面	80%、外面に粘土粒付着、PL29
5053	土師器	鉢	10.6	5.9	5.1	長石、赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ、輪積み痕	西部床面	60%、PL29
5054	土師器	甕	-	(23.3)	-	石英、長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	西部床面	30%、外面煤付着、被熱痕

第671号住居跡 (第33・34図)

位置 調査区西部のC 4 b 6 区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第670号住居と第51号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は6.2mで、南北長は北側が調査区域外へ延びており、3.6mのみ確認できた。平面形は方形もしくは長方形と推定され、主軸方向はN-22°-Eである。壁高は12~22cmで、各壁ともほぼ直立している。

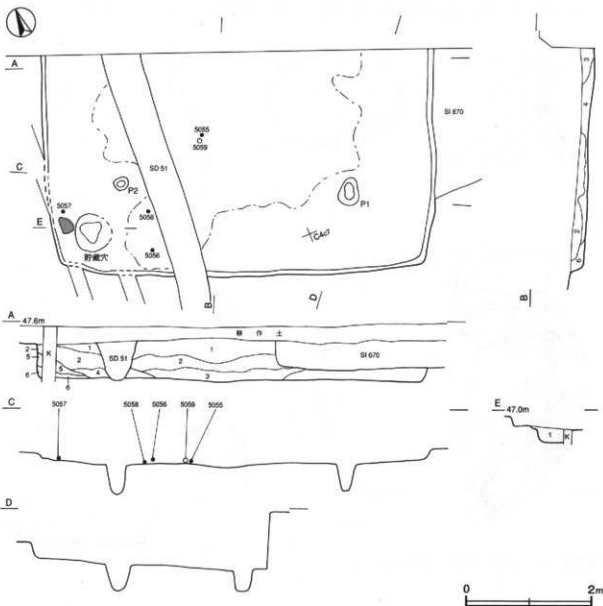
床 ほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ約45cmで主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 径約60cm、深さ25cmの円形で、南西コーナー部に位置している。土層は単一層で、堆積状況は不明である。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第33図 第671号住居跡実測図

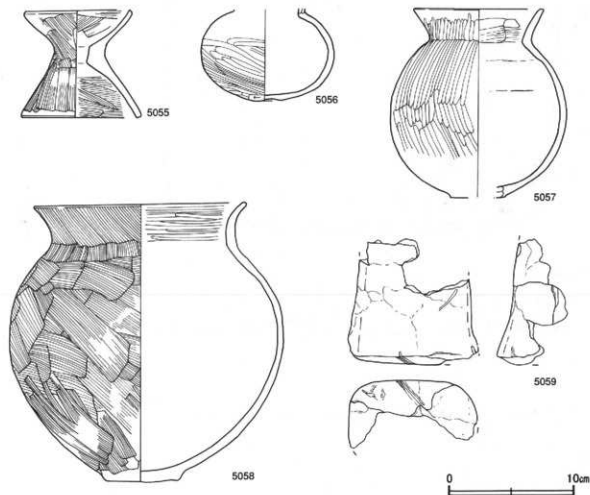
覆土 6層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|--------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量、粘性強 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量、粘性強 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子・炭化粒子微量、粘性強 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量、粘性強 |

遺物出土状況 土師器片156点(坏3, 甕145, 埴6, 器台2), 弥生土器片2点, 土製品片12点(支脚)が出土している。そのうち, 5055・5057~5059は中央部から南西コーナー部にかけての床面から出土し, 5056は南壁際の覆土下層から出土している。また, 5057と貯蔵穴の間に直径20cmほどの粘土塊が西壁に寄って出土している。

所見 5056は破断面が摩滅しており, 口縁部が破損した後に打ち欠いて調整している可能性がある。5059は「竈に付随しない土製支脚」である。多くは3~4個を組み合わせて竈で使用するものであるが, 本跡からは複数個体になると思われる破片が出土したのみであり, 個体数は確定できず, 竈も調査区域内では確認できなかった。時期は出土土器から4世紀後半と考えられる。当該期の住居跡は調査区東部から中央部には少なく, 西部に比較的多い。中心的集落は今年度調査区域よりも西にある可能性が考えられる。



第34図 第671号住居跡出土遺物実測図

第671号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5055	土師器	甗台	8.3	8.7	9.4		長石	橙	普通	口縁部内面ハケ目残ナデ	中央部床面	80%, PL.30
5056	土師器	埴	-	(7.2)	2.3		小礫, 雲母	明褐色	普通	内面ヘラナデ	南壁際下層	60%
5057	土師器	小形甗	10.2	15.1	1.4		石英, 長石, 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外側・体部外向ハケ目残ヘラミガキ, 内面ナデ	南西角床面	50%, PL.30
5058	土師器	甗	16.8	22.6	5.6		石英, 長石	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ	南西角床面	90%, PL.30

番号	器種	長さ	径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3659	支脚	(10.0)	10.4	(5.5)	(51.0)	粘土	全面ナデ, 底部正装, 底部植物繊維状・種子状の圧痕, 底面に植物繊維・長石・砂粒含む, 底面不凡, 上部直縁欠損	中央部床面	30%, 炭焼痕

第672号住居跡 (第35～38図)

位置 調査区西部のC4 b4区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2001号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一边が約7.4mの方形と推定され、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は18～24cmで各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 耕作により覆隠されているが、南から北へ緩やかに傾斜しており、壁際を除き踏み固められていると推定される。

竈 覆隠により遺存状態が悪く、袖部は一部しか確認できなかった。北側部分は調査区域外へ延びており不明である。火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床面が被熱し赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 黒褐色 色 ローム粒子・幾十粒中量
- 2 暗褐色 色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘り強
- 3 褐色 色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性強、粘り弱
- 4 灰褐色 色 焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子微量、粘性弱、粘り強
- 5 暗褐色 色 焼土ブロック多量、炭化物・粘土粒子少量、粘性弱
- 6 暗褐色 色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘性強・粘り弱
- 7 暗褐色 色 ローム粒子中量、幾十粒中量

ピット 7か所。P1～P4は深さ58～70cmで土柱穴と考えられる。P5・P6はそれぞれ深さ17cmと25cmで、南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P7は深さ10cmで、南西コーナー部に位置するが性格は不明である。

貯蔵穴 長径106cm、短径60cm、深さ20cmの楕円形で、北西コーナー部に位置している。上層は2層に分層され、レンズ状に堆積しているが、ロームブロックを多く含むことと住居の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

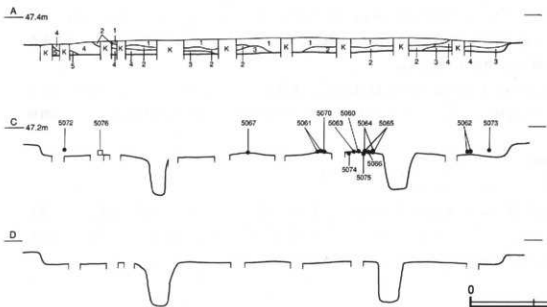
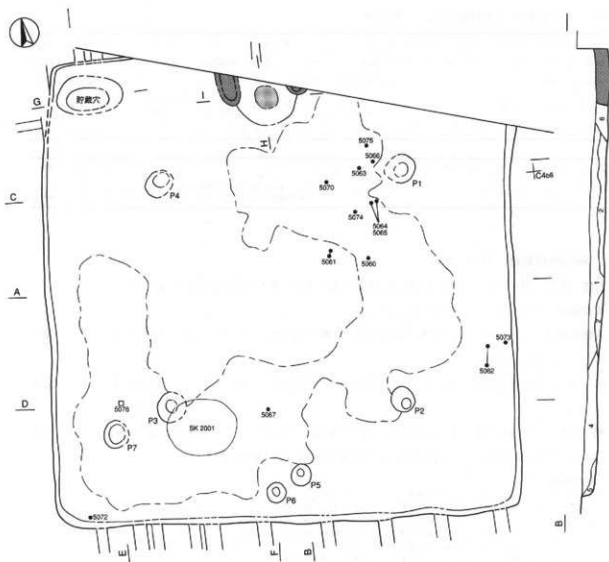
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 色 ロームブロック少量、幾十粒子・炭化した微量
- 2 明褐色 色 ロームブロック多量、粘り強

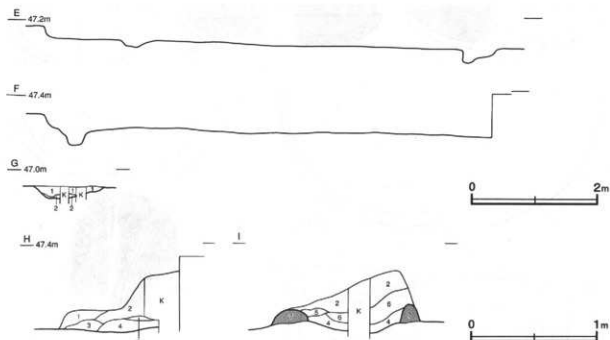
覆土 6層に分層される。攪乱されているところが多いが、第2～6層はブロック状に堆積している部分があり、層内にロームブロックを不均一に含むことから人為堆積と考えられる。第1層はローム粒子の含有状態が均一なため、ある程度埋め戻されたあとに、自然堆積したものであると考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------|---------|-----------------|
| 1 黒褐色 色 | ローム粒子微量 | 4 暗褐色 色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 色 | ロームブロック少量 | 5 明褐色 色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 色 | ロームブロック中量 | 6 暗褐色 色 | ロームブロック中量、焼土粒少量 |



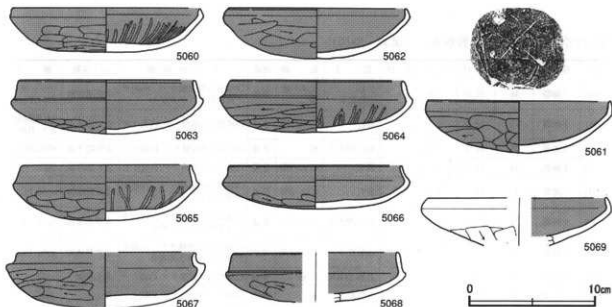
第35圖 第672号住居跡実測図(1)



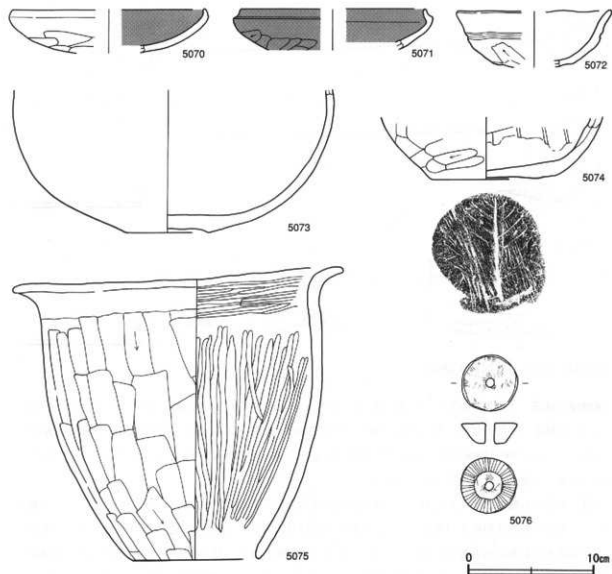
第36図 第672号住居跡実測図(2)

遺物出土状況 土師器片267点(坏133, 甕110, 甌23, ミニチュア1), 須恵器片4点(坏2, 甕2), 石製品1点(紡錘車)が出土している。5060・5061・5063～5067・5070・5074・5075は中央部から北東部にかけての床面から, 特に5064は5065の上に重なった状態で出土し, 5076は南西部の床面から出土している。これらは住居の廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 多数の食膳具が出土しており, 当該期の土器様相をとらえるうえで良好な資料といえる。また, 遺棄されたと考えられる床面出土の遺物のうち, 食膳具と煮炊具は竈にやや近い北東部付近から出土しているのに対し, 紡錘車は対角の南西部から出土しており, 住居内の空間利用の一端が推測される。時期は土師器坏が黒色処理を施したものが目立ち, 偏平化の傾向を示していることから, 6世紀後葉と考えられる。



第37図 第672号住居跡出土遺物実測図(1)



第38図 第672号住居跡出土遺物実測図(2)

第672号住居跡出土遺物観察表 (第37・38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5060	土師器	坏	15.0	3.5	-	長石、赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ後放射状ヘラミガキ	中央部床面	100%、焼き割れ、PL30
5061	土師器	坏	14.6	4.3	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	中央部床面	95%、底部内面目新×、PL30-II
5062	土師器	坏	14.0	4.1	-	長石、赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	東壁際下層	90%、PL30
5063	土師器	坏	14.0	4.3	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	北東部床面	100%、PL30
5064	土師器	坏	13.7	4.2	-	長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ後放射状ヘラミガキ	北東部床面	90%、PL30
5065	土師器	坏	13.5	4.4	-	長石、黒雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ後放射状ヘラミガキ	北東部床面	95%、PL30
5066	土師器	坏	13.6	3.5	-	赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ後放射状ヘラミガキ	北東部床面	80%、PL30
5067	土師器	坏	[14.1]	4.5	-	石英、白雲母	黒褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	南部床面	30%
5068	土師器	坏	[13.0]	(3.9)	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	覆土中	30%
5069	土師器	坏	[14.2]	(3.8)	-	長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	覆土中	30%

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5070	土師器	坏	[15.5]	(3.5)	-	石灰、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	中央部床面	30%
5071	土師器	坏	[14.5]	(3.3)	-	長石、黒雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	覆土中	10%
5072	土師器	坏	[12.2]	(4.5)	-	長石、黒雲母、赤色粒子	にぶい黄赤	普通	口縁部外側横ナデ、内面ナデ、外縁、底縁と内面の裏面に厚状(片)による波痕、溝割痕	南西向中壁	30%
5073	土師器	壳	-	(11.4)	6.6	塩化カルシウム	にぶい赤紫	普通	内外面ナデ	土壁際中壁	30%
5074	土師器	壳	-	(5.0)	8.6	石英、長石、赤色粒子	可赤褐	普通	内面ヘラナデ後ヘラミガキ、底面外周木炭痕	北東部床面	10% 裏面外周縁の裏面裏縁
5075	土師器	瓶	26.3	23.5	10.9	長石、黒雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外側横ナデ	北東部床面	90%, PL32

番号	器種	最大径	孔径	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5076	粘結土	1.3	0.7	1.6	40.7	頁岩カ	全面研磨、顔面放射状の調整、孔周面に擦痕	南西部床面	PL45

第673号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区西部のC4a3区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第693号住居、第68号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は4.2mで、南北長は北側が調査区域外へ延びており、2.8mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はピットが確認できなかったため、東と南の壁から推定するとN-34°-Eである。壁高は16-20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。

覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

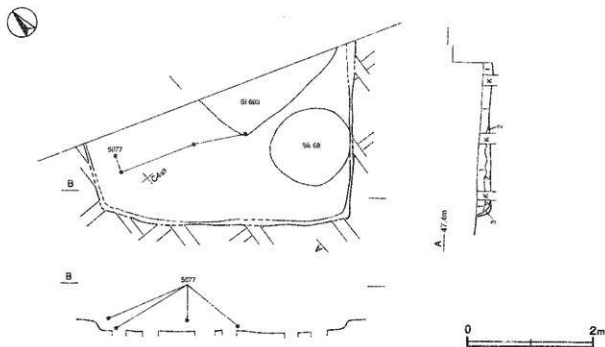
土層解説

1 黒色 ロームブロック少量

3 暗褐色 ロームブロック中量

2 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師陶片77点(坏3, 高台付坏1, 器台3, 甕69, ミニチュア1), 須恵器片6点(坏4, 高台付坏1, 蓋1), 赤土器片2点が出土している。5077は南西部から中央部にかけての覆土上層から下層に



第39図 第673号住居跡実測図

散在していた破片が接合したものである。

所見 耕作による攪乱で遺存状態が悪く、ピットも確認できなかったが、時期は出土土器や主軸方向などから、5世紀後半と考えられる。



第40図 第673号住居跡出土遺物実測図

第673号住居跡出土遺物観察表 (第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5077	土師器	甕	[15.2]	20.1	5.7	長石、 黒雲母、 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面ハケ目後ヘラナデ、内面ヘラミダキ、底器内面ヘラナデ、体部下端ハケ目後ヘラケズリ	中央～南西部 層上上～ 下層	30%

第674号住居跡 (第41図)

位置 調査区西部のC4a1区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第2028号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西側が調査区域外へ延びており、南北長5.3m、東西長3.3mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は12~18cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

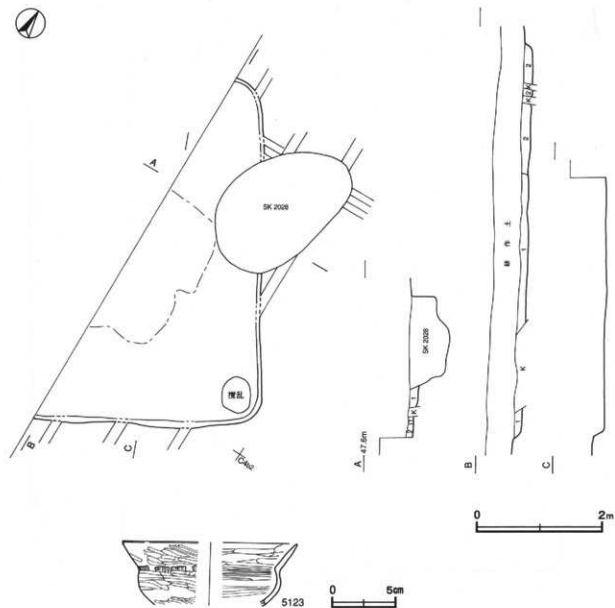
覆土 2層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱

遺物出土状況 土師器片17点(埴1, 器台1, 甕15), 須恵器片4点(坏2, 甕2), 縄文土器片2点, 弥生土器片2点が出土している。細片が多く、図示できるものは少なかった。須恵器片は耕作により混入したものである。

所見 遺構の多くの部分が調査区域外に延びており、全容をつかめなかった。混入した遺物が多いもの埴や器台、ハケ目調整の施された甕が出土していることから、時期は、4世紀前半と考えられる。



第41図 第674号住居跡・出土遺物実測図

第674号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5123	土師器	埴	[13.8]	(5.1)	-	石英、長石、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面・体部外面ハケ目 後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	覆土中	10%

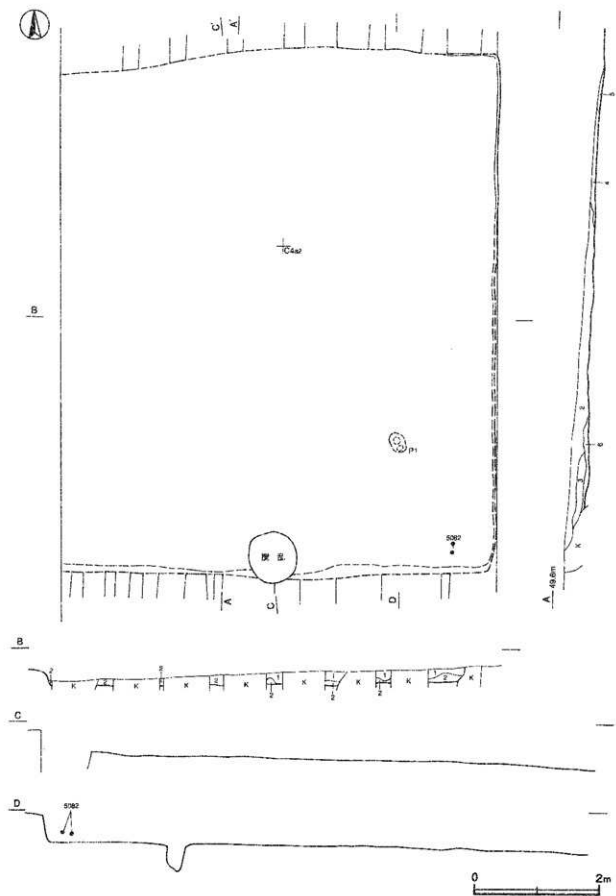
第675号住居跡 (第42・43図)

位置 調査区西部のC4a1区に位置し、南から北へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

規模と形状 南北長は8.3mで、東西長は西側が調査区域外へ延びており、7.0mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。壁高は42cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 耕作により攪乱されており、遺存状態が悪い。緩やかに南から北へ傾斜している。

竈 耕作により攪乱されており、火床面の一部のみが確認できた。



第42图 第675号住居跡尖測图

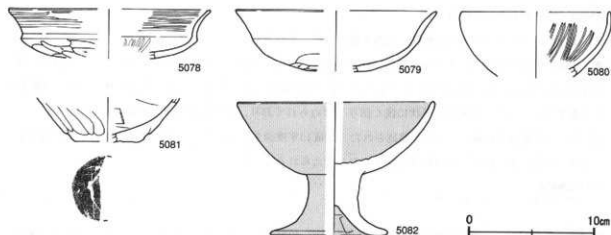
覆土 6層に分層される。攪乱されているものの、レンズ状に堆積していると推定され、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、織り崩 | 5 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量、粘性強、織り崩 | 6 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス少量 |

遺物出土状況 土師器片187点(坏39, 高坏3, 甕145), 須恵器片23点(坏6, 高台付坏1, 蓋1, 甕15), 縄文土器片5点, 弥生土器片11点, 陶器片9点, 磁器片2点, 鉄製品1点(不明鉄製品)が出土しているが攪乱により混入したものが多く, 本跡に伴うといえる遺物は少なかった。

所見 時期は5082や住居の主軸方向・形状などから, 6世紀前葉と考えられる。



第43図 第675号住居跡出土遺物実測図

第675号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5078	土師器	坏	[16.0]	(3.9)	-	石英	明赤褐	普通	口縁部内外面ヘラミガキ	覆土中	20%, 内面器面荒れ
5079	土師器	坏	[15.8]	(4.9)	-	長石, 黒雲母	赤褐	普通	口縁部内外面・内面ナデ	覆土中	20%
5080	土師器	碗	[11.8]	(5.2)	-	黒・金雲母	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ後ヘラミガキ	覆土中	20%
5081	土師器	鉢	-	(3.5)	[5.0]	長石, 金雲母	赤褐	普通	内面ヘラナデ, 外面ヘラケズリ, 底部外面木葉痕	覆土中	5%
5082	土師器	高坏	[15.5]	10.6	[9.3]	石英, 赤色粒子	明赤褐	普通	外面ナデ	南東角下層	50%

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡51軒、掘立柱建物跡3棟、鍛冶工房跡1軒、土坑1基、井戸跡1基、溝跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。なお、平成13年度の調査で一部が報告されている遺構については「辰海道遺跡1」から実測図を一部転載し、今回調査した部分と併せて報告する。

(i) 竪穴住居跡

第495号住居跡（第44回）

位置 調査区中央部のF.8j9区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。本跡は平成13年度調査区域と平成14年度調査区域にまたがって位置している。

重複関係 第1026・1027号土坑、第42号溝、第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.0m、短軸5.3mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁高は12~44cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦である。壁溝が南壁際と、西壁際の一部で確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは120cmで、壁外へ60cmほど掘り込んでおり、袖部幅は130cmである。天井部は残存していないが、第5層が崩落した天井部の一部と推測される。袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱し赤変硬化している。

ピット 今年度調査区域からP4が確認された。平成13年度調査区域のP1・P2とP4が深さ52~60cmで主柱穴と考えられ、P3が出入り口施設に伴うものと考えられる。

P4土層解説

1 明褐色 ローム粒子多量、粘り弱

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長軸100cm、短軸68cmの長方形で深さは24cmである。底面は平坦だが北壁側がやや高くなっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

4 暗褐色 ローム粒子微量

覆土 4層に分層される。「辰海道遺跡1」と土層番号は対応しており、そのうち、第3・4層は今年度調査区域でのみ確認されたものである。堆積状況は各層にロームブロックや焼土・炭化物を含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

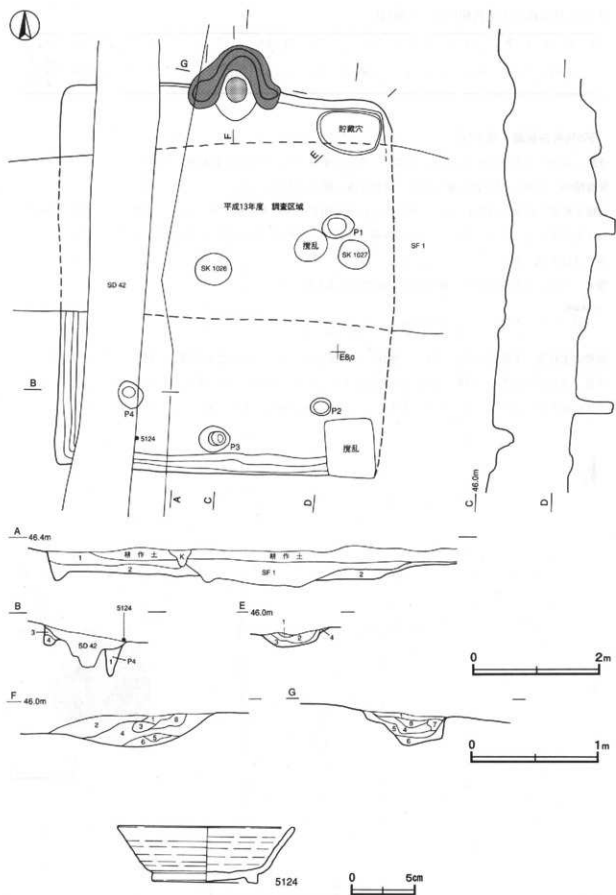
2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱

4 黒褐色 ローム粒子微量、粘り・粘り弱

遺物出土状況 今年度調査区域では、5124が南西コーナー部の床面から逆位で出土している。

所見 「辰海道遺跡1」では竈内から出土し、支脚に転用されていたと考えられる土師器器壁から、時期を8世紀初頭としているが、今年度調査区域から出土した5124は出土状況から住居廃絶時に遺棄されたものと考えられ、その時期は8世紀前葉ごろと推定される。これらのことから住居の存続時期は8世紀初頭に始まり、同前葉に焼絶されたものと捉えられる。



第44図 第495号住居跡・出土遺物実測図

第495号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5124	須恵器	高台付杯	14.0	4.5	8.3	小礫、長石	灰	普通	底部回転へう切り後、高台貼り付け	南西部床面	100%還元、焼き割れ、釜子産、PL31

第510号住居跡 (第45図)

位置 調査区中央部のE 8 g 9 区に位置し、西から東へ下がる緩やかな傾斜地に立地している。

重複関係 第493号住居跡を掘り込み、第42号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は約4.5mで、東西長は西側を第42号溝に掘り込まれており、東側は斜面部のため立ち上がりを確認することができず、1.2mのみ確認できた。主軸方向は不明で、壁高は10~20cmである。

床 はほぼ平坦である。

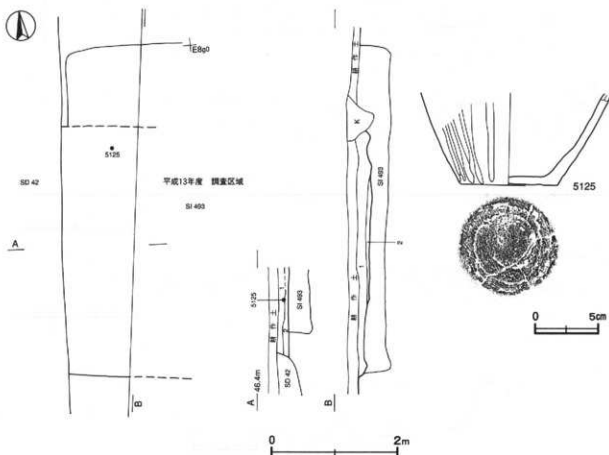
覆土 2層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱、締り強

遺物出土状況 土師器片18点(杯2、甕16)が出土している。5125は北側の覆土下層から出土している。

所見 遺存状態が悪く、規模・形状などを把握することができなかった。時期は6世紀前葉と考えられる第493号住居跡を掘り込んでいることと、出土した土器から8世紀代と考えられる。



第45図 第510号住居跡・出土遺物実測図

第510号住居跡出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	形状	口径	口径	底径	胎土	色	質	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5125	上海鉢	亮	-	(7.4)	7.7	石瓦、良石、赤色砂子	柳		普通	内面ナデ	北側下層	20%、表面発火、焼熟痕

第602A号住居跡 (第46図)

位置 調査区東部のF12i5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1785号土坑を掘り込んでいる。また、当初は1軒の住居跡として調査を進めたが、南側を拡張して建て替えが行われていると判断し、建て替え前を第602A号住居跡、建て替え後を第602B号住居跡として調査を実施した。

規模と形状 長軸5.2m、短軸4.3mの長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は18~31cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝が周回している。南壁際の壁溝は第602B号住居の床下から検出された。

竈 北壁中央部に付設されているが、第602B号住居への建て替え時に他所に作り替えた痕跡がないため、建て替え後も同一の場所を竈として使用したものと判断され、第602B号住居の項で詳述する。

ピット 4か所。P1~P4が主柱穴と考えられ、深さは50~60cmである。そのうち、P2・P3は第602B号住居の床下から検出された。

覆土 第1~8層は第602B号住居の土層で、第9層が本跡の上層である。

土層解説

9 暗褐色 焼土ブロック中層、ロームブロック・粘土粒少量、礫り強

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 第602B号住居への建て替えを行う以前の住居であり、出土遺物がないため時期は明確にしないが、第602B号住居との関係から、時期は、7世紀後半と考えられる。

第602B号住居跡 (第46・47図)

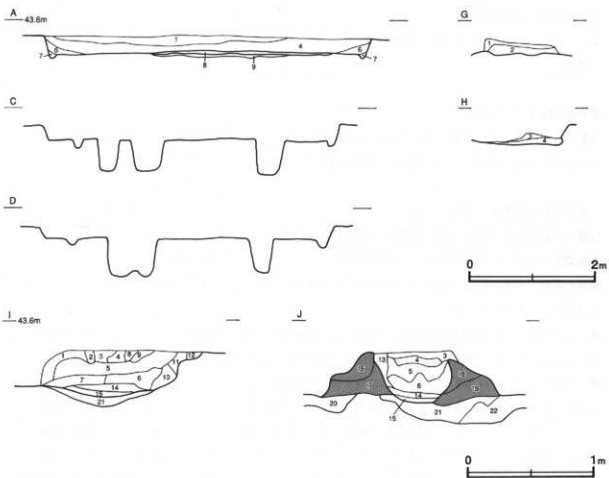
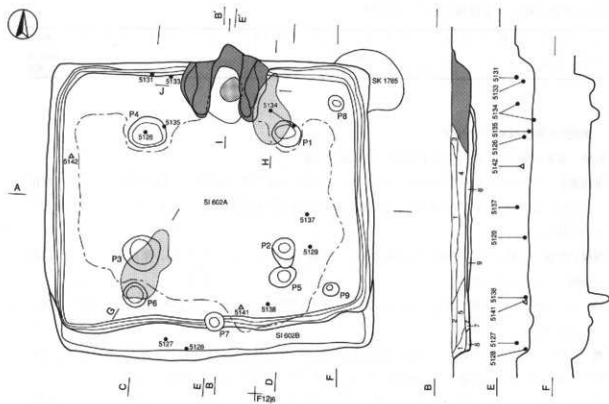
位置 調査区東部のF12j5区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第602A号住居を拡張して本跡を構築している。第1785号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.2m、短軸4.7mの長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は18~31cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。壁溝は東・西・北壁側を巡っているが南側の拡張部では確認できなかったため、本跡に伴うものではなく、第602A号住居のものと考えられる。

竈 北壁中央部に付設されている。他所に作り替えた痕跡がないことから、第602A号住居から第602B号住居への建て替え後も同一の場所を竈として使用したものと判断される。焚口部から煙道部までは128cmで、壁外へ30cmほど掘り込んでおり、袖部幅は135cmである。天井部は残存していない。袖部は砂質粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱して赤変硬化した部分がヒドに重なり合って2面確認され、長期間の使用が推定される。袖部と火床部は、20cmほど掘りくぼめた部分に暗褐色土を床面と同じ程度の高さまで埋め戻



第46图 第602A·B号住居跡実測图

した上に構築されている。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、砂粒少量、粘性・締り強
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物微量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物・灰少量、締り弱
- 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 9 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 10 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物・灰中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、粘性強、締り弱
- 11 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 12 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子・粘土ブロック少量
- 13 黒褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 14 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 15 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック微量
- 16 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量、粘性・締り強
- 17 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量、粘性・締り強
- 18 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 19 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量、粘性・締り強
- 20 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック少量、粘土粒子微量
- 21 黒褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
- 22 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、粘性強

ピット 7か所。主柱穴はP1・P4～P6が相当し、そのうちP1・P4は第602A号住居の柱穴を再利用したもので、P5・P6が拡張に伴い新たに掘り込まれたものと考えられる。深さはP5が60cm、P6が52cmである。P7は深さ15cmで、南壁際中央の竈に対面する位置にあり、第602A号住居の壁溝を掘り込んでいることから、拡張後に構築された出入り口施設に伴うものと考えられる。P8・P9はそれぞれ北東コーナー部と南東コーナー部に位置しているが、性格は不明である。

覆土 第1～8層が本跡の覆土である。各層に炭化物、焼土を含むこと、竈の東側からP1上にかけての部分と、P3・P6上の部分とに焼土塊があり、住居の廃絶時に投棄されたものと推測されることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

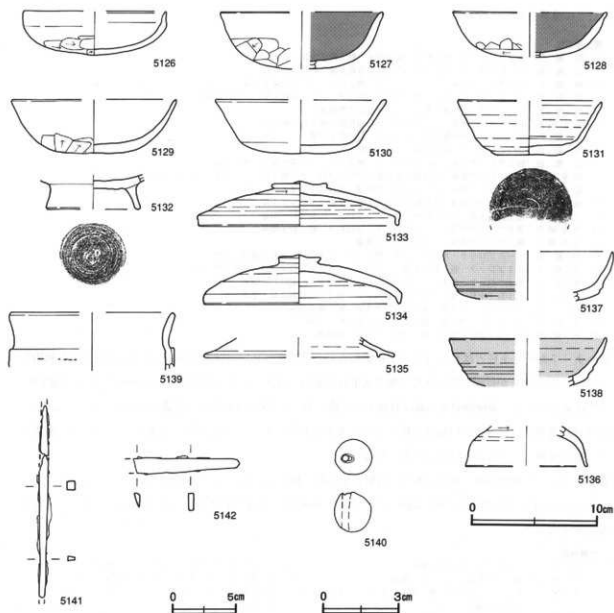
- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量 |

焼土塊土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子微量、締り弱
- 2 暗褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量、締り弱
- 3 にくい赤褐色 ロームブロック・焼土粒子多量、粘土粒子中量、炭化粒子少量、粘性強、締り弱
- 4 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1270点(環131, 椀1, 高坏2, 甕1135, 瓶1), 須恵器片87点(坏36, 高台付坏2, 蓋28, 高坏3, 甕18), 縄文土器片2点, 石器1点(砥石), 鉄製品2点(刀子1, 鋸1), 鉄滓1点がほぼ全域に散在し、多くが覆土下層から中層にかけて出土している。5134は竈右脇の覆土上層とP1の覆土内から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡は第602A号住居を拡張して構築しており、竈の土層観察から拡張以前を含めて長期間の使用が推定される。廃絶時期は、出土土器から8世紀前後と考えられる。



第47図 第602B号住居跡出土遺物実測図

第602B号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5126	土師器	坏	[11.2]	3.5	-	白雲母, 赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	P4付近下層	25%
5127	土師器	坏	[12.8]	(4.5)	-	長石, 白雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	南壁際中層	20%
5128	土師器	坏	[12.3]	(3.6)	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	南壁際下層	20%
5129	土師器	坏	[13.2]	4.3	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	東側下層	40%
5130	須恵器	坏	[13.4]	4.3	[4.6]	石英, 長石, 黒色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り, 内外面口クロナデ	覆土中	10%
5131	須恵器	坏	[11.6]	4.4	5.0	長石, 白雲母	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り, 内外面口クロナデ	北壁際上層	50%, 新治産, PL31
5132	須恵器	高台付坏	-	(2.7)	[7.2]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	25%
5133	須恵器	蓋	15.8	3.7	-	小礫	灰	普通	天井部回転ヘラ削り後つまみ接合	壺左脇中層	100%, PL31
5134	須恵器	蓋	15.5	3.9	-	石英, 長石	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り後つまみ接合	壺右脇上層, P1内	70%, PL31
5135	須恵器	蓋	[15.0]	(1.5)	-	白雲母	灰白	普通	内外面口クロナデ	P4付近下層	10%, 新治産

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	硬成	手法の特徴	出土位置	備考
5136	須恵器	甕	19.6	(3.2)	-	長石・赤色粘土	灰	普通	大井部手持ちへう張り	腹土中	10%
5137	須恵器	高杯	13.6	(3.9)	-	長石	暗灰	良好	内外両口ロナデ	腹帯中層	10% 外周白土層、内周導流
5138	須恵器	高杯	12.1	(3.8)	-	長石	オリーブ黒	良好	内外両口ロナデ	南部下層	10% 外周白土層
5139	土師器	甕	12.8	(4.7)	-	小粒、黒色等	灰黒	普通	口縁部内外両口ロナデ、器底部導流付	腹土中	10%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5140	七土	1.4	1.6	0.4	3.4	粘土	ナデ	腹土中	PL44

番号	器種	長さ	口径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5141	甕	(10.2)	6.43	0.4	(6.55)	鉄	履帯部、胎身・底部欠損、陶不明	南部下層	PL48
5142	刀子	(5.6)	0.9	0.3	(4.22)	鉄	生部片、刃部欠損、陶不明	西部中層	

第604号住居跡 (第48・49図)

位置 調査区東部のF11b7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第623A・623B・624号住居跡を掘り込み、第42号掘立柱建物、第1645号土坑、第38号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北壁の窓の西側部分が東側より65cmほど北へ掘り込まれており、窓の東側に棚状の施設が付設されていた可能性があるが、第42号掘立柱建物のP1に掘り込まれており、現状では不明である。規模は南北長が窓の西側で4.25m、東側で3.6m、東西長は3.7mである。棚状施設を含めた平面形は長方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は24~30cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。焚口から竈道部まで約80cmで、壁外へ40cmほど掘り込んでおり、袖部幅は115cmである。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 赤褐色 rome 粘土・焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・粘土粒子少量・rome ブロック微量、粘性強
- 3 灰褐色 焼土粒子中量、rome 粘土・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、rome 粘土微量
- 5 灰褐色 焼土粒子少量、rome 粘土・粘土粒子微量、粘性強
- 6 黒褐色 rome 粘土・焼土粒子少量、締り弱
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、rome 粘土微量、粘性強
- 8 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、rome 粘土微量
- 9 暗赤褐色 焼土粒子少量、粘土粒子中量
- 10 黒褐色 rome 粘土・焼土粒子・炭化粒子少量、粘性強
- 11 灰黄褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック微量、締り強
- 12 黒褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、rome ブロック・炭化粒子微量、締り強
- 13 灰黄褐色 粘土ブロック多量、rome ブロック・焼土ブロック微量、締り強
- 14 黒褐色 rome ブロック中量、粘土粒子少量、締り強
- 15 黒褐色 rome ブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量、締り強
- 16 黒褐色 rome ブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量、締り強
- 17 にぶい片褐色 粘土粒子多量、rome 粘土・焼土粒子・炭化粒子微量、締り強
- 18 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、rome 粘土微量、締り強
- 19 黒褐色 rome ブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量、締り強

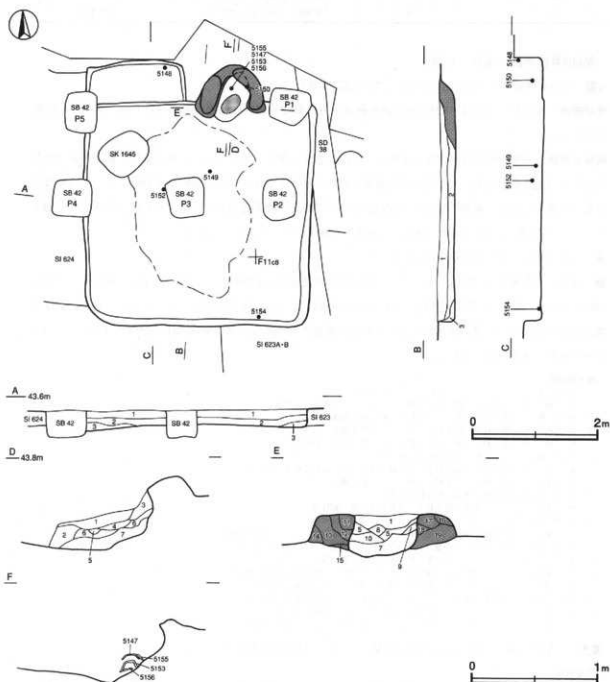
覆土 3層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

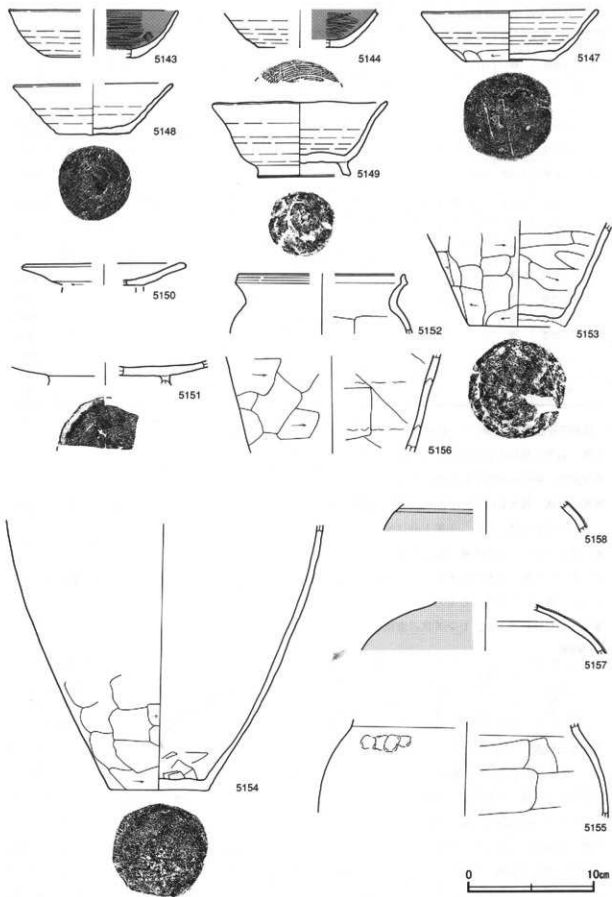
- 1 黒褐色 rome ブロック少量、炭化粒子微量、締り弱
- 2 黒褐色 rome ブロック・炭化粒子少量、締り弱
- 3 黒褐色 rome ブロック中量、炭化粒子少量、締り弱

遺物出土状況 土師器片196点(坏34, 高台付皿2, 鉢1, 高坏3, 甕156), 須恵器片13点(坏7, 高台付坏1, 盤1, 甕4), 灰釉陶器片2点(短頸壺1, 長頸瓶 ϕ 1)がほぼ全域に散在して出土しているが, 多くが覆土の上層から中層にかけて出土しており, 住居の廃絶後の流れ込みと考えられる。その中で5154は南東コーナー部の床面から, 5150は竈内から出土している。また, 火床面奥からは, 下から5156・5153・5147・5155が重なった状態で出土し, それぞれ被熱していることから支脚に転用していたものと考えられる。

所見 時期は, 竈内の出土土器から9世紀後葉と考えられる。5149は体部が内彎して立ち上がり, 口縁部が外反する碗形を呈するもので, 岩瀬町堀ノ内窯跡出土資料のうち上野武臣氏所藏品に類例が求められ, 本跡の時期にほぼ符合するものである。



第48図 第604号住居跡実測図



第49图 第604号住居跡出土遺物実測図

第604号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴	出土位置	備考
5143	土師器	杯	[13.3]	3.8	[6.6]	黒雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	25%
5144	土師器	杯	-	(3.1)	[6.6]	長石、黒雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	15%
5147	須恵器	杯	13.8	4.0	6.8	白雲母、赤色粒子	にぶい黄緑	不良	底部外周糸切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	竈内	55%、焼熱印、新川産、PL31
5148	須恵器	杯	[12.5]	4.1	5.9	小礫、長石	にぶい褐	不良	底部回転ヘラ切り、強化炎焼成	北壁際上層	60%、PL31
5149	須恵器	高台付杯	13.8	6.0	7.2	長石、黒色粒子	灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈の中層	60%、PL31
5150	土師器	高台付皿	[12.5]	(1.7)	-	石英、長石、白雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、内面ナデ	竈内	30%、焼熱印
5151	須恵器	盤	-	(1.7)	-	赤石、黒色粒子	暗灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	覆土中	10%
5152	土師器	甕	[13.2]	(4.6)	-	石灰、長石、黒雲母	明赤褐	普通	口縁部内面縦ナデ、内面ヘラナデ	中央部中層	10%
5153	土師器	甕	-	(8.4)	7.8	石灰、長石、黒雲母	にぶい褐	普通	内面ヘラナデ	竈内	30%、焼熱印、新川産
5154	土師器	甕	-	(21.5)	7.8	赤石、黒色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ	南東角底層	30%、焼熱印
5155	土師器	甕	-	(7.5)	-	長石、白雲母	赤褐	普通	内面ナデ、内面ヘラナデ、裏面磨光	竈内	10%、焼熱印
5156	土師器	甕	-	(7.9)	-	赤石、黒色粒子	暗	普通	内面ヘラナデ、編織小瓶	竈内	10%、焼熱印
5157	灰釉陶器	短冊壺	-	(3.9)	-	緻密、黒色粒子	明赤灰、灰オリーブ	良好	内外面ロクロナデ	覆土中	10%、磨光、深沢の形製式
5158	灰釉陶器	長頸瓶	-	(2.6)	-	緻密、黒色粒子	明赤灰、オリーブ灰	良好	内外面ロクロナデ	覆土中	10%、磨光

第607号住居跡 (第50・51図)

位置 調査区東部のF12(5区)に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第608・631号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西長は5.5mで、南北長は北側が調査区外へ延びており、3.5mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。壁高は38~50cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められている。

ピット 3か所。主柱穴はP1・P2が相当し、深さは45~50cmである。P3は深さ60cmで南壁際中央にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

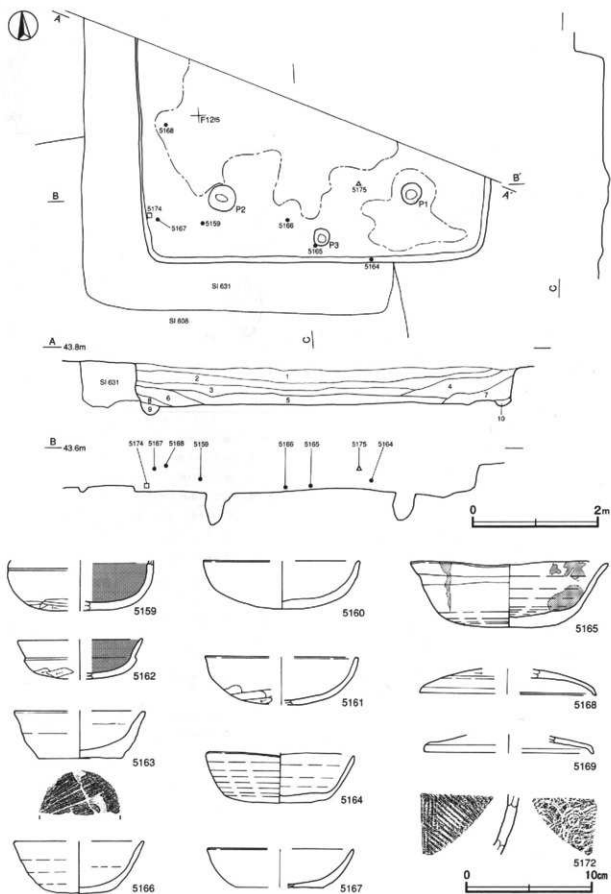
覆土 10層に分層され、レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土器観察

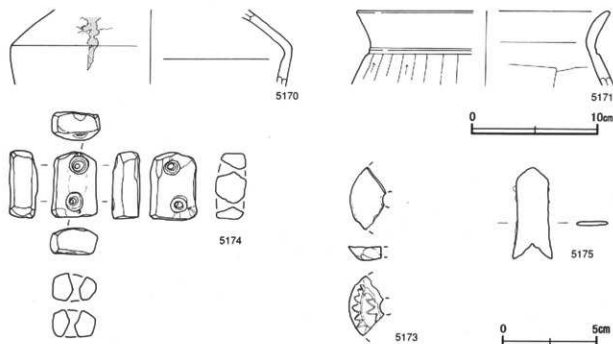
1 赤褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘着性
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量、餅り塗
5 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	10 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片498点(杯354、甕144)、須恵器片58点(杯35、高台付杯2、蓋6、高杯1、瓶7、甕7)、縄文土器片12点、土製品1点(支脚)、石器・石製品4点(紡錘車1、双孔門板1、製片1、不明1)、鉄製品1点(鐵)が西側から南西側にやや集中して出土している。床面から出土した遺物は5165・5166・5174で、5159・5164は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器や住居の主軸方向などから8世紀前葉と考えられる。5173は滑石製の紡錘車で、側面と裏面に連弁を表現したと考えられる剣歯状の線刻が施されている。5174も滑石製で孔が裏面側から二つ穿孔されており、孔の外側の縁がそれぞれ磨かれている。紐状のものを通したと推測されるが、使用目的等は不明である。



第50图 第607号住居跡・出土遺物実測図



第51図 第607号住居跡出土遺物実測図

第607号住居跡出土遺物観察表 (第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5159	土師器	坏	-	(4.0)	-	白雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	南西角下層	30%
5160	土師器	坏	[12.3]	3.8	-	赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	覆土中	40%
5161	土師器	坏	[12.1]	3.8	-	赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	40%, PL32
5162	土師器	坏	[10.0]	(3.2)	-	黒赤褐色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	40%
5163	土師器	坏	[10.6]	3.8	6.6	白雲母	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	40%
5164	須恵器	坏	11.6	4.0	5.0	小黒, 石灰, 長石	灰黄褐	不良	底部回転ヘラ切り	南壁際下層	95%, PL31
5165	須恵器	坏	15.7	5.1	5.0	黒色粒子	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り	南壁際床面	90%, 内面漆付着, PL32
5166	須恵器	坏	[10.4]	4.2	[3.0]	長石	灰白	普通	底部不定方向ヘラ削り	南側床面	3%, 内面漆付着
5167	須恵器	坏	[11.6]	3.1	[7.0]	石灰, 石灰, 黒雲母	黄灰	普通	底部不定方向ヘラ削り	南西角中層	20%
5168	須恵器	蓋	[14.0]	(2.0)	-	長石	褐灰	普通	天井部回転ヘラ削り	西壁際中層	20%
5169	須恵器	蓋	[13.5]	(1.3)	-	長石	暗灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
5170	須恵器	長頸瓶	-	(6.0)	-	長石, 黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%, 外底面漆付
5171	土師器	甕	[20.2]	(6.0)	-	長石, 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 外面ヘラ削り	覆土中	10%
5172	須恵器	甕	-	(4.7)	-	石英	褐灰	普通	外面明き, 内面凹凸の滑り具痕	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5173	紡錘車	(3.3)	(1.9)	0.8	(3.9)	滑石	全面研磨, 側面・下面縦溝状の線刻	覆土中	20%
5174	不明	3.5	2.4	1.5	18.6	滑石	全面研磨, 双孔(両側から穿孔, 表面面外貫に擦痕)	西側床面	PL45
5175	鏝	4.8	2.1	0.2	4.62	鉄	無錆	南側中層	PL48

第609号住居跡 (第52・53図)

位置 調査区東部のF11d7区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第623B号住居跡を掘り込み, 第625号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m, 短軸3.2mの方形で, 主軸方向はN-12°-Eである。壁は四方とも掘り込まれてお

り、壁高は不明である。

床 はほぼ平坦で、壁際を除き踏み固められており、壁溝が北壁の一部を除き周囲している。

竈 上部構造の痕跡はないが、北壁のやや東寄りに壁溝が通っていない部分があり、土層の観察と合わせて、この部分に竈があったものと推定される。

ピット 2か所。P1は深さ27cmで竈があったと推定される場所に近接しており、柱穴とは考えられず、覆土中から焼土・炭化物が多く検出されたことから、竈構築の際に湿気抜き等の目的で掘られたものと考えられる。

P2は深さ24cmで、南壁際の竈に対面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

P1土層解説

- | | | |
|---|-----|------------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック微量 |
| 2 | 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、ロームブロック微量、締り弱 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量、締り弱 |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量、締り弱 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子・粘土ブロック中量、締り弱 |

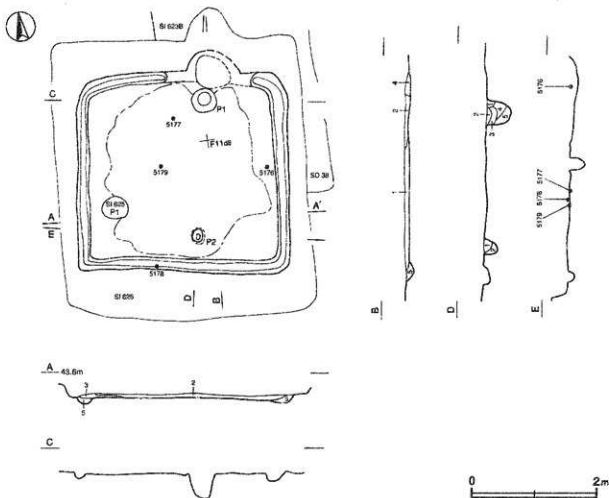
P2土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|------------------|---|-----|---------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量、締り強 |
|---|-----|------------------|---|-----|---------------|

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

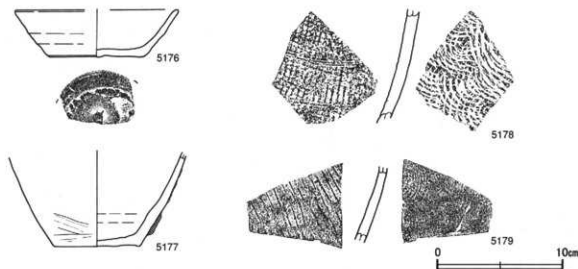
- | | | | | | |
|---|------|--------------------------|---|------|--------------------------------|
| 1 | 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、締り強 | 4 | 極暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量、粘性強 |
| 2 | 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量、締り強 | | | |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 | 暗褐色 | ロームブロック少量 |



第52図 第609号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片15点(坏3, 碗2, 甕10), 須恵器片5点(坏2, 甕3), 出土している。5177はP1西側の床面から, 5176・5178・5179は覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後半と考えられる。



第53図 第609号住居跡出土遺物実測図

第609号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考
5176	須恵器	坏	[12.9]	3.8	[7.3]	石英	黄灰	普通	底部回転へう切り	東壁際下層	25%
5177	土師器	甕	-	(7.7)	7.0	石英, 長石, 赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へう削り	P1西壁床面	同層外面成化土付着, 炭粒点
5178	須恵器	甕	-	(9.1)	-	石英	灰白	普通	外面明き, 内面同心円状当て具痕	南壁際下層	10%
5179	須恵器	甕	-	(6.3)	-	長石	灰褐	普通	外面明き, 内面同心円状当て具痕	中央部下層	10%

第610号住居跡 (第54・55図)

位置 調査区東部のF12e2区に位置し, 平坦部に立地している。

規模と形状 東西長は4.0mで, 南北長は北側が調査区域外へ延びており, 2.8mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ, 主軸方向はN-8°-Eである。壁高は31~36cmで, 各壁ともほぼ直立している。

床 ほほぼ平坦で, 壁際を除き踏み固められており, 壁溝が調査区域内を巡っている。

ピット 3か所。主柱穴はP1・P2が相当し, 深さは約30cmである。P3は深さ23cmで南壁際中央にあり, 出入り口施設に伴うものと考えられる。

覆土 6層に分層され, レンズ状の堆積状況を示し, 自然堆積と考えられる。

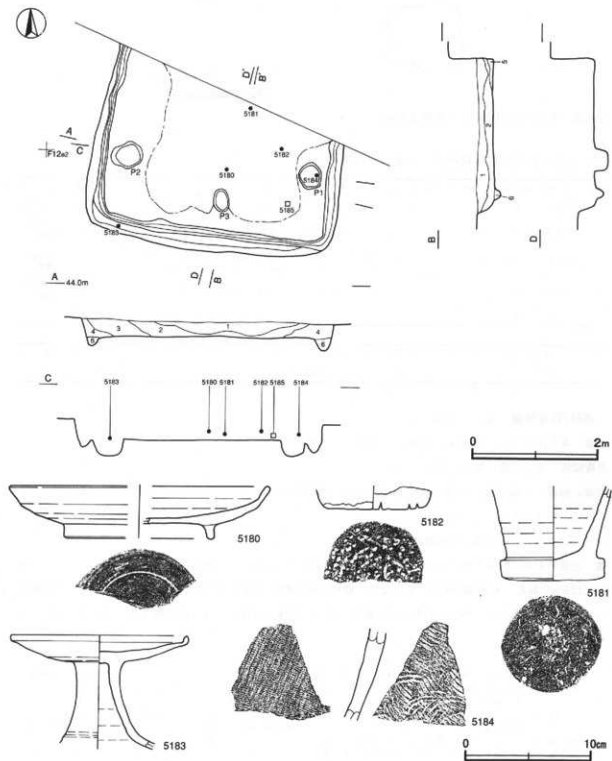
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量, 締り弱 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土ブロック微量, 締り弱 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 締り弱 | | |
| 3 黒褐色 | ローム中ブロック中量, 炭化粒子少量, 締り弱 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 締り弱 | | |

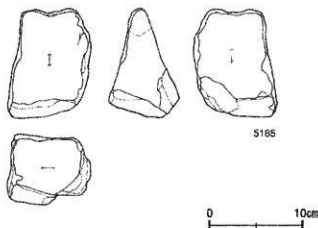
遺物出土状況 土師器片214点(坏34, 皿1, 鉢1, 甕178), 須恵器片16点(坏9, 高台付坏1, 盤1, 蓋1, 控鉢2, 高盤1, 甕1), 縄文土器片1点, 石器1点(砥石)が, 中央部から南東部にかけての床面から10~15cm上に集中して出土している。図示した遺物のうち5180~5182・5184・5185がこれにあたり, 5183は南西

コーナー部の床面から出土している。

所見 前述したように床面上10～15cmのところから遺物が集中して出土しており、これはおおむね覆土第1層と第2層の境目にあたる。住居廃絶後に第2～6層が堆積したあとのくぼ地に投棄したものと考えられ、時期は9世紀中葉から後葉と判断される。また、床面出土の5183は9世紀中葉ごろのものと考えられ、これらのことから本跡は9世紀中葉ごろに廃絶したものと考えられる。



第54図 第610号住居跡・出土遺物実測図



第55図 第610号住居跡出土遺物実測図

第610号住居跡出土遺物観察表 (第54・55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
5180	須恵器	甕	[20.2]	4.2	[12.0]	石英、長石	灰	普通	底面凹みへう張り無高白陶り付	中央部下部	30%, PL32	
5181	須恵器	杯鉢	-	(7.6)	8.1	石英、長石	暗灰	良好	底面凹みへう張り無高白陶り付	中央部下部	40%, 底面外周部、PL32	
5182	須恵器	杯鉢	-	(1.8)	8.4	小礫、石英、長石	灰	普通	底面凹みへう張り無高白陶り付 具による径2cm-深3mm前後の割傷	東壁下部	10%, 底面外面部、PL32	
5183	須恵器	高脚	13.8	(9.1)	-	石英、長石	灰	普通	内外歯口ロナテ	南西角床面	10%, 内周部、外周部、PL32	
5184	須恵器	甕	-	(7.4)	-	白雲母	にぶい	普通	外周部、内周部、割傷の蓋て具	東壁下部	10%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5185	磁石	13.0	10.0	8.4	1040	砂岩	磁面3面	南東壁下部	PL46

第612号住居跡 (第56~58図)

位置 調査区東部のF12h2区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第56号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は23~32cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚き口部から煙道部までは100cmで、壁外へ60cmほど掘り込んでおり、袖部幅は125cmである。天井部は残存していない。袖部は砂質粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

層土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
2 暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	10 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量
5 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・砂粒少量

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|---------------------------------------|
| 13 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量、埴り強 |
| 14 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、粘性・埴り強 | | |

ピット P1 は深さ38cmで、南壁際中央の竈に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

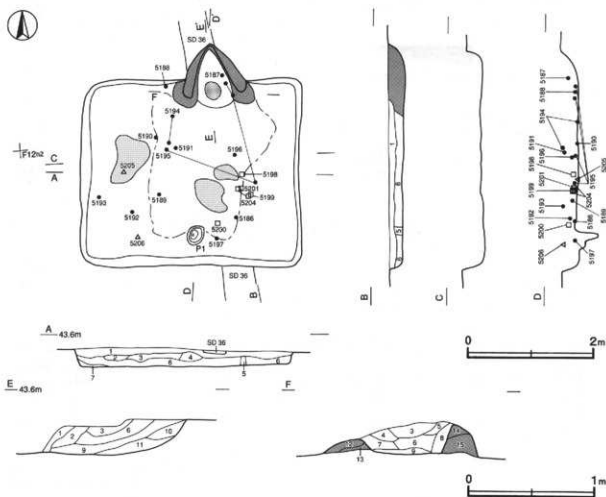
覆土 7層に分層され、各層にロームブロック・焼土・炭化物を多く含んでいる。また、床面上に焼土塊が散在しており、住居廃絶時に投棄されたものと推測され、人為堆積と考えられる。

土層解説

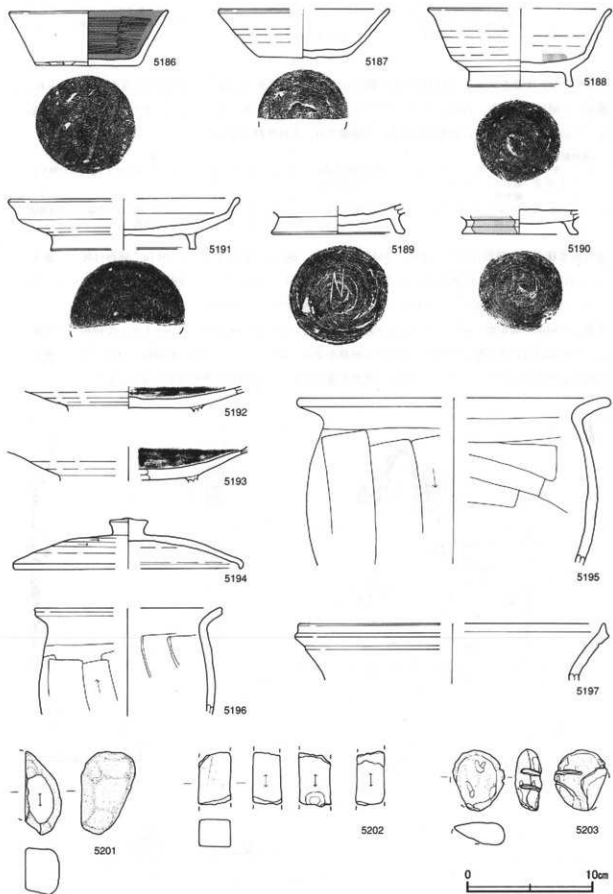
- | | | | |
|--------|----------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、埴り弱 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量、埴り弱 | 5 | ロームブロック |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、埴り弱 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化物微量 |
| | | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片282点(坯35, 高坯1, 甕245, 瓶1), 須恵器片37点(坯14, 高台付坯2, 蓋9, 甕12), 石器5点(砥石), 石製品1点(沈子), 鉄製品1点(釘), 椀状滓1点, 焼礫1点が出土している。5186・5188・5190・5205は床面から, 5189・5192・5195~5199・5201・5204は覆土下層から出土している。

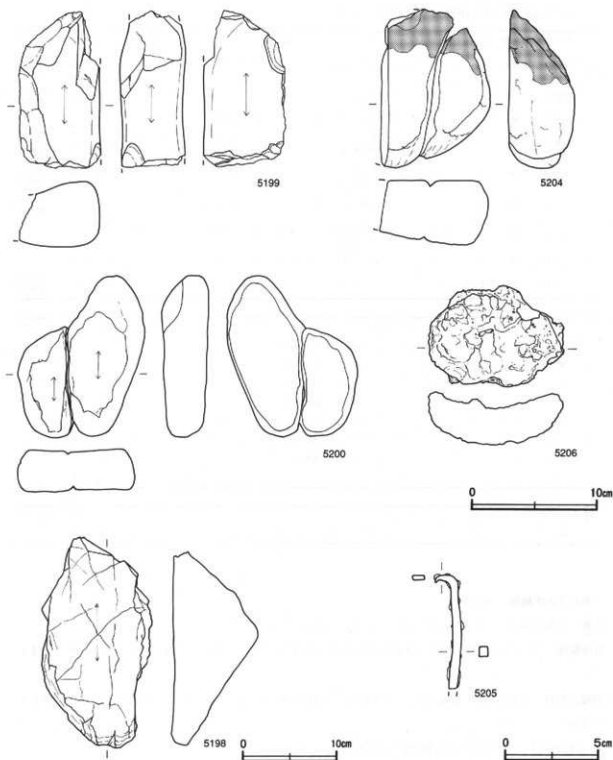
所見 5188は内面が磨り減っており、漆が薄く付着している。漆を塗る際にパレットとして使用したと推定され、口縁部付近に筆を整えたものと見られる痕跡がある。他にも5192~5194の転用硯, 5198~5202の砥石など特殊な遺物が多く出土しており、工房的な性格が推定される。時期は9世紀前葉と考えられる。



第56図 第612号住居跡実測図



第57图 第612号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 第612号住居跡出土遺物実測図(2)

第612号住居跡出土遺物観察表 (第57・58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	土色	調地	手法の特徴	出土位置	備考
5186	土師器	坏	12.4	4.4	8.0	石英、金雲母	にがい黄橙	普通	底部外面不定方向へラ削り、 底部内面一定方向へラミガキ	南東部床面	100%、 PL32
5187	須恵器	坏	[13.4]	3.9	7.1	長石	灰	普通	底部回転へラ切り	竈内中層	4%、量子差±
5188	須恵器	高台付坏	[14.4]	6.2	8.0	小礫、長石、 白色針状鉱物	黄灰	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け	竈左脇床面	7%、底部内面研 磨層付集、PL32

第612号住居跡出土遺物観察表 (第57・58図)

番号	種類	素材	口径	高さ	底径	胎土	色	装	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5180	須恵器	高台付坏	-	(2.3)	10.6	石灰、長石	灰		普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部下層	20%、表面外周部は褐色色
5190	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	9.2	石灰、黒色粒子	灰		良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部下層	20%、表面外周部は褐色色
5191	須恵器	甗	[18.2]	4.1	[11.4]	石灰、黒雲母	灰		普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部上層	30%、PL32
5192	須恵器	甗	-	(1.7)	-	石灰、黒色粒子	灰		良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	南西部下層	10%、表面外周部は褐色色
5193	須恵器	甗	-	(2.6)	-	石灰、黒色粒子	灰		良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	西上部上層	10%、表面外周部は褐色色
5194	須恵器	甗	[18.2]	4.1	-	石灰、長石	灰		普通	天井部回転ヘラ張り	中央部下層	20%、表面外周部は褐色色
5195	土師器	甗	[24.6]	(15.4)	-	石灰、長石、黒・金雲母	にない	白	普通	口縁部内外面滑すず、内面ヘラナデ	中央部下層	10%
5196	土師器	甗	[14.8]	(8.6)	-	石灰、長石	明赤	黒	普通	口縁部内外面滑すず、内面ヘラナデ	中央部下層	10%
5197	須恵器	甗	[24.2]	(1.7)	-	黒色粒子	灰		良好	内外面ロクロナデ	南部下層	10%、内面褐色、溝西

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	産	出土位置	備考
5198	瓶石	25.3	19.7	10.1	3470	砂岩	瓶底1面		中央部下層	PL46
5199	瓶石	(12.5)	(6.6)	5.2	(626)	石灰質岩	瓶底3面		南東部下層	PL46
5200	瓶石	12.9	10.1	3.8	630	砂岩	瓶底1面		南東部中層	2面に貼っている、PL36
5201	瓶石	6.7	(2.9)	4.3	101	砂岩	瓶底1面		東部下層	PL46
5202	瓶石	(4.3)	2.6	2.5	43	凝灰岩	瓶底5面		覆土中	PL46
5203	瓶石	4.8	4.2	2.0	16	凝灰岩	外縁に割み3ヶ所、P22ヶ所は裏面に溝状に掘		覆土中	PL46
5204	瓶底	12.8	(8.7)	5.2	(730)	砂岩	瓶底面		南部下層	2面に貼っている、PL39
5205	釘	(6.1)	1.4	0.5	(6.9)	鉄	基部を折り曲げて頭部を作る。基部部を欠く		西側床面	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	産	出土位置	備考
3205	板状釘	8.0	10.8	4.2	373	黄鉄、定形、表面茶褐色、端部褐色、一部青灰色を呈す		南西部上層	

第613号住居跡 (第59図)

位置 調査区東部のF12g1区に位置し、平坦部に立地している。

遺構関係 第616号住居跡、第37号溝跡を掘り込み、第615号住居、第1770号土坑、第63号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.0m、短軸3.2mの長方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は8cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、中央部から北側が踏み固められている。

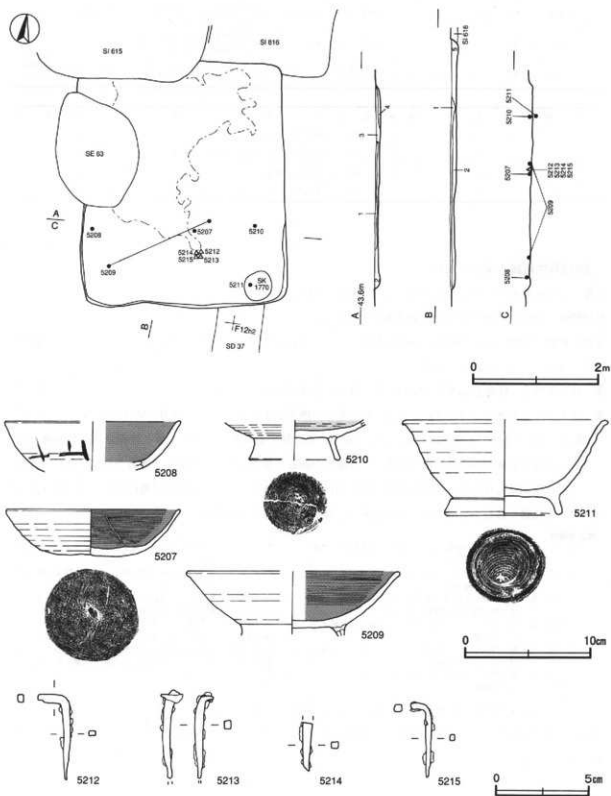
覆土 5層に分層される。覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 凝灰岩色 凝灰砂少量、ローム粒少量
- 2 凝灰岩色 ロームブロック散在、粘付強
- 3 凝灰岩色 ロームブロック・炭上粒子・炭化有機質、粘性強
- 4 凝灰岩色 ロームブロック散在
- 5 凝灰岩色 ロームブロック・炭上粒子・炭化粒子・粘土粒子微量、粘性強

遺物出土状況 土師器片143点(坏54、輪13、甗75、瓶1)、須恵器片7点(坏2、甗1、甗4)、鉄製品4点(釘)が南部にやや集中して出土している。釘は床面のやや上からまともに出て出している。

所見 5208は体部外面に「用上」と読める墨書があり、これと同様の墨書土器が第619号住居跡から出土している。出土土器は10世紀前葉に比定されるものであるが、同様の土器が出土している第615号住居に掘り込まれていることから、時期は10世紀前葉の中の9世紀寄りになると考えられ、第615号住居への短期間での住み替えが推定される。



第59図 第613号住居跡・出土遺物実測図

第613号住居跡出土遺物観察表 (第59図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5207	土師器	坏	13.6	3.8	7.5	石英、長石	黄	普通	底部四角へら切り残すナ、底部内面一定方向へラミガキ	南部床面	90%、PL32
5208	土師器	坏	[13.8]	(3.9)	-	石英、長石	にぶい黄	普通	内外面口クロナデ	西壁際床面	10%、外部形状 書「上」: PL42
5209	土師器	瓶	[16.6]	(5.2)	-	石英、長石	にぶい黄	普通	底部四角へら切り後高台貼り付け、底部内面一定方向へラミガキ	南部床面	20%
5210	土師器	瓶	-	(3.2)	7.2	石英、長石	赤	普通	底部四角へら切り後高台貼り付け、底部内面一定方向へラミガキ	東部床面	15%
5211	土師器	瓶	[13.9]	7.6	8.9	小礫、長石、赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底部四角へら切り後高台貼り付け	南東角床面	60%、外部形状 付着: PL32

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5212	釘	4.2	1.8	0.3	2.96	鉄	基部を折り曲げて頭部を作る	南部床面	
5213	釘	(4.5)	2.1	0.4	(3.66)	鉄	基部を折り曲げて頭部を作る。先端部を欠く	西部床面	
5214	釘	(2.6)	0.5	0.3	(1.24)	鉄	基部・先端部を欠く	西部床面	
5215	釘	4.0	1.1	0.3	1.62	鉄	基部を折り曲げて頭部を作る	南部床面	

第615号住居跡 (第60・61図)

位置 調査区東部のF12f1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第613・616・617号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.9m、短軸2.5mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は15~22cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、痕跡を除き踏み固められており、單溝が全周している。

竈 北壁のやや東寄りにつ設されている。焚口部から煙道部までは140cmで、壁外へ90cmほど掘り込んでおり、袖部幅は120cmである。天井部は残存していないが、第3層が崩落した天井の一部と推測される。遺物の出土状況から住居を放棄する際に、竈を破壊した可能性がある。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は地山を20cmほど掘り込んだ部分を、炭化物を含む土で埋め戻した上にあり、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量、縞り強	7 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量、縞り強	8 暗褐色	粘土粒子中量、焼土粒子・ローム粒子少量、粘性強
3 黒褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、縞り強	9 暗褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性強
4 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量	10 黒褐色	炭化物少量、焼土ブロック微量、縞り弱
5 暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、ロームブロック微量	11 黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック少量、縞り弱
6 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量	12 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、縞り弱
		13 暗赤褐色	焼土ブロック少量、炭化粒子微量、縞り弱

ピット P1は深さ12cmで南壁際中央にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。

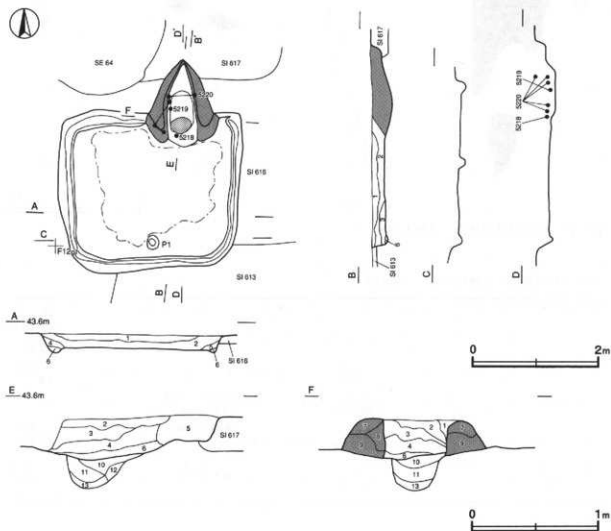
埋土 6層に分層される。各層に焼土・炭化物があり、ロームブロック・粒子を不均一に含むことから人為堆積と考えられる。

土層解説

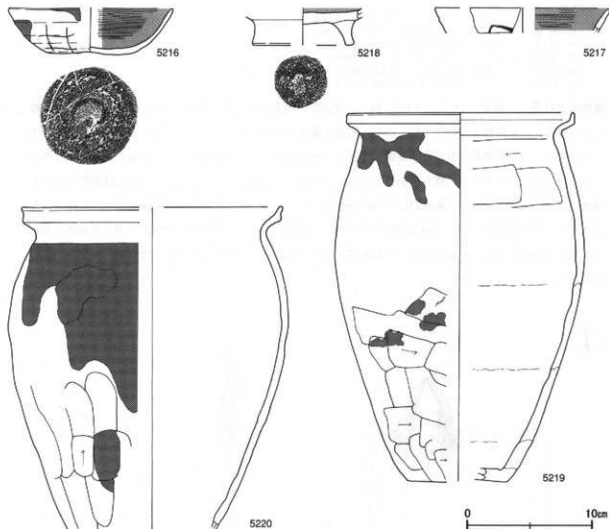
- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 5 黒暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量、粘性強

遺物出土状況 土師器片437点(坏102, 椀3, 甕332), 須恵器片32点(坏17, 盤1, 蓋1, 甕13), 灰軸陶器片2点(碗1, 長頸瓶1)が出土している。土器は竈内から多く出土し, そのほとんどが第6層より上層からのもので, 竈の崩壊後, あるいは破壊したあとに廃棄されたものと推測される。図示した遺物のうち5216・5218~5220がそれにあたる。覆土中から出土したものは上・中層のものがほとんどで多くは細片であった。

所見 ほぼ同時期と思われる第613号住居跡を掘り込んでいるため, 時期は10世紀前葉の中でも後半になると考えられ, 第613号住居跡からの短期間での住み替えが推定される。5216は体部外面に「井」と刻書され, 5217は墨書があるが, 文字は不明である。灰軸陶器片はいずれも細片で図示できなかったため, 一覧表(表13)に記載した。



第60図 第615号住居跡実測図



第61図 第615号住居跡出土遺物実測図

第615号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5216	土師器	坏	[13.0]	3.8	7.6	白・金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内	60%, 外部外面 磨削付着, 焼熱痕, PL33
5217	土師器	坏	[14.0]	(1.9)	-	白雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	5%, 外部外面 磨削付着
5218	土師器	碗	-	(3.0)	[8.0]	石灰, 長石, 白雲母, 赤色灰子	赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	竈内	10%
5219	土師器	甕	18.0	29.6	[8.0]	長石, 白・金雲母	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ, 底部外面ヘラ削り, 輪積み痕	竈内	20%, 外部外面 磨削付着, 焼熱痕, PL33
5220	土師器	甕	[20.5]	(26.0)	-	長石, 白・金雲母	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	竈内	20%, 外部外面 磨削付着, 焼熱痕, PL33

第616号住居跡 (第62・63図)

位置 調査区東部のF12f1区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第617号住居跡, 第37号溝跡を掘り込み, 第613・615号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.25m、短軸2.65mの長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は11cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で中央部が踏み固められている。

竈 北壁に付設されているが、西半分は遺存状態が悪く、袖部も確認できなかった。焚口部から煙道部までは90cmで、壁外へ30cmほど掘り込んでおり、袖部幅は90cmほどと推測される。天井部は残存しておらず、袖部は砂質粘土で構築されている。火床部はほぼ床面と同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

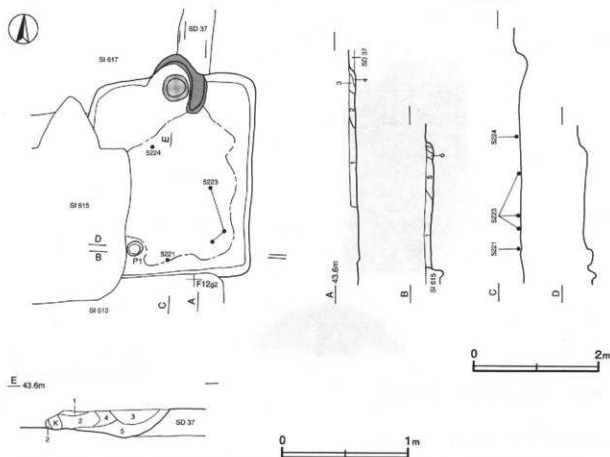
- | | | | |
|----------|-----------------------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒暗赤褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量、練り岩 |
| 3 に近い黄褐色 | 炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | | |

ピット P1は深さ14cmで南壁際にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。

覆土 7層に分別される。ブロック状に堆積しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

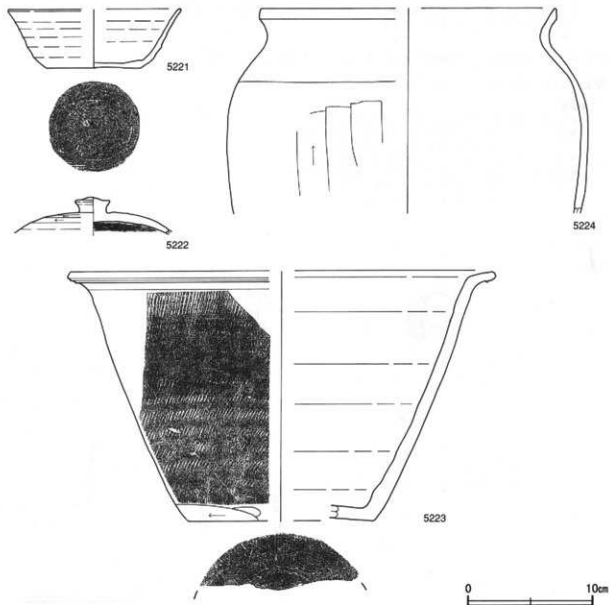
- 1 黒暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黒暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量、練り強
- 5 黒暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、練り強
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量



第62図 第616号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片103点（坏22，碗2，甕79），須恵器片21点（坏12，高台付坏1，蓋1，鉢1，瓶2，甕4）が出土している。南西部から中央部にかけての床面や覆土下層からやや多く出土しており，少し離れた場所の破片が接合することから，住居廃絶時に南西方向から投棄したものと考えられる。

所見 5222は内面に墨が付着しているが，器面は磨り減っていない。5223は底部内面が研磨されており，使用状況の一端がうかがえる。時期は8世紀中葉と考えられる第617号住居跡を掘り込み，10世紀前半代と考えられる第613・615号住居に掘り込まれていることと出土土器から，9世紀前葉と考えられる。



第63図 第616号住居跡出土遺物実測図

第616号住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5221	須恵器	坏	[13.6]	4.7	7.2	長石	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際下層	40%
5222	須恵器	蓋	-	(3.1)	-	石英，長石， 金・白雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	20%， 内面墨付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5223	須恵器	鉢	[34.0]	20.1	[14.6]	長石、黒雲母	黄灰	普通	体部外面叩き・内面ロクロナデ	南東・東部 床面～下層	30%、底部 内面増減
5224	土師器	甕	[23.4]	(16.5)	-	石英、長石	にぶい赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	中央部下層	15%

第617号住居跡 (第64・65図)

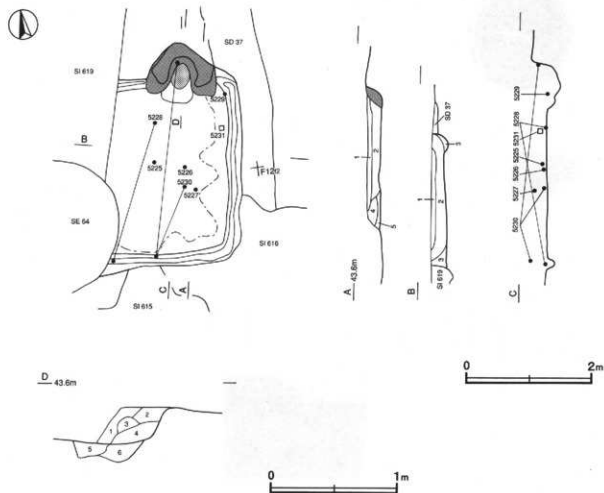
位置 調査区東部のF12e1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第37号溝跡を掘り込み、第615・616・619号住居、第64号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は3.0mで、東西長は西半分が第619号住居と第64号井戸に掘り込まれており、2.7mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向は $N-8^{\circ}-E$ である。壁高は20~24cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほは平坦で中央部が踏み固められており、壁溝は他遺構に掘り込まれた部分以外を巡っている。

竈 北壁の東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは100cmで、壁外へ50cmほど掘り込んでおり、袖部幅は110cmである。天井部は残存しておらず、袖部は砂質粘土で構築されている。火床部は地山を30cmほど掘り込んだ部分を炭化物を含む土で埋め戻した上にあり、火床面は被熱し赤変硬化している。



第64図 第617号住居跡実測図

覆土層解説

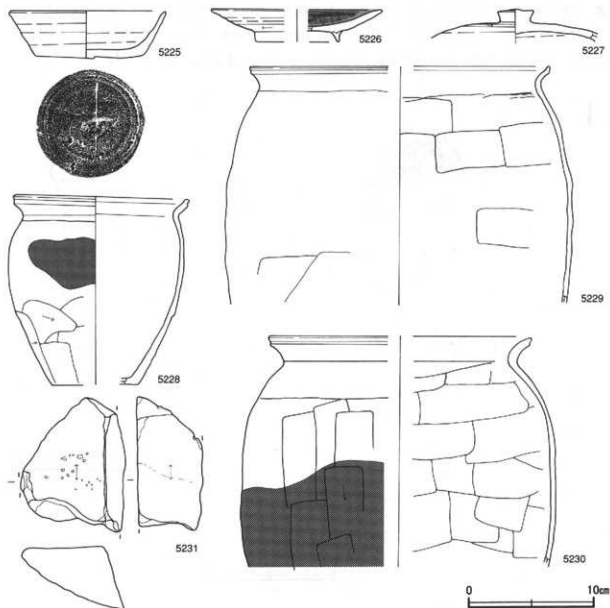
- | | | | |
|--------|------------------------|---------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 4 明赤褐色 | 焼土ブロック少量，粘性弱 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 極暗赤褐色 | 炭化物中量，焼土粒子少量，締り弱 |
| 3 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒中量，焼土ブロック・炭化材微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子中量，焼土粒子微量，締り弱 |

覆土 5層に分層される。ブロック状に堆積し、層内にロームブロックを不均一に含むことから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量，締り弱 | | |

遺物出土状況 土師器片211点(坏23, 高台付皿4, 寛184), 須恵器片16点(坏9, 蓋5, 寛2), 石器1点(砥石)が出土している。5225は中央部, 5229は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土している。5230は竈内の覆土中層, 中央部の床面, 南壁際の覆土上層から出土した破片が接合したもので, 土層の堆積状況と併せて,



第65図 第617号住居跡出土遺物実測図

住居の焼絶時に投棄されたものと考えられる。5226は中央部の覆上下層から出土しているが、時期から判断すると流れ込みと考えられる。

所見 出土土器の時期は、床面から出土した5225・5229が8世紀中葉、覆土下層から出土した5226は9世紀後葉であるが、木跡を掘り込んでいる第616号住居は8世紀末葉から9世紀初葉のものと考えられるため、5226は近隣の遺構からの流れ込みであると判断され、時期は8世紀中葉と考えられる。

第617号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5225	須恵器	杯	12.5	3.8	8.5	小礫、長石	黄灰	普通	底面回転ヘラ切り	中央部下層	100%, PL33
5226	土師器	高台杯	13.6	2.8	16.8	長石、白雲母	にぶい黒	普通	底面回転ヘラ切り、底面内面一定方向ヘラミゾキ	中央部下層	70%, PL33
5227	須恵器	鉢	-	(2.6)	-	小礫、長石	灰	普通	天井部回転ヘラ掘り	東部中層	50%
5228	土師器	小形壺	13.6	15.3	16.9	石灰、白雲母	にぶい黒	普通	口縁部内外面横ナゲ、内面ヘラナゲ	竪穴南壁際下層	5%, 須恵器底、85% 灰土
5229	土師器	壺	23.8	19.0	-	石灰、長石、金雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナゲ、内面ヘラナゲ	北東内床面	13%
5230	土師器	壺	21.0	(18.6)	-	石灰、長石、金雲母、赤土粒子	暗赤黒	普通	口縁部内外面横ナゲ、内面ヘラナゲ	竪穴南壁際上層	20%, 外面厚付者

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5231	灰石	16.3	10.2	7.8	1270	凝灰岩	紙面2面	東壁際中層	PL47

第618号住居跡 (第66図)

位置 調査区東部のF12d1区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第619号住居跡、第37号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.4m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-96°-Eである。壁高は8~12cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝が全周している。

竪 東壁のやや南寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは70cmで、壁外への掘り込みはほとんどない。袖部幅は85cmである。天井部は残存していないが、第5層が崩落した天井の一部と推定される。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竪の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竪土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、焼り屑
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック中層、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック・砂粒少量、焼り屑
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼り屑
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中層、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量、焼り屑
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック・砂粒中層、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量、焼り屑
- 7 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中層、ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量
- 9 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 11 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ30cmで、西壁際中央の竪に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2は深さ40cmで、竪の左脇に位置しているが、性格は不明である。

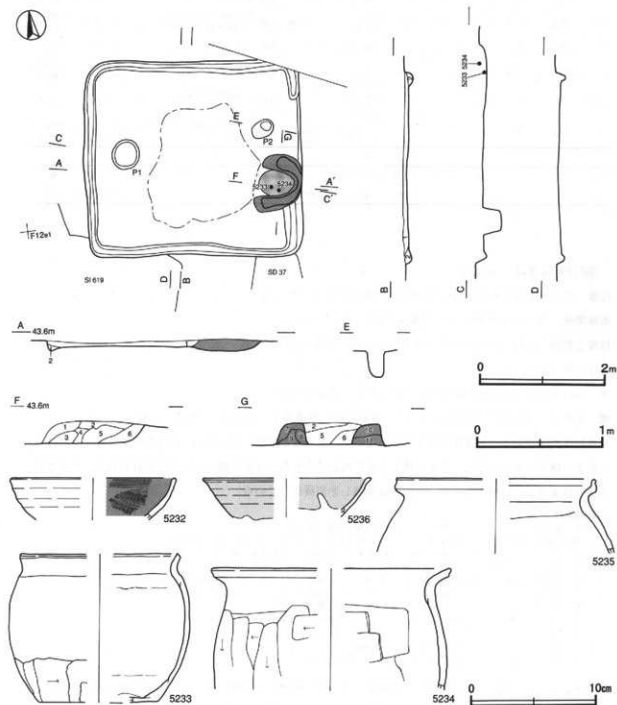
覆土 2層に分層される。覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量、礫り砂
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量、礫り砂

遺物出土状況 土師器片167点(坏46, 碗4, 小形甕2, 甕115), 須恵器片13点(坏6, 甕7), 灰輪陶器片1点(碗)が竈内や北東部にやや集中して出土している。須恵器は細片が多く、流れ込みと考えられる。5233・5234は竈内から出土している。

所見 9世紀後葉と考えられる第619号住居跡を掘り込んでおり、食膳具が土師器を主体とすることから、時期は10世紀前葉と考えられる。



第66図 第618号住居跡・出土遺物実測図

第618号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5232	土師器	坏	〔12.8〕	(3.4)	—	有灰, 金雲母	にぶい濁	普通	内面ヘラミガキ	覆土中	10%
5233	土師器	小形壺	〔12.4〕	11.9	〔9.4〕	有灰, 金雲母	にぶい濁	普通	口縁部内外面ナデ, 輪縁み取	壺内	20%
5234	土師器	壺	〔19.6〕	(9.8)	—	有灰, 金雲母, 赤色砂子	にぶい赤濁	普通	口縁部内外面ナデ, 内面ヘラナデ	壺内	10%
5235	土師器	壺	〔15.7〕	(6.0)	—	灰石, 金雲母, 赤色砂子	明赤濁	普通	口縁部内外面ナデ, 内面ヘラナデ	覆土中	10%
5236	灰輪陶器	罎	〔13.2〕	(3.2)	—	微塵, 黒色砂子	黄灰, 灰オリーブ	良好	作部内外面灰輪刷毛並り	覆土中	5%, 埋没差 埋没50号室式

第619号住居跡 (第67～69図)

位置 調査区東部のF11e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第617・642号住居跡を掘り込み、第618号住居、第64号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.1m、短軸4.4mの長方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は16～24cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、中央部から西・南縁際と貯蔵穴の前が踏み固められており、壁溝が第64号井戸に掘り込まれた部分以外を巡っている。

壁 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは130cmで、壁外へ90cmほど掘り込んでおり、袖部幅は155cmである。天井部は残存していないが、第2層が崩落した天井の一部と推測される。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから窓の作り替えが行われたと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱し赤変硬化している。第8層が火床面で、第9・10層は窓の掘り方である。

埋土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微塵、綿り炭
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微塵、綿り炭
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微塵
- 4 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微塵
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微塵、綿り炭
- 6 黒褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子微塵、綿り炭
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微塵
- 8 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微塵、粘性面
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微塵
- 10 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、粘性面
- 11 粘土ブロック
- 12 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微塵、炭化粒子微塵、綿り炭
- 13 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微塵、粘性・綿り炭
- 14 黒褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微塵、綿り炭
- 15 暗褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微塵
- 16 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子微塵、綿り炭

ピット 3か所。P1は深さ22cmで南縁際中央の窓に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2・P3は深さ50cmと35cmで中央部に位置するもの、柱穴であった可能性が考えられる。

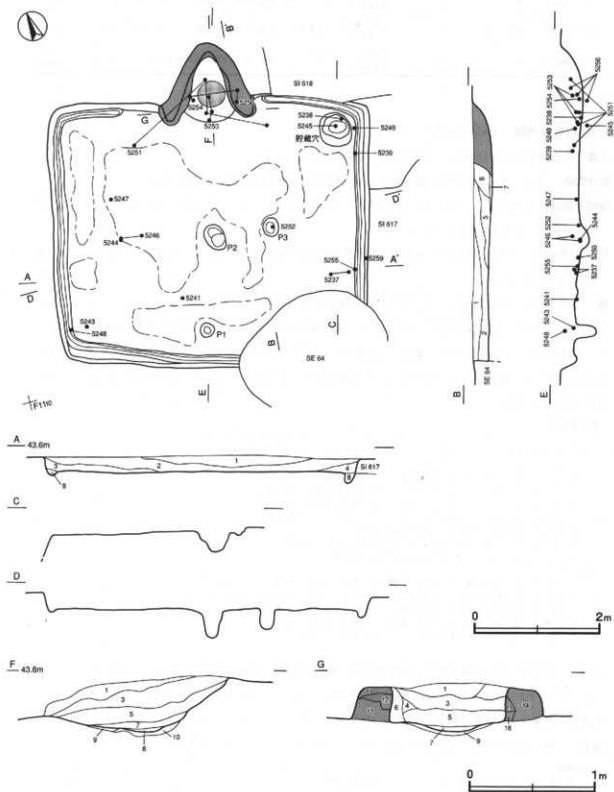
貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。径55cm、深さ30cmの円形で、底面は皿状である。

覆土 8層に分層される。層内にロームブロックを不均一に含み、人為地積と考えられる。

埋土層解説

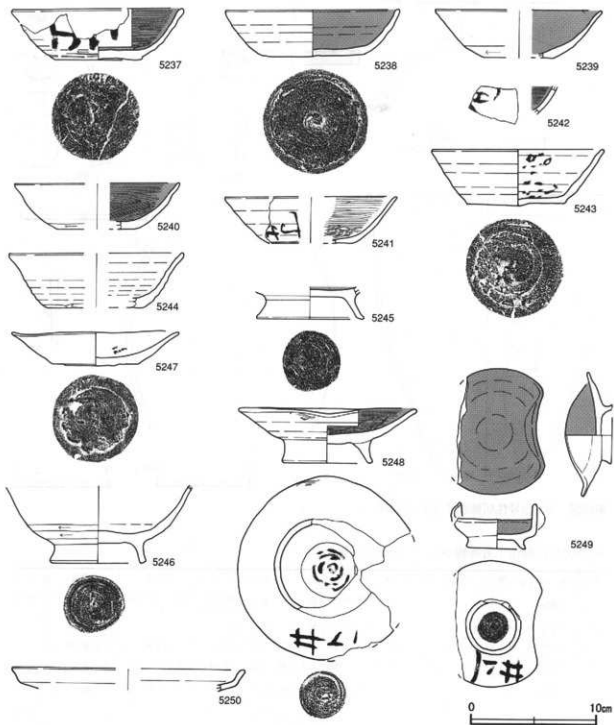
- | | |
|-------------------------------|--|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微塵 | 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微塵、綿り炭 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微塵 | 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微塵 |
| 3 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微塵 | 8 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微塵 | |
| 5 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片527点(坏139, 碗20, 皿2, 高台付皿5, 耳皿1, 鉢13, 器台1, 甕323, 瓶23), 須恵器片80点(坏38, 高台付坏1, 盤1, 蓋3, 鉢8, 瓶4, 甕25), 灰釉陶器片4点(碗カ1, 長頸瓶3), 縄文土器片2点, 土製品1点(管状土錘), 鉄製品1点(釘)が全体に散在して出土している。やや離れた場所から出土した破片が接合したものがあり, 遺物を住居廃絶時に投棄したものと考えられる。5238と5245は貯蔵

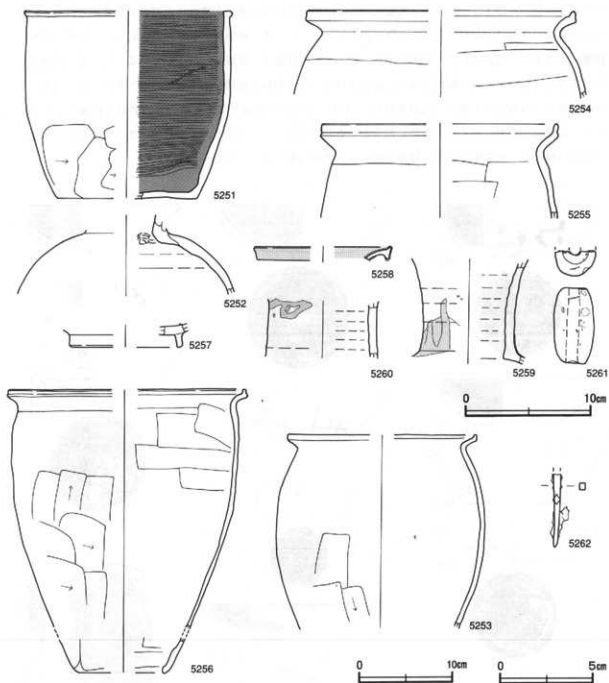


第67図 第619号住居跡実測図

穴の覆土中層から出土したもので、貯藏穴の埋没に伴い住居内の遺物が流れ込んだものと考えられる。5256は左右の袖部の内側に貼り付けられた状態で出土したもので、竈の補強材として使用されていたと推定される。所見 「井上」と墨書された土師器が4点（坏2，高台付皿1，耳皿1）出土している。中でも5248は高台圈内に朱墨痕が見られ、硯に転用されたと推定される。灰軸陶器も数個体出土しており、本跡の居住者をこれらの物を所持できるだけの地位・役割を持ち、「井上」の文字を標識とする集団の有力者層と推測することができる。時期は食膳具に占める土師器の割合が須恵器を上回っていること、土師器碗・皿・瓶の存在、須恵器高台付坏の椀形化、灰軸陶器の年代観などから、9世紀後葉と考えられる。



第68図 第619号住居跡出土遺物実測図(1)



第69図 第619号住居跡出土遺物実測図(2)

第619号住居跡出土遺物観察表 (第68・69図)

番号	種別	器種	口径	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
5237	土師器	坏	13.4	4.1	6.6		石英、長石、 金雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面 不定方向ヘラミガキ	竪穴内層下1層 [目]上、PL33-42	95%、体部外面磨 削上、PL33-42	
5238	土師器	坏	13.8	3.7	8.4		石英、長石、金雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	貯蔵穴内中層	80%、PL33	
5239	土師器	坏	[13.0]		3.8	[5.6]	石英、長石、金雲母	にぶい	稀	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面ナデ	北東角中層	30%
5240	土師器	坏	[13.2]	(3.7)	[6.2]		石英、長石、金雲母	にぶい	稀	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	15%
5241	土師器	坏	[13.6]		3.7	[6.6]	石英、長石、 金雲母	にぶい	稀	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面 不定方向ヘラミガキ	中央部床面	20%、体部外面磨 削上、PL41
5242	土師器	坏	-	(2.3)	-		長石	にぶい	橙	普通	口クロナデ	覆土中	5%、体部外面 磨削[目]

番号	種類	部材	口径	径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5243	須恵器	埴	13.8	4.5	7.9		石英、長石、黒雲母	灰青濁	不食	底部回転ヘラ切り、酸化炭焼成	南西向下層	80%、内外割 着付着、PL33
5244	須恵器	埴	13.8	4.4	7.5		石英、長石	にぶい青	普通	底部回転ヘラ切り、酸化炭焼成	西部下層	30%
5245	土師器	椀	-	(2.6)	8.5		石英、黒石、黒雲母、赤色粒子	にぶい青	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	貯蔵穴下層	25%
5246	須恵器	灰台付埴	-	(6.2)	7.2		長石、黒雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	西部下層	50%、PL34
5247	土師器	皿	13.2	2.8	6.8		石英、長石、黒雲母	にぶい灰青	普通	底部回転ヘラ切り	西部下層	90%、内面割 付着、PL31
5248	土師器	高台付皿	14.2	4.5	7.2		石英、長石、黒雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面不定方向ヘラミガキ	南西向中層	80%、底部割着 「9」上、高台割着 黒石、赤雲母の至 A部埋入、PL31-2
5249	土師器	耳皿	9.8	3.7	4.6		石英、長石、金雲母	明濁	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北東角下層	80%、底部割着 計上、PL31-2
5250	須恵器	壺	18.2	(1.7)	-		石英、長石	黄灰	普通	内外面口クロナデ	覆土中	5%
5251	土師器	鉢	16.5	15.0	11.2		石英、長石	にぶい赤濁	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	貯蔵穴下層	40%、PL34
5252	須恵器	長頸瓶	-	(5.3)	-		緑泥片、黒雲母	灰	普通	頸部内面消筋状、輪襷み焼	中央部保内	10%
5253	土師器	甕	22.3	(23.2)	-		石英、長石、赤色粒子	明赤濁	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	壺内	30%、外割着付 着、黒熟灰
5254	土師器	甕	21.2	(7.0)	-		石英、長石、黒雲母、赤色粒子	にぶい赤濁	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	壺内	10%、黒熟灰
5255	土師器	甕	18.7	(7.7)	-		石英、長石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	東壁階床面	10%、黒熟灰
5256	土師器	甕	27.8	(28.5)	-		石英、長石、金雲母	明濁	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	左右側部保内	60%、黒熟灰、 PL34
5257	灰輪陶器	甕	-	(1.0)	(8.8)		黒雲母、黒色粒子	灰白、灰白	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	5%、黒熟灰 黒雲母の割着
5258	灰輪陶器	長頸瓶	11.0	(1.2)	-		黒雲母、黒色粒子	灰白、オリーブ	良好	内外面口クロナデ	壺土中	5%、黒熟灰 厚底90号壺
5259	灰輪陶器	長頸瓶	-	(8.4)	-		黒雲母、黒色粒子	灰白、灰ナゴリーブ	良好	内外面口クロナデ	東壁階床面	5%、黒熟灰、300 号壺、黒熟灰
5260	灰輪陶器	長頸瓶	-	(4.7)	-		黒雲母、黒色粒子	黄灰、オリーブ	良好	内外面口クロナデ	覆土中	5%、黒熟灰、300 号壺、黒熟灰

番号	種類	長さ	最大径	口径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3261	管状土鍋	6.1	3.3	0.9	35.6	粘土	外面ナデ、指環状痕	壺土中	50%、PL44

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3262	釘	(3.9)	(6.4)	0.4	(6.3)	鉄	基部を欠く	壺土中	

第621号住居跡 (第70図)

位置 調査区東部のF11c9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第622号住居跡を掘り込み、第1641号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は2.6mで、南北長は北側が調査区域外へ延びており、1.0mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向は壺もピットもないため、南壁から推測すると、N-12°-Eである。

壁高は20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

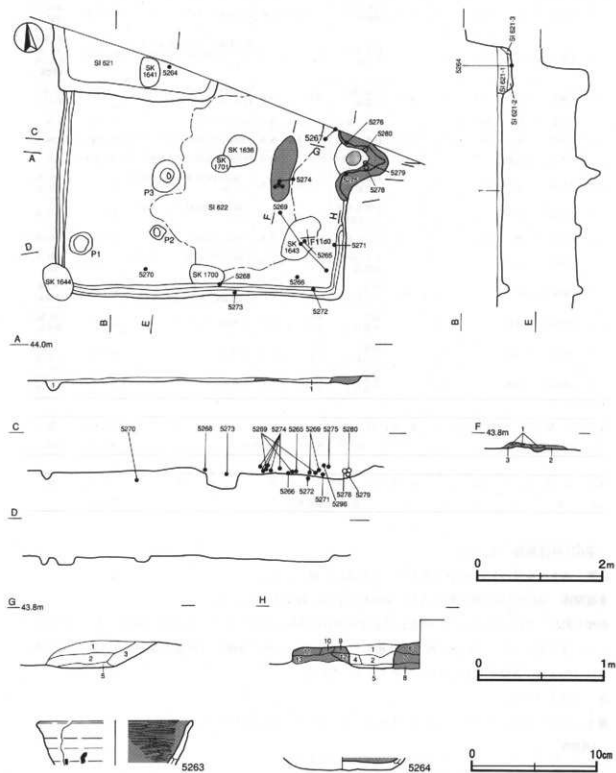
覆土 3層に分層されるが、一部分しか確認できなかったため、非堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土較り少量、炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土較り、炭化粒子微量、粘り弱
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片37点(坏18, 甕19), 須恵器片3点(坏1, 甕2), 鉄滓1点が出土している。ほとんどが細片で図示できなかったが, 5264が床面から出土している。

所見 遺構の大半が調査区域外に延びており, 全容は判明しないが, 9世紀後葉と考えられる第622号住居跡を掘り込んでいることから, 時期は10世紀以降と考えられる。



第70図 第621・622号住居跡, 第621号住居跡出土遺物実測図

第621号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色	調	焼成	予法の特徴	出土位置	備考
5263	土師器	坏	[12.4]	(3.5)	-	石英、長石	にふい粉	普通	ロクロナテ		覆土中	5% 体部外面に黒い土質
5264	土師器	坏	-	(1.0)	7.5	石英、長石	橙	普通	瓦部面転へく切り		中央部床面	20%

第622号住居跡 (第70～72図)

位置 調査区東部のF11e9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第621号住居、第1636・1643・1644・1700・1701号上坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は4.6mで、南北長は北側が調査区域外へ延び、第621号住居に掘り込まれているため、3.2mのみ確認できた。形状は方形あるいは長方形で、主軸方向はN-101°-Eである。壁高は2～12cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が陥み固められている。壕溝は調査区域内では全周している。

竈 東壁に付設されている。焚1部から煙道部までは90cmで、壁外へ70cmほど掘り込んでおり、袖部幅は115cmである。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

覆土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化植物質、縷り炭	8	暗褐色	焼土粒中量、ローム粒子・粘土粒子少量
2	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粘土粒子	9	暗褐色	焼土粒中量、粘土粒少量、ローム粒少量、粘性・縷り炭
3	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粘土粒子	10	暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量、粘性・縷り炭
4	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粘土・粘土粒子少量、粘性強、縷り炭	11	暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、粘性・縷り炭
5	赤褐色	焼土粒中量、粘土ブロック微量	12	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、粘性強
6	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	13	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量、粘性強
7	褐色	ローム粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量、粘性強			

ピット 3か所。P1は深さ15cm、P2は深さ10cmで南西部に位置するが、性格は不明である。P3は中央部に位置し深さが43cmで東側の床が踏み固められており、柱穴の可能性がある。

覆土 単一層で覆土は薄く、堆積状況は不明である。粘土塊が竈前から出土している。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

粘土塊土層解説

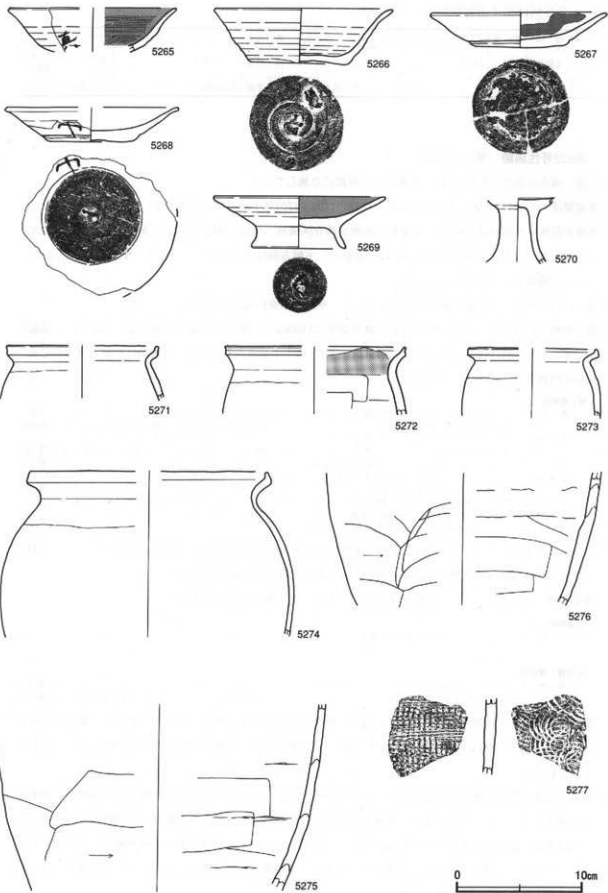
1 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、粘性強

2 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粘土少量

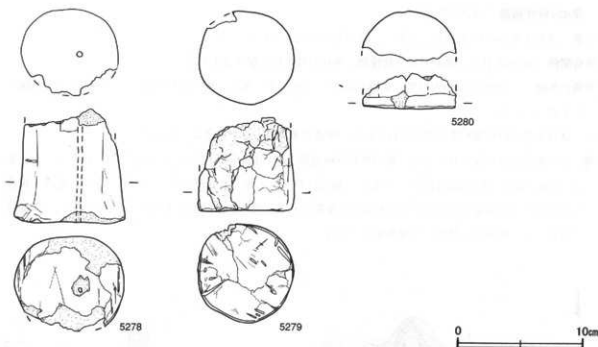
3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粘土少量

遺物出土状況 土師器片404点(坏127, 碗3, 皿2, 高台付皿8, 鉢2, 高坏1, 甕261), 須恵器片34点(坏18, 蓋1, 瓶1, 甕14), 緑釉陶器片1点(皿カ), 土製品3点(支脚), 鉄滓1点が南壁際にやや集中して出土している。

所見 5268は体部外面に黒着があり「中」と読める。欠損しているため上部は不明だが、書体から判断すると別文字の「天」の可能性があり、類例が福島県上吉田遺跡、千葉県寺崎遺跡群向原遺跡などに求められる。5272は内面に漆の付着が見られ、貯蔵容器として使用されていた可能性がある。緑釉陶器片は細片で図示できなかったため、一覧表(表13)に記載した。時期は土師器皿・高台付皿が一定量出土し須恵器坏がまだ見られることから、9世紀後半と考えられる。



第71图 第622号住居跡出土遺物実測図(1)



第72図 第622号住居跡・出土遺物実測図(2)

第622号住居跡出土遺物観察表 (第71・72図)

番号	種別	器種	口径	口径高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5265	土師器	坏	[13.2]	(3.5)	-	石英, 長石, 金雲母	明赤褐	普通	ロクロナデ	南東部床面	10%, 外部外面 磨削瓦上, PL34
5266	須恵器	坏	14.0	4.5	7.6	小礫, 長石, 黒雲母	灰白	不良	底部回転ヘラ切り	南東角床面	90%, 新治産, PL34
5267	土師器	皿	13.7	3.0	7.3	石英, 長石	褐	普通	底部回転ヘラ切り	竈前床面	80%, PL34
5268	土師器	皿	[14.0]	2.9	7.4	石英, 長石, 黒雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際床面	70%, 外部外面 磨削上, PL34-45
5269	土師器	高台付皿	13.6	4.2	7.1	石英, 長石	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	南東部床面	80%, PL34
5270	土師器	高坏	-	(5.3)	-	石英, 長石	橙	普通	外面ナデ, 内面一定方向ヘラミガキ	掘り方中	10%
5271	土師器	小形甕	[12.0]	(4.4)	-	石英, 長石, 金雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	東壁際床面	10%
5272	土師器	小形甕	[14.4]	(5.0)	-	石英, 長石, 赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	南東角床面	10%, 内面 漆付着
5273	土師器	小形甕	[10.3]	(5.5)	-	石英, 長石, 赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	南壁際床面	10%
5274	土師器	甕	[18.8]	(13.4)	-	石英, 長石, 金雲母	赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	竈前下層	20%
5275	土師器	甕	-	(15.0)	-	石英, 長石, 赤色粒子	暗赤灰	普通	内面ヘラナデ, 輪積み痕	竈左袖部	10%
5276	土師器	甕	-	(10.7)	-	石英, 長石, 赤色粒子	明赤褐	普通	内面ヘラナデ, 輪積み痕	竈左袖部	5%
5277	須恵器	甕	-	(6.1)	-	長石	褐灰	普通	外面叩き, 内面同心円状当て具痕	掘り方中	5%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5278	支脚	(9.1)	8.8	7.4	(455)	粘土	ナデ, 中央部に径5mmの孔, 底部繊維状圧痕, 被熱痕, 胎土に石英・長石含む	竈内	
5279	支脚	(7.5)	7.6	7.9	(377)	粘土	ナデ, 底部繊維状圧痕, 被熱痕, 胎土に石英・長石含む	竈内	
5280	支脚	(2.8)	(7.3)	-	(61.2)	粘土	ナデ, 底部繊維状圧痕, 指頭圧痕, 被熱痕, 胎土に石英・長石含む	竈内	

第624号住居跡（第73・74図）

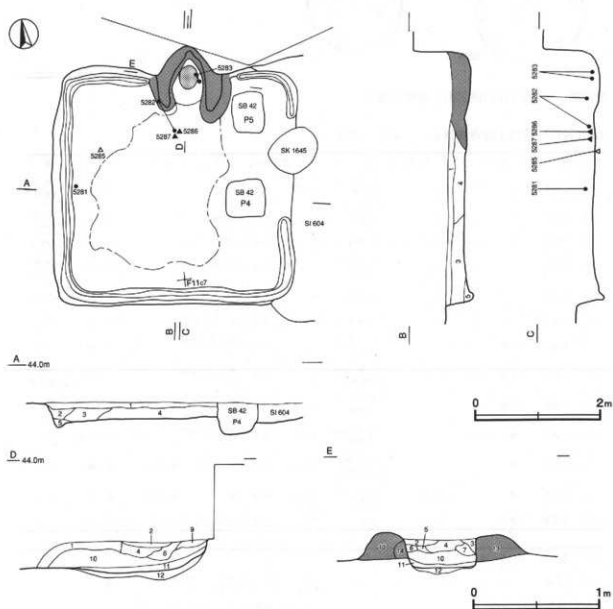
位置 調査区東部のF11b6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第604号住居、第42号掘立柱建物、第1645号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が3.8mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は約30cmで、各壁ともやや傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で中央部が踏み固められている。壁溝が東側の一部を除き巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは100cmで、壁外へ50cmほど掘り込んでおり、袖幅は130cmである。天井部は残存していない。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ、火床面は上下に重なって二面あり、被熱し赤変硬化している。



第73図 第624号住居跡実測図

覆土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量	9 暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	10 暗褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量、粘性強
3 灰黄褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子微量、粘性強	11 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量、締り弱
4 黒褐色	粘土粒子多量、ロームブロック微量	12 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量、締り弱
5 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	13 暗褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、締り強
6 暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量、粘性強	14 暗褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、締り強
7 黒褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量		
8 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量		

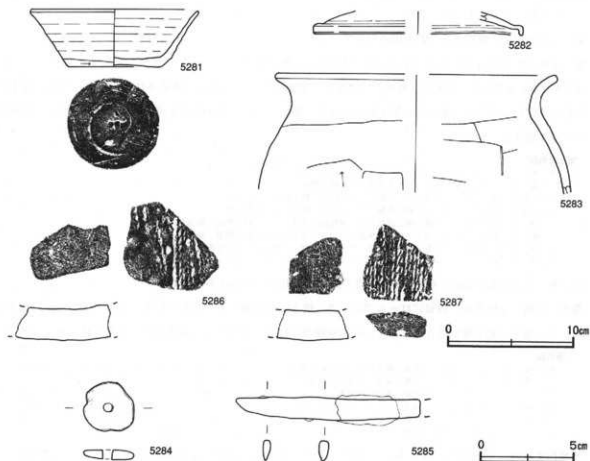
覆土 5層に分層される。第2～4層はブロック状に堆積しており、人為堆積と考えられ、その後第1層が自然堆積したものと推測される。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量、締り弱	3 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量、締り弱
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量、締り弱	4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、締り弱
		5 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片256点(坏57, 碗7, 甕192), 須恵器片31点(坏16, 高台付坏2, 蓋2, 甕11), 石製品1点(紡錘車), 鉄製品1点(刀子), 瓦2点(平瓦カ)が北西側にやや集中して出土している。5285は西部の床面から出土し、5286・5287は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第74図 第624号住居跡出土遺物実測図

第624号住居跡出土遺物観察表 (第74図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5281	須恵器	坏	13.2	4.6	7.2	石灰、長石	黄灰	普通	底部四角へく切り後一定方向へく切り	西壁際下層	90%、PI.3G
5282	須恵器	蓋	[16.4]	[3.8]	—	石灰、長石	灰	普通	ロクロナデ	竈内下層	15%
5283	土師器	甕	[22.0]	[9.5]	—	石灰、長石、金雲母	黒	普通	口縁部内外面横ナデ、内面へラナデ	竈内	5%

番号	器種	最大径	口径	厚さ	底径	材質	特徴	備考	出土位置	備考
5284	踏踏平	2.7	0.4	0.55	4.7	シルト	全面腐蝕		竈上中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考	出土位置	備考
5285	刀子	(9.7)	1.1	0.4	(12.3)	鉄	基部を欠く、一面に木質付着		西部床面	
5286	平瓦 α	(6.8)	(7.5)	2.7	(140.0)	粘土	四面布目模、凸面隅押し痕		中央部下層	
5287	平瓦 β	(6.2)	(5.6)	2.5	(93.3)	粘土	西面布目模、凸面隅押し痕		中央部下層	

第625号住居跡 (第75・76図)

位置 調査区東部のF11d7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第609・623B号住居跡を掘り込み、第38号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.4m、短軸3.9mの長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は10~20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、壁際を除き踏み固められている。

竈 北壁のやや東寄りに行設されている。焚口部から煙道部までは100cmで、壁外へ50cmほど掘り込んでおり、袖部幅は100cmである。天井部は残存していない。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 5 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性強、練り強
- 6 黒褐色 粘土ブロック・焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、練り強
- 7 黒褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量、練り強
- 8 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量、粘性強、練り強

ピット P1は深さ50cmで西側のやや南寄りに確認された。性状は不明である。

覆土 10層に分層され、各層にロームブロック・焼土・炭化物を多く含んでいる。また、床面上から覆土中層にかけて焼土・粘土塊が散在しており、住居廃絶時に投棄されたものと推測され、人為堆積と考えられる。

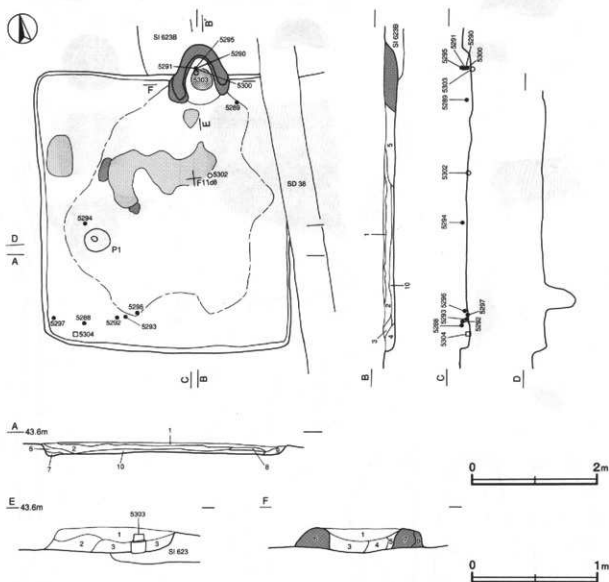
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量
- 8 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性強

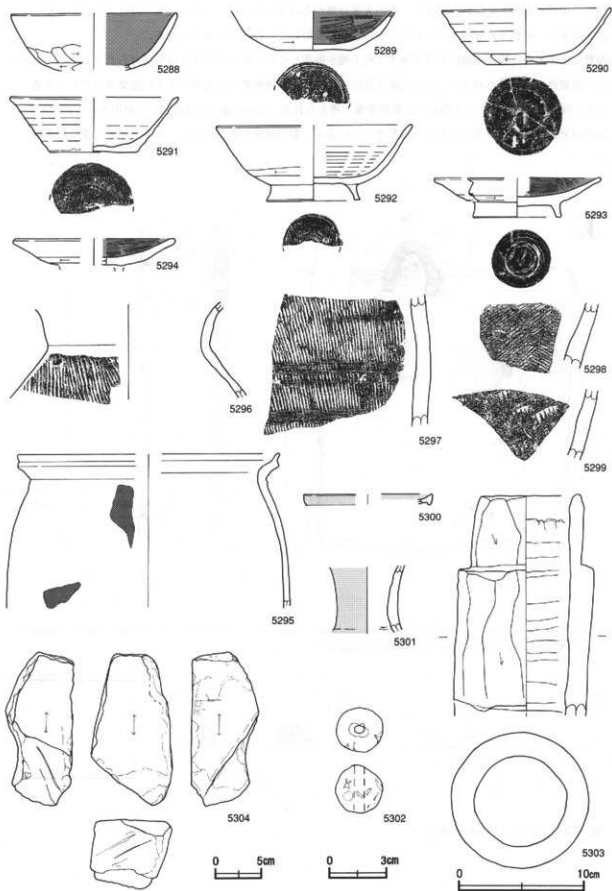
遺物出土状況 土師器片235点(坏120, 碗8, 匣1, 器台1, 壺105), 須恵器片74点(坏31, 高台付坏4, 甕3, 鉢1, 甕35), 灰釉陶器片2点(長頸瓶), 土製品2点(球状土錘1, 支脚1), 石器1点(砥石)が中央部から南西側にやや集中して出土している。5302は中央部, 5293・5297・5304は南側から南西コーナ一部にか

けての床面から出土している。また、竈の火床面奥からは下から5303・5300・5290・5291・5295が重なった状態で出土し、それぞれ被熱していることから支脚に転用していたものと考えられる。

所見 床面上から覆土中層にかけて焼土・粘土塊が散在しているが、炭化材等は見受けられず、出土した遺物に二次被熱の痕が見られないことから焼失住居ではなく、住居廃絶時に遺物とともに投棄されたものと考えられる。時期は、竈内出土の土器から9世紀後葉と考えられる。5303は竈内で支脚として使用されていたもので、形態は丸瓦を2つ張り合わせたような形をしているが、製作技法が瓦とは違い、本来の用途・性格は不明である。



第75図 第625号住居跡実測図



第76图 第625号住居跡出土遺物実測図

第625号住居跡出土遺物観察表 (第76図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	予法の特徴	出土位置	備考
5288	土師器	杯	[13.2]	(4.0)	-	灰石, 白雲母, 赤色砂子	赤褐	普通	内面ナテ	南西部中層	25%
5289	土師器	杯	-	(3.2)	[5.8]	灰石, 白雲母, 赤色砂子	赤褐	普通	底部回転ヘラ切り	北東部中層	23%
5290	須恵器	杯	[13.4]	4.4	6.2	石英, 黒炭粒	橙	不具	底部回転ヘラ切り, 強化炭粒	壺内	50% 被熱痕, PL35
5291	須恵器	杯	[13.2]	4.4	[7.0]	石英, 赤色砂子	赤褐	不具	底部回転ヘラ切り, 強化炭粒	壺内	30% 被熱痕
5292	土師器	碗	[15.5]	6.2	7.5	白雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	南西部中層	35% 被熱痕
5293	土師器	高台付皿	[13.2]	3.2	6.3	石英, 赤色砂子	赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	南西部中層	35% 被熱痕, PL35, 底部回転ヘラ切り
5294	土師器	高台付皿	[12.6]	(2.1)	-	石英, 白雲母	赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	西西部中層	20%
5295	土師器	壺	[20.6]	(12.3)	-	石英, 長石	赤褐	普通	口縁部内外面横ナテ, 内面ナテ	壺内	10% 被熱痕, 外面部分有
5296	須恵器	壺	-	(7.7)	-	石英, 長石, 白雲母	赤褐	普通	口縁部内外面横ナテ, 内面ナテ, 底部外面叩き	南西部	10% 新治産
5297	須恵器	壺	-	(10.6)	-	石英	灰	普通	外面叩き	南西部中層	5%
5298	須恵器	壺	-	(5.3)	-	石英, 長石	灰	普通	外面叩き	覆上中	5%
5299	須恵器	壺	-	(5.7)	-	石英, 長石	灰	普通	外面叩き, 内面ヘラナテ	覆上中	5%
5300	灰釉陶器	長頸瓶	[10.2]	(0.9)	-	鐵屑, 黒色砂子	灰白, 灰ナテ	良好	内外面ロクロナテ	壺内中層	5% 被熱痕, 器底部分有
5301	灰釉陶器	長頸瓶	-	(5.4)	-	鐵屑, 黒色砂子	灰黄, 灰ナテ	良好	内外面ロクロナテ	覆上中	5% 被熱痕

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5302	球状土師	2.6	2.5	-	14.6	粘土	外面ナテ, 胎土に石英・砂粒含む, 孔径0.55mm	中央部中層	PL44
5304	黒石	[18.2]	(9.7)	8.3	(1630)	砂岩	底面3面, 溝状の痕跡3本	南西部中層	PL46

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3303	支脚	(17.7)	10.8	8.0	(1180)	粘土	外面ヘラ削り, 内面輪研み痕, 被熱痕, 胎土に灰石・砂粒含む	壺内	PL45

第627号住居跡 (第77~79図)

位置 調査区東部のF11d8区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第635号住居, 第1708号土坑, 築38号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.0m, 短軸3.3mの長方形で, 主軸方向はN-8°-Eである。壁高は12~16cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。壁溝が南側の一部を除き巡っている。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは100cmで, 壁外へ60cmほど掘り込んでおり, 袖部幅は100cmである。天井部は残存していないが, 第5層が崩落した天井の一部と考えられる。袖部はロームと粘土で構築されているが, 各層に焼土と炭化物が見られることから甌の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで, 火床面は被熱し赤変硬化している。

甌土層観察

1	暗褐色	焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土上ブロック微量, 糊り強	6	赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, 糊り強
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量, 炭化粒子微量	7	暗褐色	粘土粒子多量, ロームブロック少量, 焼土ブロック微量, 粘性・糊り強
3	暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量, 糊り強	8	暗赤褐色	焼土ブロック中量, 糊り強
4	暗褐色	粘土粒子少量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量, 糊り強	9	暗褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・粘土粒子微量
5	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量, 糊り強	10	暗褐色	粘土ブロック・粘土粒子少量, ローム粒子微量, 糊り強

- | | | | |
|---------|------------------------------|--------|--------------------------------|
| 11 赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子少量、締り強 | 14 暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量、炭化物極微量、締り強 |
| 12 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子微量、締り強 | 15 灰褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量、締り強 |
| 13 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物極微量、締り強 | 16 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物微量、締り強 |

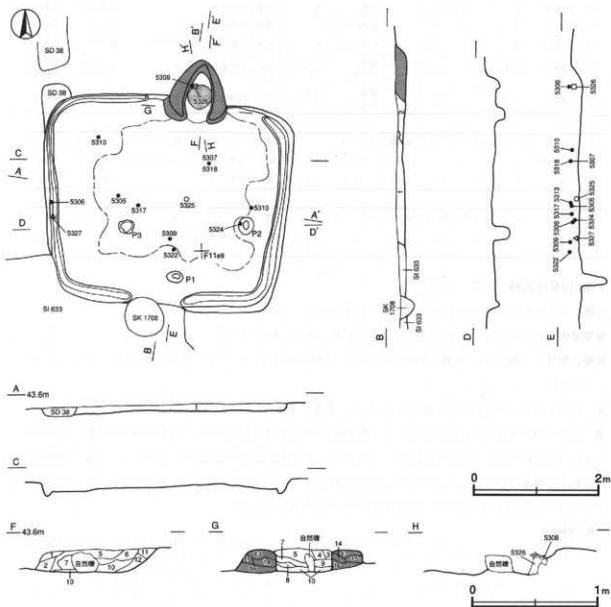
ピット 3か所。P1は深さ43cmで南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。P2・P3は深さ15cmと27cmで中央やや南寄りに位置し、柱穴の可能性が考えられる。

覆土 2層に分層されるが覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量、締り強
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、締り強

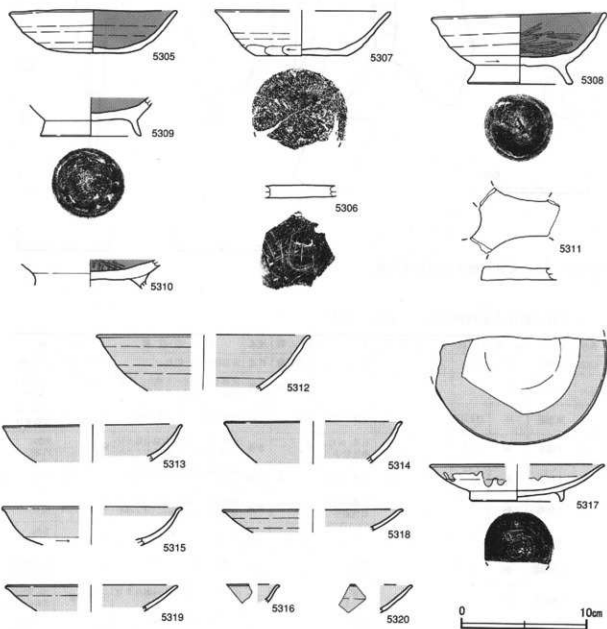
遺物出土状況 土師器片279点(坏114, 碗15, 甕150), 須恵器片28点(坏18, 高台付坏1, 甕8, 瓶1), 灰釉陶器片11点(碗5, 皿4, 長頸瓶2), 緑釉陶器片2点(碗1, 椀1), 土製品1点(球状土錘), 石製品



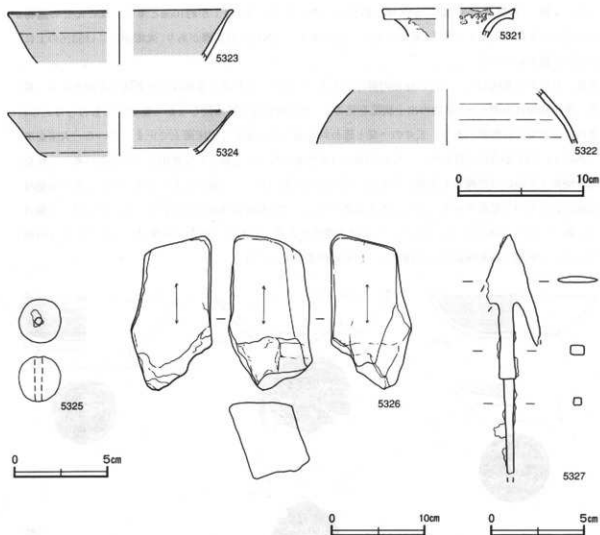
第77図 第627号住居跡実測図

1点(支脚)、鉄製品1点(鎌)が全体に散在して出土している。覆土が約10cmと薄く、ほとんどの遺物が覆土下層から床面での出土である。竈の中央に一辺20cmほどの四角い自然礫があり、火床面奥には5326の上に5308が逆位に置かれていた。

所見 11点の灰軸陶器片、2点の緑軸陶器片が出土しており、居住者に富裕な有力者層を推測させる。覆土が薄く堆積状況は不明だが、遺物の出土状況を見ると、住居廃絶時に埋め戻しながら廃棄したものと考えられる。竈内には中央に自然礫があり、天井の一部と思われる第5層を壊して火床面上で止まっている。火床面奥には5326の上に5308が逆位に置かれていたが5308には被熱痕がなく、支脚として使用していたとは考えられない。竈を廃棄する際に自然礫で天井部から壊し、その後5308を5326の上に置いたものと考えられ、住居廃絶時の竈祭祀に伴うものと推測される。また、出土遺物のうち、5306は底部外面にヘラ書き「卍」があり、魔除けの符号「卍」(九字)の略字と考えられる。5317は東濃窯産と考えられる。時期は食膳具に占める土師器の割合が多いことと灰軸・緑軸陶器の年代観から、9世紀後葉と考えられる。



第78図 第627号住居跡出土遺物実測図(1)



第79図 第627号住居跡出土遺物実測図(2)

第627号住居跡出土遺物観察表 (第78・79図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5305	土師器	坏	13.2	3.5	7.7	石英, 長石, 金鉄屑	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部下層	55%, PL35
5306	土師器	坏	-	(1.0)	-	石英, 長石	にぶい褐	普通	底部不定方向ヘラ削り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	西側階下層	5%, 底部外周ヘラ削り, PLG
5307	須恵器	坏	[14.0]	3.6	[7.3]	小礫, 長石	灰白	不良	底部外面一定方向ヘラ削り	中央部下層	50%, 外面器面荒れ
5308	土師器	碗	13.7	5.8	8.4	石英, 長石, 赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	壺内	80%, PL35
5309	土師器	碗	-	(3.2)	8.0	石英, 長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部上層	20%
5310	土師器	碗	-	(2.2)	-	小礫, 石英, 赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面不定方向ヘラミガキ	北西部上層	15%
5311	須恵器	瓶	-	(1.1)	-	石英, 長石	灰黄褐	普通	外面ナデ	覆土中	5%, 5孔式
5312	灰輪陶器	碗	[16.8]	(4.5)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰オリーブ	良好	灰輪刷毛塗り, 内外面クロコナデ	覆土中	15%, 壁投差 黒塗90号室式
5313	灰輪陶器	碗	[14.2]	(3.0)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, オリーブ灰	良好	灰輪刷毛塗り, 内外面クロコナデ	東部上層	5%, 壁投差 黒塗90号室式
5314	灰輪陶器	碗	[14.0]	(3.4)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰オリーブ	良好	灰輪刷毛塗り, 内外面クロコナデ	覆土中	5%, 壁投差 黒塗90号室式

番号	類別	器種	口径	口径	高さ	重量	材質	色調	状態	手法の特徴	出土位置	備考
5315	灰釉陶器	碗	14.2	13.0	-	-	緻密、黒色粒子	灰白、オリーブ黄	良好	灰釉刷毛塗り、内外面ロクロナデ	壺内	5%、釉薬により変色、底縁部黒色の号式。
5316	灰釉陶器	碗	-	11.5	-	-	緻密、黒色粒子	灰白、灰白	良好	内外面ロクロナデ	壺中層	3%、底縁部黒色の号式。
5317	灰釉陶器	皿	13.8	3.0	7.4	-	緻密	黄灰、オリーブ	良好	底面回縁部切り取り高台部有り、灰釉刷毛塗り、内外面ロクロナデ	中央部上層	20%、底縁部黒色の号式。
5318	灰釉陶器	皿	14.4	11.8	-	-	緻密、黒色粒子	灰、オリーブ	良好	灰釉刷毛塗り、内外面ロクロナデ	中央部上層	5%、底縁部黒色の号式。
5319	灰釉陶器	皿	13.8	2.2	-	-	緻密、黒色粒子	灰白、オリーブ灰	良好	灰釉刷毛塗り、内外面ロクロナデ	壺中層	2%、底縁部黒色の号式。
5320	灰釉陶器	皿	-	12.2	-	-	緻密、黒色粒子	黄灰、オリーブ	良好	灰釉刷毛塗り、内外面ロクロナデ	壺内	5%、底縁部黒色の号式。
5321	灰釉陶器	瓦葺板	130.6	12.3	-	-	緻密、黒色粒子	灰白、灰白	良好	内外面ロクロナデ	壺内	3%、底縁部黒色の号式。
5322	灰釉陶器	瓦葺板	-	14.1	-	-	緻密、黒色粒子	灰白、オリーブ	良好	内外面ロクロナデ	中央部上層	5%、底縁部黒色の号式。
5323	灰釉陶器	碗	17.8	4.1	-	-	緻密、黒色粒子	黄灰、黄みのうすい緑	良好	内外面ロクロナデ	壺中層	5%、底縁部黒色の号式。
5324	灰釉陶器	碗	18.0	13.6	-	-	緻密、黒色粒子	黄灰、明るい黄緑	良好	内外面ロクロナデ	壺部下層	5%、底縁部黒色の号式。

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5325	球状土罐	2.4	2.4	0.4	12.9	粘土	ナデ、胎上に長石含む	中央部層出	PL44

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5326	支脚	18.5	9.8	9.4	(200g)	安山岩	摩滅面有り、砥石を転用、底縁部	壺内	PL47

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5327	皿	12.8	2.8	0.5	(20.1)	飯	高割片方・底部先端を欠く、真向陶	西壁部層出	PL48

第628号住居跡（第80回）

位置 調査区東部のF11d6区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 南北長が2.8mで、東西長は西側が調査区域外へ延びており、1.0mのみ確認できた。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。壁高は25～30cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で中央部が踏み固められており、壁溝が調査区域内では全周している。

ピット P1は深さ10cmで南東コーナー部にあるが、性格は不明である。

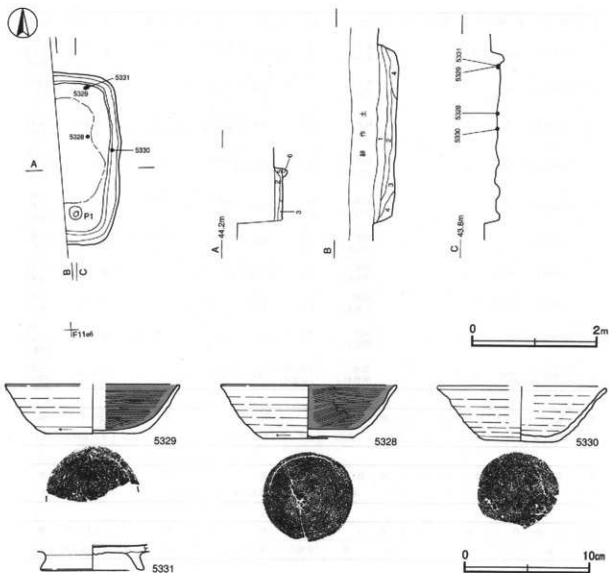
覆土 6層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片31点（坏10、碗1、甕20）、須恵器片5点（坏2、甕3）が出土している。

所見 遺構の大半が調査区域外にあり、全容はつかめなかった。時期は出土土器から9世紀後半と考えられる。



第80図 第628号住居跡・出土遺物実測図

第628号住居跡出土遺物観察表 (第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5328	土師器	坏	14.0	4.4	7.2	石英、長石、 金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面 一定方向ヘラミガキ	東部床面	85%
5329	土師器	坏	[13.8]	3.9	7.4	長石	明褐	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面 不定方向ヘラミガキ	北東部床面	40%
5330	須恵器	坏	[13.6]	4.5	6.8	長石、赤色粘土	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	東壁際床面	50%
5331	土師器	碗	-	(2.0)	8.0	石英、長石、 金雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り 付け	北東部床面	30%

第629号住居跡 (第81・82図)

位置 調査区東部のF11e6区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第630号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.3m、短軸3.5mの長方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は11~20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

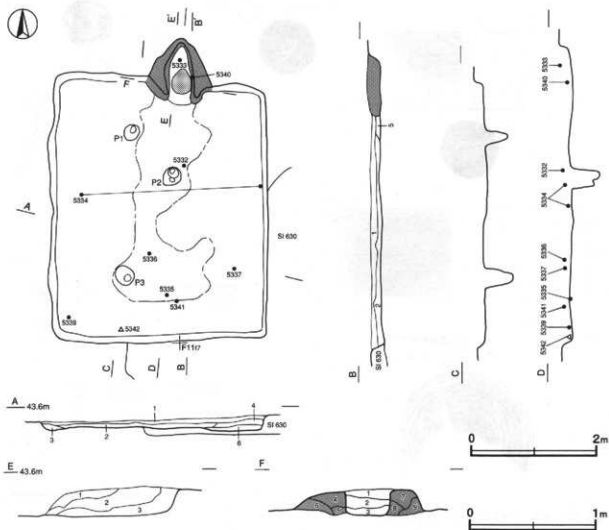
竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは110cmで、壁外へ65cmほど掘り込んでおり、袖部幅は105cmである。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

焼土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物微量
- 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量、練り強
- 6 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量、粘性・練り強
- 7 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量、練り強
- 8 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
- 9 黒褐色 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子微量、粘性・練り強

ピット 3か所。P1・P3は深さ35cmと45cmで中央部の北側と南側に位置し、中心を通る線は主軸方向とほぼ一致する。P2は深さ40cmで中央部に位置している。それぞれ柱穴である可能性があるが、性格は不明である。

覆土 6層に分層される。各層にロームブロック・焼土・炭化物を含み、人為堆積と考えられる。



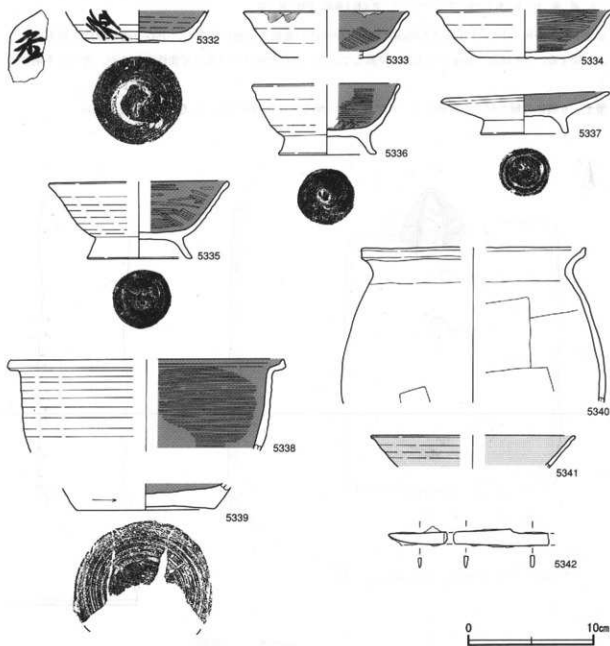
第81図 第629号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土
ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片245点(坏94, 碗14, 皿3, 高台付皿1, 鉢5, 甕128), 須恵器片39点(坏18, 盤1, 甕20), 灰釉陶器片2点(碗), 鉄製品1点(刀子)が全体に散在して出土している。5334のようにやや離れた場所から出土した破片が接合しているものがあり, 遺物を住居廃絶時に投棄したものと考えられる。

所見 9世紀中葉と考えられる第630号住居跡を掘り込んでいること出土土器から, 時期は10世紀前葉と考えられる。



第82図 第629号住居跡出土遺物実測図

第629号住居跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5332	土師器	坏	—	(2.5)	7.3	石英、長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	中央部上層	45%、胎土量多量、口縁部
5333	土師器	坏	[17.1]	3.8	[7.5]	石英、長石	赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り	壺内	50%、口縁部、内外面直付首
5334	土師器	坏	[13.8]	3.8	7.0	石英、長石、金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	東部中層・西部下層	40%
5335	土師器	碗	[14.2]	6.2	8.3	石英、長石	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	南部床面	45%
5336	土師器	碗	[11.6]	5.7	7.5	石英、長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	中央部中層	70%
5337	土師器	高台付瓶	15.1	3.4	6.8	石英、長石	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	東部下層	65%、PL35
5338	土師器	鉢	[21.6]	(7.4)	—	石英、長石、赤色粒子	橙	普通	外面ロクロナデ	層土中	10%、5339と同・細体
5339	土師器	鉢	—	(2.1)	11.0	石英、長石、赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り、底部内面一定方向ヘラミガキ	河内内下層	10%、5338と同
5340	土師器	甕	[18.0]	(12.5)	—	石英、長石	にぶい黄	普通	口縁部内面直付首ナデ	壺内	20%、被燃痕
5341	灰釉陶器	碗	[16.4]	(2.0)	—	胎土、黒色粒子	にぶい灰、灰白	良好	ロクロナデ	南部中層	10%、PL、被燃痕、口縁部直付首

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5342	刀子	(12.7)	1.6	0.3	(14.3)	鉄	刃部中央部・基部基部を欠く	南部1層	

第630号住居跡 (第83・84図)

位置 調査区東部のF11e7区に位置し、平坦部に立地している。

遺構関係 第629号住居、第1642号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.8m、短軸3.0mの長方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は14~25cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝が西側半分と東壁の一部を巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは120cmで、壁外へ70cmほど掘り込んでおり、袖部幅は110cmである。天井部は残存していない。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被燃し赤変焼化している。

焼土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子・焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 5 濃褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量、粘付強
- 8 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
- 9 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、粘り強
- 10 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量、粘り・粘り強
- 11 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量、粘り強
- 12 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量
- 13 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ16cmで南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2は深さ25cmで南東コーナー部に位置しているが、性格は不明である。

貯蔵穴 長径66cm、短径48cmの楕円形で、深さは20cmである。北東部に位置し、底面は皿状である。土層は2

層に分層される。ロームブロック・焼土・炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒 褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量、礫り弱
- 2 黒 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、礫り弱

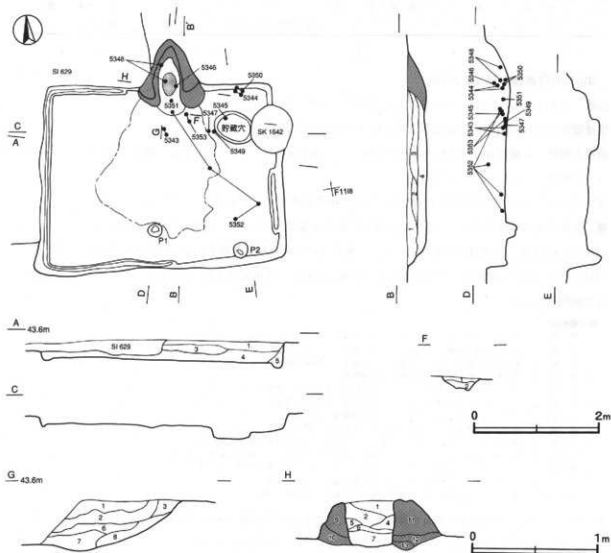
覆土 5層に分層される。ロームブロック・焼土・炭化物を含み人為堆積と考えられる。

土層解説

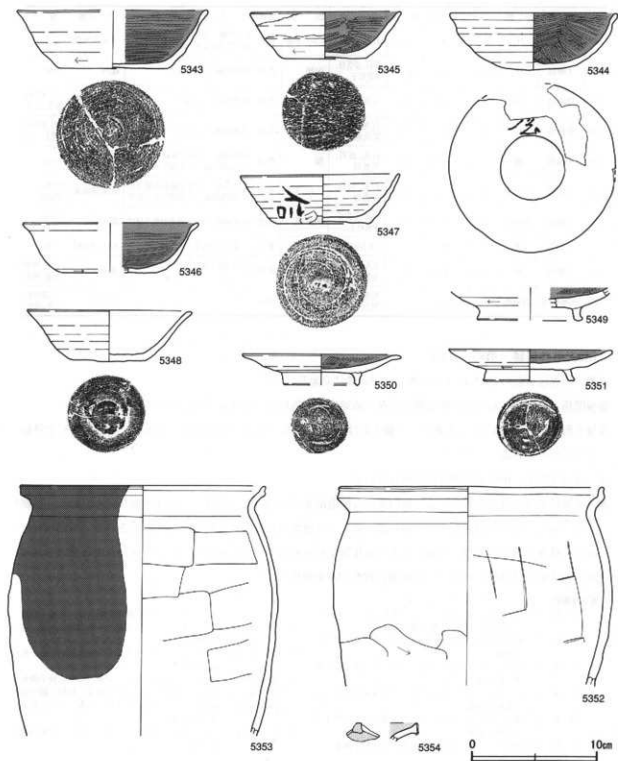
- 1 暗 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 暗 褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 3 暗 褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片335点(坏80, 碗8, 皿5, 高台付皿2, 鉢3, 甕237), 須恵器片40点(坏30, 盤1, 蓋1, 甕8), 灰釉陶器片1点(長頸瓶), 弥生土器片1点が竈前と北東部から集中して出土している。北東部の床面からは5344・5345・5347・5349・5350が出土し, 5343は竈前の床面から出土している。5352は南東部から竈前にかけて散在していた破片が接合したもので, 住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。

所見 10世紀前葉と考えられる第629号住居に掘り込まれており, 土師器坏の体部下端に回転ヘラ削りが見られるものが多いことから, 時期は9世紀中葉と考えられる。



第83図 第630号住居跡実測図



第84図 第630号住居跡出土遺物実測図

第630号住居跡出土遺物観察表 (第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5343	土師器	坏	[15.0]	4.7	8.6	石英, 長石, 黒雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	竈前床面	70%, PL.35
5344	土師器	坏	13.4	4.5	5.1	石英, 長石, 金雲母, 赤色雲子, 白色針状炭素	明赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	北東壁際床面	80%, 外部外面遺物「履」, PL.35-43

番号	種別	器種	口径	径	高さ	底径	胎土	色	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5345	土師器	坏	12.0	3.7	6.6		石英、長石	にぶい赤褐	普通	底面内周一定方向へラ削り、底面内面一定方向へラミガキ、転写もみ	北東部床面	90%、PL35
5346	土師器	坏	13.8	4.0	7.5		長石、金雲母、赤色粒子	赤褐	普通	底面回転へラ削り	竈内	50%
5347	須恵器	坏	12.5	3.8	7.3		石英、長石	灰	普通	底面回転へラ削り	北東部床面	95%、須恵器片少量、PL36-1
5348	須恵器	钵	13.0	4.2	6.2		石英、長石、黒色粒子	黄灰	普通	底面回転へラ削り	竈内	95%、須恵器片少量、PL36-1
5349	土師器	碗	-	(2.8)	18.4		石英、長石、黒雲母	橙	普通	底面回転へラ削り後高台貼り付け、底面内面一定方向へラミガキ	北東部床面	10%
5350	土師器	高台付瓶	12.4	2.5	6.0		石英、長石、金雲母	にぶい赤褐	普通	底面回転へラ削り後高台貼り付け、底面内面一定方向へラミガキ	北東部床面	85%、PL36
5351	土師器	高台付瓶	13.0	2.5	7.3		石英、黒雲母、赤色粒子	明赤褐	普通	次第加圧へラ削り後高台貼り付け	竈内	90%、PL36
5352	土師器	甕	20.8	(16.0)	-		石英、長石、赤雲母	明赤褐	普通	口縁内外両側ナデ、内面へラ削り	竈内-1層目	60%
5353	土師器	甕	19.4	(20.1)	-		石英、金雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁内外両側ナデ、内面へラ削り	竈内床面	50%、外周部分付、焼痕あり
5354	灰輪陶器	長頸瓶	-	(1.5)	-		磁器、黒色粒子	黄灰、灰質	良好	ロクロナデ	竈上中	2%、製造地不明(PL36式)

第633号住居跡 (第85・86図)

位置 調査区東部のF11e8区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第627・632号住居跡を掘り込み、第38号溝、第1708・1731号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一边が3.0mの方形で、主軸方向はN-97°-Eである。壁高は10-12cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が窪み認められている。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは70cmで、壁外へ40cmほど掘り込んでおり、袖部幅は85cmである。天井部は残存していないが、第1・3層が崩落した天井部の一部と推測される。袖部はロームと粘土で構築されているが、各層に焼土と炭化物が見られることから竈の作り替えが行われたと推定される。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は炭化し赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 黒 褐色 | 粘土粒子多量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量、粘性強 | 7 暗 褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 暗 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒 褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子微量、粘性強 | 9 黒 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗 褐色 | 焼土粒子・粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 5 黒 褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 11 暗 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量、粘性・粘り強 |
| 6 黒 褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 12 暗 褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量、粘性強 |
| | | 13 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック少量、粘性・粘り強 |

ピット 2か所。P1は深さ13cmで西壁際中央の竈に對面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2は深さ28cmでP1の北側に設置しているが、性格は不明である。

覆土 3層に分層されるが覆土は薄く、堆積状況は不明である。

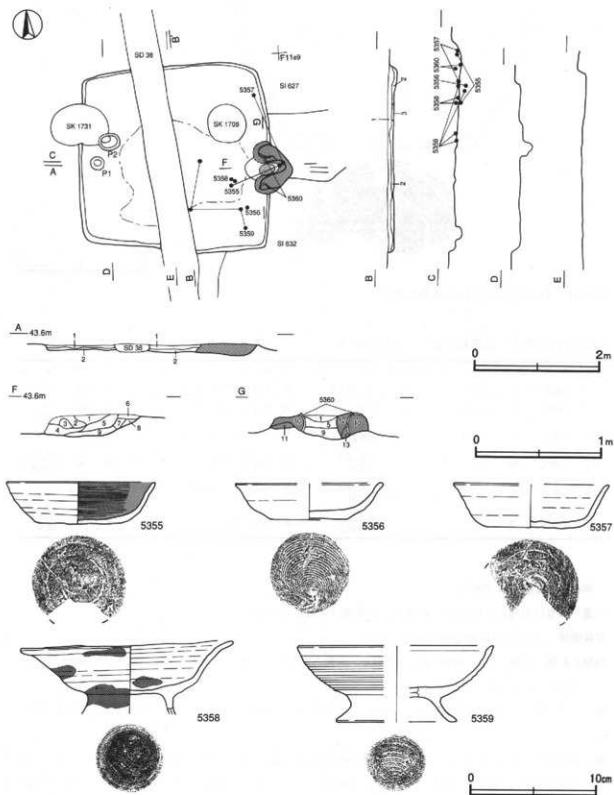
土層解説

- | | | | |
|--------|---------------|--------|-------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック少量、粘り弱 | 3 暗 褐色 | ローム粒子多量、粘り弱 |
| 2 暗 褐色 | ロームブロック中量、粘り弱 | | |

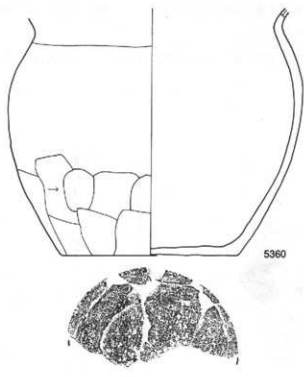
遺物出土状況 土師器片142点(坏55、碗17、甕70)、須恵器片6点(坏1、甕5)が竈前にやや集中して出土している。竈内出土の破片と竈付近から出土した破片が接合するものがあり、廃棄の際に割れ、散らばったも

のと推測される。5360は左右の袖部内に外面を竈の内面に向けてるようにして埋め込まれていた破片が接合したもので、竈の補強材として使用したものと推定される。

所見 環に小形化の傾向が表れ、底部に回転糸切り離しのものが見られること、足高台碗の出現などから、時期は10世紀中葉と考えられる。



第85図 第633号住居跡・出土遺物実測図



第86図 第633号住居跡出土遺物実測図

第633号住居跡出土遺物観察表 (第85・86図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5355	土師器	坏	11.6	3.4	6.8	長石、金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内～竈床面	70%
5356	土師器	坏	[11.6]	2.9	6.3	石英、長石	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	竈脇床面	40%
5357	土師器	坏	[12.7]	3.5	6.5	石英、長石、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈内・北東部床面	40%
5358	土師器	碗	16.7	(6.0)	-	石英、長石、黒雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	竈前床面	9%、正堂内外面保存率PL36
5359	土師器	碗	[15.7]	6.2	[9.6]	石英、長石、黒雲母	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け	竈前～竈床面	50%
5360	土師器	甕	-	(19.8)	[14.1]	石英、長石、赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ナデ	竈左右袖部	50%、PL36

第634号住居跡 (第87図)

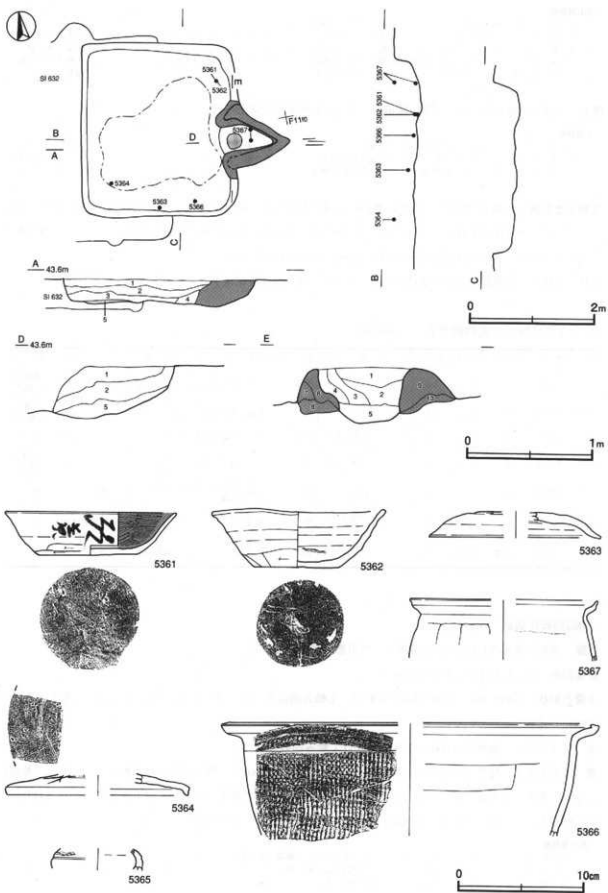
位置 調査区東部のF11e9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第632号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.7m、短軸2.5mの方形で、主軸方向はN-102°-Eである。壁高は30～35cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほは平坦で、中央部が踏み固められている。第632号住居跡を掘り込んでいる部分には一部貼床が見られる。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは110cmで、壁外へ80cmほど掘り込んでおり、袖部幅は120cmである。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されている。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱し赤変硬化している。



第87图 第634号住居跡・出土遺物実測图

覆土層解説

1	黒褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量	6	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、粘質・粘り強
2	黒褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土ブロック少量	7	褐色	粘土粒子多量、ロームブロック微量、粘質・粘り強
3	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量	8	褐色	ロームブロック多量、粘土粒子微量、粘り強
4	黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック微量	9	黒褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子少量
5	暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	10	黒褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量

覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。第5層は粘土である。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	4	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	5	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量、粘り強
3	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片207点(埴49, 甕158), 須恵器片24点(埴7, 盤2, 甕3, 鉢1, 皿10)が出土している。北東部の床面から5361の上に5362がそれぞれ逆位で重ねられた状態で出土した。5365は覆土中から出土しており、第632号住居跡からの流れ込みであると推測される。

所見 食器具に須恵器がまだ少量見られることから、時期は9世紀後半と考えられる。

第634号住居跡出土遺物観察表 (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5361	土師器	埴	13.4	3.5	7.8	石英、長石	明褐色	普通	底面筋線ヘラ切り不完全方向ヘラ削り、底面内面一定方向ヘラミカキ	北東部床面	8% 内面筋線ミカキ、底面筋線
5362	須恵器	埴	13.5	4.8	6.7	長石	灰	普通	底面外面一定方向ヘラ削り	北東部床面	40% 内面筋線ミカキ、底面筋線
5363	須恵器	蓋	13.6	(2.1)	-	石英、長石	灰白	普通	天井部筋線ヘラ削り	南壁下層	20%
5364	須恵器	蓋	14.1	(1.7)	-	小礫、長石	灰	普通	天井部筋線ヘラ削り	南西部上層	5% 天井部ヘラミカキ
5365	須恵器	皿	-	(1.5)	-	長石	灰	普通	外面波状沈殿(2本1単位)、沈殿	覆土中	5%
5366	須恵器	鉢	29.0	(9.0)	-	小礫、長石、金雲母	灰	普通	外面叩き、口縁部内外面積ナデ、内面ヘラナデ	南壁床面	2%
5367	土師器	小形甕	14.8	(4.8)	-	石英、長石、白雲母	褐色	普通	内面ヘラナデ、輪襷み痕	敷内	5%

第635号住居跡 (第88図)

位置 調査区東部のF11g7区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1745号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.4m、短軸2.2mの方形で、主軸方向はN-61°-Eである。壁高は4cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で、露前から住居の北半分にかけて踏み固められている。

竈 東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは90cmで、横外へ60cmほど掘り込んでおり、袖部幅は70cmである。天井部は残存していない。袖部はロームと粘土で構築されているが上面が割平されており、遺存状態が悪い。火床部は床面とほほ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

覆土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック微量、粘り強
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘り強
3	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量

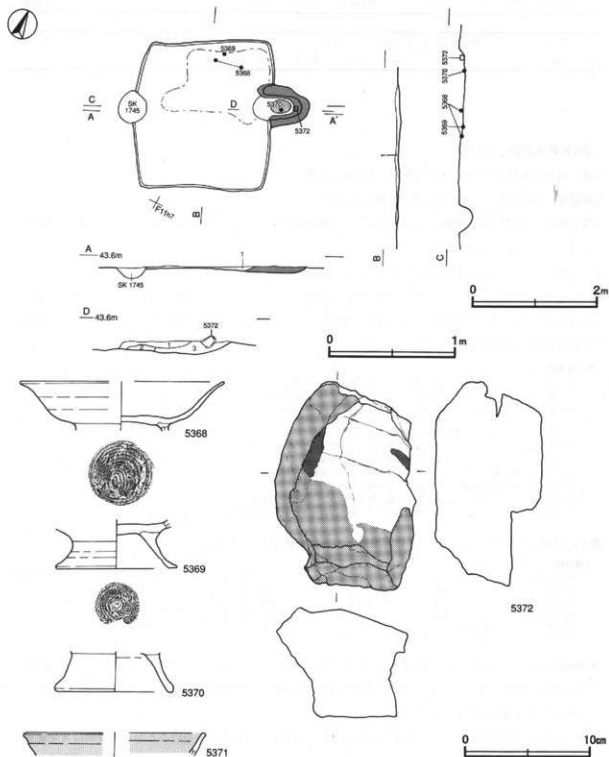
覆土 単一層で覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量、締り弱

遺物出土状況 土師器片45点(坏11, 碗7, 甕27), 須恵器片3点(坏1, 甕2), 灰釉陶器片1点(碗), 石製品1点(支脚カ)が出土している。5368・5369は北東部の覆土下層から, 5370・5371は竈内の覆土から出土している。5372は竈の火床面奥から倒れた状態で出土している。

所見 足高台碗が出土していることなどから, 時期は10世紀後葉と考えられる。



第88図 第635号住居跡・出土遺物実測図

第635号住居跡出土遺物観察表 (第88回)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5368	土師器	碗	[16.2]	(3.9)	-	石灰、赤土、金灰、赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘリ切り後高台貼り付け	北東部下層	50%
5369	土師器	碗	-	(3.9)	9.6	石灰、赤土、金灰、赤色粒子	明赤褐色	普通	底部回転ヘリ切り後高台貼り付け	北東部下層	70%
5370	土師器	碗	-	(3.3)	9.5	石灰、赤土、金灰、赤色粒子	明赤褐色	普通	内外面ナデ	室内	30%
5371	灰輪陶器	碗	[14.0]	(1.8)	-	観音、黒色粒子	灰白、オリーブ底	良好	口ロナデ	室内	2%、観音堂 新築時出土

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	装	装	出土位置	備考
5372	支脚	16.7	11.2	8.7	1850	砂岩	床付着、焼熟灰		室内	

第636号住居跡 (第89回)

位置 調査区東部のF11h9区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第65号井戸、第1744号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.1m、短軸3.8mの方形で、主軸方向はN-11°-Eである。壁高は28~38cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、撥溝が全周している。

竈 北壁中央部に付設されているが、第65号井戸に掘り込まれているため壁外への掘り込みは不明である。天井部は残存しておらず、袖部はロームと粘土で構築されている。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられており、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・炭化粒子少量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土ブロック微量
- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、硝り炭
- 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック少量、硝性・硝り炭
- 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量

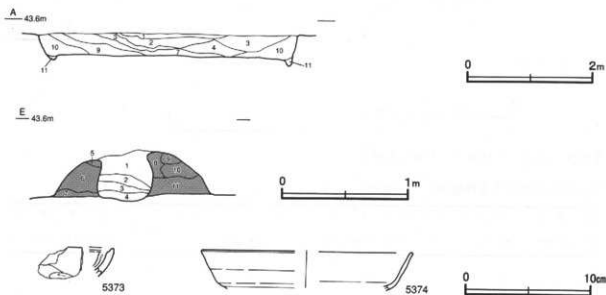
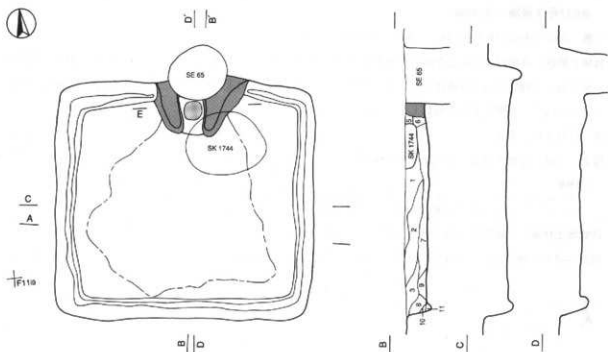
覆土 11層に分層される。ブロック状に堆積し、人為増積と考えられる。

土層解説

- 暗褐色 ロームブロック少量
- 黒褐色 ロームブロック多量
- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック少量
- 暗褐色 ロームブロック多量
- 暗褐色 ローム粒子少量
- 暗褐色 焼土ブロック・炭化材・粘土ブロック少量
- 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量
- 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 黒褐色 ロームブロック少量
- 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片160点(坏54、碗1、高坏1、壺164)、須恵器片11点(坏6、高台付坏2、長頸瓶1、壺2)、弥生土器片1点が出土している。覆土土層から中層にかけて広範囲に出土しているが、ほとんどが細片で図示できる遺物は少なかった。

所見 内面に黒色処理が施された土師器が見られず、須恵器の食膳具が少ないことから、時期は8世紀前後と考えられる。



第89図 第636号住居跡・出土遺物実測図

第636号住居跡出土遺物観察表 (第89図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5373	土師器	坏	-	(2.2)	-	長石	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面放射状ヘラミガキ	覆土中	10%
5374	須恵器	高台付杯	[16.6]	(3.0)	-	長石、黒色粒子	灰黄	普通	ロクロナデ	覆土中	15%

第637号住居跡（第90図）

位置 調査区東部のF12d1区に位置し、平坦部に立地している。

規模と形状 遺構のほとんどが調査区域外にあり、南西コーナー部と考えられる部分のみ検出された。現状で長軸2.4m、短軸0.9mのみ確認でき、形状は方形もしくは長方形と考えられる。主軸方向は不明である。壁高は16～20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

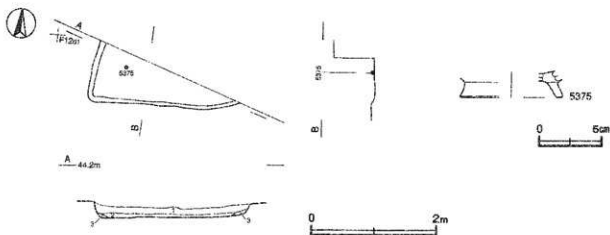
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・硬土ブロック・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点（碗2、壺1）が床面から出土している。

所見 調査区域が狭小で全容をつかむことができなかった。時期は、出土土器から10世紀以降と考えられる。



第90図 第637号住居跡・出土遺物実測図

第637号住居跡出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5375	土師器	碗	-	(2.1)	[8.0]	石灰全量混	黒	普通	底部側面へつ切り接合台付	南西部床面	10%

第642号住居跡（第91図）

位置 調査区東部のF11e0区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第619号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁は四方とも掘り込まれており、壁高は不明である。

床 第619号住居に削平されており、不明である。

ピット 2か所。P1は深さ22cmで南壁際中央にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。P2は深さ43cmで、柱穴の可能性が考えられる。

P1土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

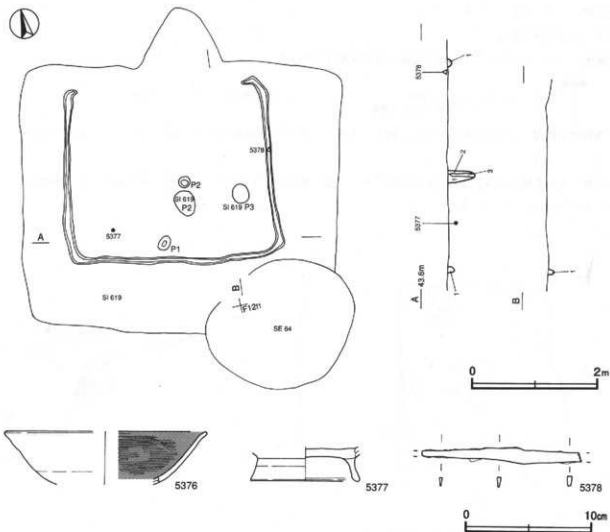
覆土 第619号住居に削平されており、覆土はほとんどなく、壁溝の覆土のみ確認できた。堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極微量

遺物出土状況 土師器片68点(坏26, 碗4, 鉢1, 甕37), 須恵器片4点(坏1, 高盤1, 甕2), 鉄製品1点(刀子カ)が出土している。覆土が薄かったため、明確に本跡に伴う遺物は東側の壁溝中から出土した刀子カのみであり、他は第619号住居の遺物である可能性がある。

所見 第619号住居に上面を削平されており、遺存状態が悪い。本跡を建て替えて第619号住居を構築した可能性も考えられたが、当遺跡の類例を見ると旧住居を削平せずに壁を拡張し、新住居の床面を旧住居の床面上に新たに構築しているものが多く、本跡の場合はそれらとは違うため、建て替えとは判断しなかった。出土土器は9世紀後葉から10世紀前葉に比定されるものであるが、本跡に伴う遺物ではなく、第619号住居のものである可能性があるため、住居の形態と主軸方向から、時期は8世紀以降、9世紀後葉以前としておく。



第91図 第642号住居跡・出土遺物実測図

第642号住居跡出土遺物観察表 (第91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5376	土師器	坏	[15.8]	(4.2)	-	石英, 長石	褐	普通	ロクロナア	覆土中	25%
5377	土師器	碗	-	(2.7)	8.3	長石, 金雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 内面一定方向ヘラミオキ	南西部床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5378	刀子	(12.7)	1.3	0.3	(13.5)	鉄	先端部・基部を欠く	東側壁溝中	PL48

第644号住居跡 (第92図)

位置 調査区南部のK12c2区に位置し, 平坦部に立地している。

重複関係 第1804・1806・1825・1827・1828・1830・1859・1860号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.6m, 短軸2.5mの方形で, 主軸方向はN-33°-Eである。壁高は5cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

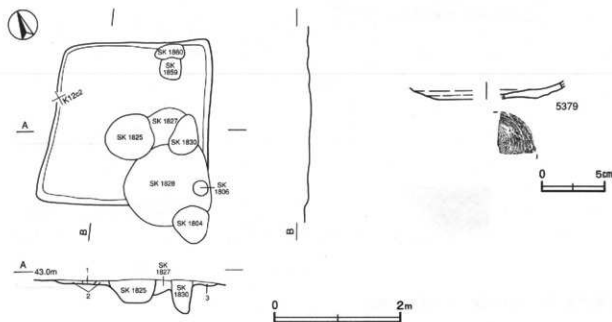
覆土 3層に分層されるが, 覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
 3 極暗褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片40点(坏9, 碗1, 小皿4, 甕26), 須恵器片2点(蓋1, 甕1), 縄文土器片1点が出土している。

所見 他の遺構に掘り込まれている部分が多く, 竈も検出できなかった。時期は主軸方向と出土土器から, 10世紀後半以降と考えられる。



第92図 第644号住居跡・出土遺物実測図

第644号住居跡出土遺物観察表 (第92図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5379	土師器	小皿	-	(1.3)	[8.0]	灰石・赤粘子	橙	普通	底部斜縁半切り	覆土中	10%

第646号住居跡 (第93・94図)

位置 調査区南部のK12a3区に位置し、平坦部に立地している。

重複関係 第1848・1849号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺構のほとんどが調査区域外にあり、南東部と考えられる部分のみ検出された。現状で長軸2.3m、短軸1.2mのみ確認でき、形状は方形もしくは長方形と考えられる。主軸方向は不明である。壁高は9cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 はほぼ平坦である。

覆土 2層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

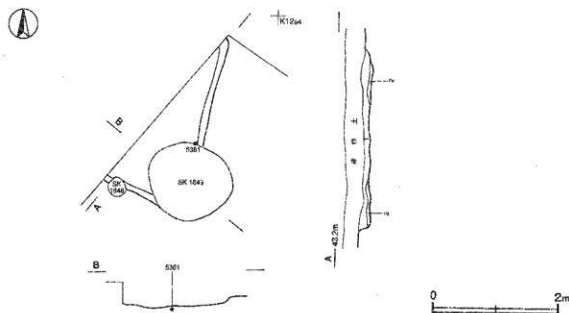
土層解説

1 灰 質 色 ローム粒下・炭化粒子散見

2 褐 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点(坏9, 甕8), 須恵器片4点(甕)が出土している。

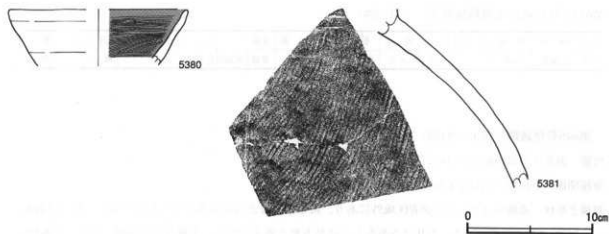
所見 調査区域が狭小で、他の遺構に掘り込まれている部分も多く、全容をつかむことができなかった。時期は、出土土器から10世紀前半と考えられる。



第93図 第646号住居跡実測図

第646号住居跡出土遺物観察表 (第94図)

番号	種別	器種	口徑	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5380	土師器	坏	[14.4]	(4.5)	-	石灰質土層等	に近い茶	普通	外縁クロコナテ	覆土中	10%
5381	須恵器	甕	-	(14.4)	-	小礫・長心・黒色粘子	褐灰	普通	外面叩き	南東部床面	5%



第94図 第646号住居跡出土遺物実測図

第647号住居跡（第95図）

位置 調査区中央部のE 8 e 5 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第40号溝、第1876号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北側が攪乱されており、南北長は5.3mのみ確認された。東西長は東側が傾斜により立ち上がり確認できず、ピットからの推定で6.5mと判断した。主軸方向は $N-0^\circ$ である。壁高は62cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 緩やかに東へ傾斜している。鹿沼層を床面とし、中央部から西壁際にかけて踏み固められている。壁溝が西壁際と南壁際の一部で確認された。

ピット 4か所。主柱穴はP1～P3が相当し、深さはP1が73cm、P2が60cm、P3が40cmである。P4は深さ20cmで、南壁際中央に位置し、出入口施設に伴うものと考えられる。

覆土 9層に分層される。西側の斜面上部から流れ込んだ様相を示し、自然堆積と考えられる。

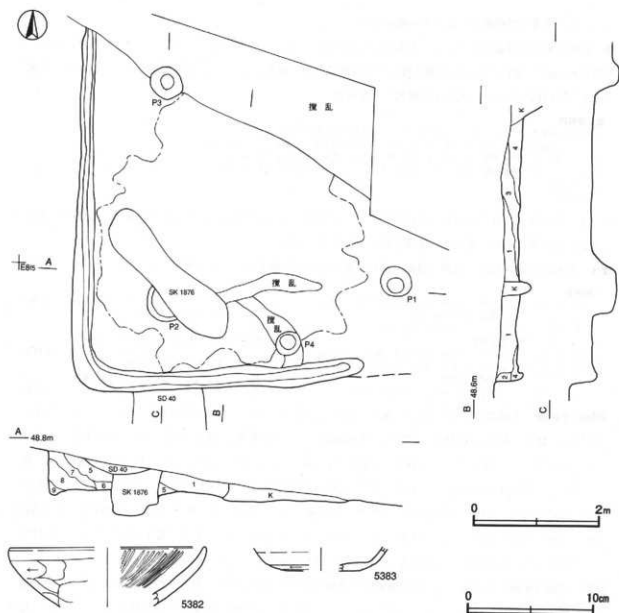
土層解説

1	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量、粘性弱、締り非常に弱	5	黒褐色	鹿沼バミス少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱
2	暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量、粘性・締り弱	6	黒褐色	鹿沼バミス少量、ロームブロック微量
3	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼バミス微量、粘性弱	7	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼バミス少量、焼土粒子微量、粘性弱
4	黒褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量、粘性弱	8	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量、粘性弱
			9	暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量

遺物出土状況 土師器片148点（坏51，碗2，甕95），須恵器片14点（坏8，瓶2，甕4），土師質土器片1点（内耳鍋），陶器片1点（常滑甕），弥生土器片2点，土製品13点（埴），石器1点（磨石）が出土している。

多くが細片で破断面も摩滅しており、流れ込みと考えられる。

所見 攪乱されている部分や調査区域外の部分が多く、遺物も時期を特定できるものは少なかったが、須恵器が少なく、内面に放射状のヘラミガキが施された土師器坏が出土していることなどから、時期は8世紀前葉と考えられる。



第95図 第647号住居跡・出土遺物実測図

第647号住居跡出土遺物観察表 (第95図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5382	土師器	坏	[15.6]	(4.7)	-	石英、黒雲母、赤色靨子	赤	普通	口縁部外面横ナデ、内面放射状ヘラミガキ	覆土中	10%
5383	須恵器	坏	-	(1.8)	[6.4]	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%

第648号住居跡 (第96~100図)

位置 調査区中央部のE 8 g 5 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第650号住居、第40号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.0m、短軸4.85mの方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は66~88cmで、各壁ともほぼ直立し、壁上部が崩落して外傾している。

床 緩やかに東へ傾斜している。鹿沼層を床面とし、中央部から東壁際にかけて、P5の東側が踏み固めら

れている。壁溝が西壁際の一部にのみ確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。火床部から煙道部にかけての中央が攪乱されており、遺存状態は悪い。竈部幅は120cmで、地山のロームを掘り残した上に砂質粘土で構築している。天井部は残存していない。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は焼熟し赤変質化している。

覆土層解説

- | | |
|----------|--|
| 1 にぶい赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘性非常に弱、締り弱 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中層、ロームブロック・炭化物微量、粘性非常に弱、締り弱 |
| 3 灰褐色 | 砂粒多量、ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性非常に弱 |
| 4 黄褐色 | 砂粒中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量、粘性非常に弱、締り強 |
| 5 ローム層 | |
| 6 黒褐色 | |

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し、深さは44～75cmである。P5は深さ20cmで、南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

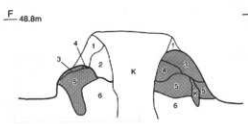
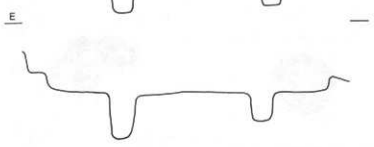
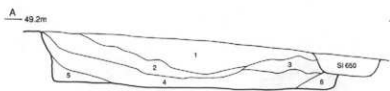
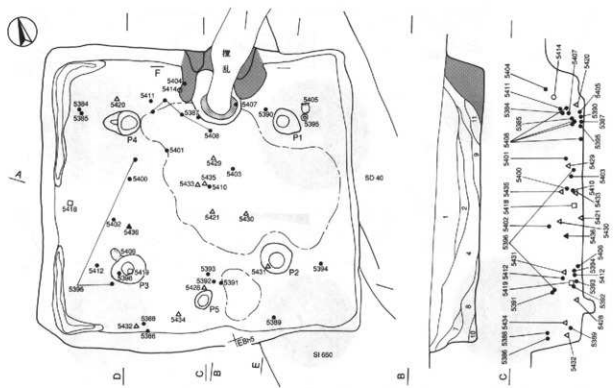
覆土 11層に分層される。西側の斜面上部から流れ込んだ様相を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

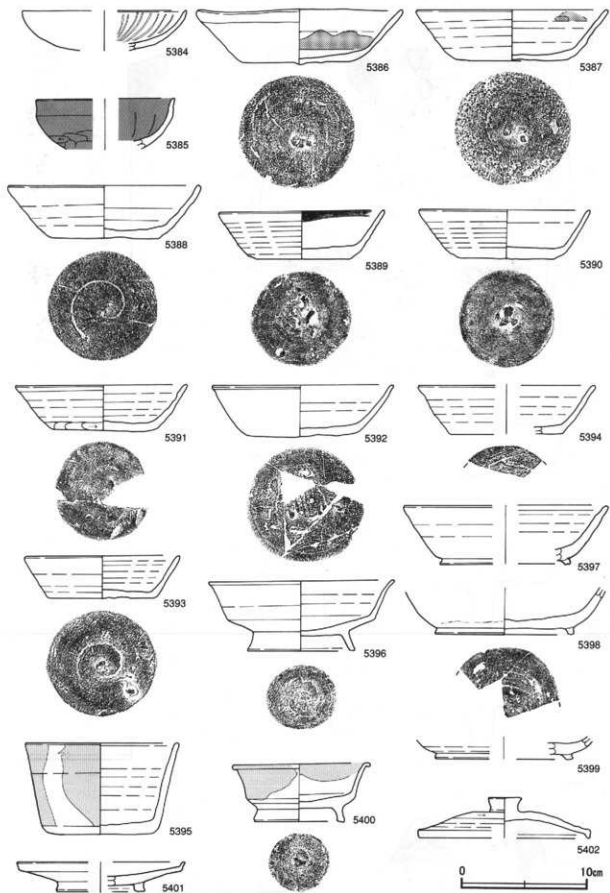
- | | | | |
|-------|--|--------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中層、焼土粒子・炭化粒子・炭屑
パミス微量、粘性・締り弱 | 6 暗褐色 | ロームブロック・炭屑パミス少量、炭化粒子微量、
粘性弱 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中層、焼土粒子・炭屑パミス少量、
炭化粒子微量 | 7 灰褐色 | ローム粒子・炭屑パミス少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中層、炭化粒子・炭屑パミス微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量、炭屑パミス微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック多量、炭屑パミス中量、焼土粒子
少量、炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・
炭屑パミス少量、粘性弱 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量、炭屑パミス少量、締り強 | 10 暗褐色 | ローム粒子・炭屑パミス微量、粘性強 |
| | | 11 灰褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片123点（坏62、碗12、高坏11、甕37、瓶1）、須恵器片147点（坏55、コップ形1、高台付坏11、盤2、蓋20、長頸瓶3、甕55）、灰釉陶器片1点（長頸瓶）、縄土器片5点、弥生土器片1点、瓦1点（甕斗瓦か）、土製品3点（支脚1、紡錘車1、羽口1）、石器・石製品3点（砥石1、紡錘車2）、鉄製品2点（釘）、鉄滓14点が出土している。覆土上層から床面にかけて散在しており、床面から出土したものは5387・5395・5405・5410・5418である。5395と5405は隣り合って出土した。覆土下層出土の遺物は5385・5389・5390・5392～5394・5403・5406・5408・5412・5419～5421・5428・5433である。覆土上層から中層にかけて出土した遺物の多くは5400のように斜位で、斜面部上層から流れ込んだような状態で出土した。

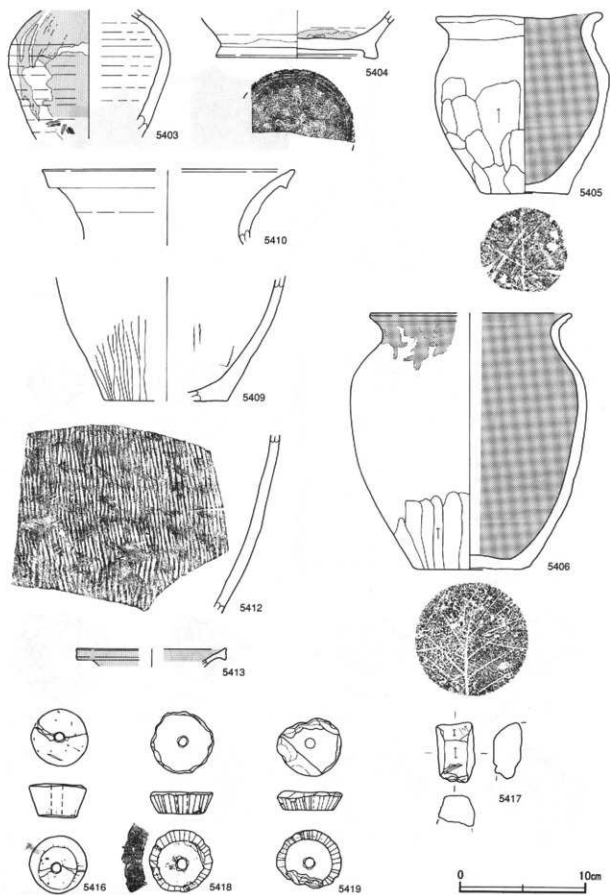
所見 遺物は床面上から出土した住居築絶時に遺棄されたと考えられる一群と、覆土下層から出土した一群、覆土上層から中層にかけて出土した一群に分けられるが、前二者の間にそれぞれの時期差はみられない。堆積状況は自然堆積と考えられ、斜面部に位置しているため埋没は早かったものと推測される。特に覆土第3層以下は西壁や南壁の上部が崩落しながら埋没した様相を示しており、住居築絶後、比較的早い段階で埋没したものと考えられる。床面上や覆土下層から出土した遺物中には漆を貯蔵した小形甕、漆を精製する際に使用したと考えられる須恵器坏、雨量計と推測されるコップ形土器、紡錘車、風石など手工業に関わる遺物が多く見られるが、遺構には工場的様相は見られない。このことから本跡の居住者を手工業に関わる職人、あるいは物品を管理する有力者層と推測することができる。また、覆土中からは多くの鉄滓が出土しており、中には700gを超える大形のものも見られる。これらの多くは覆土上層から中層にかけて散在しているため、遺構に伴うものではなく埋没中のくばりに廃棄されたものであろう。本跡の西側斜面上などに鍛冶関連施設が存在が推測される。時期は食膳具が須恵器を主体としていること、須恵器坏の形態などから、8世紀後半と考えられる。



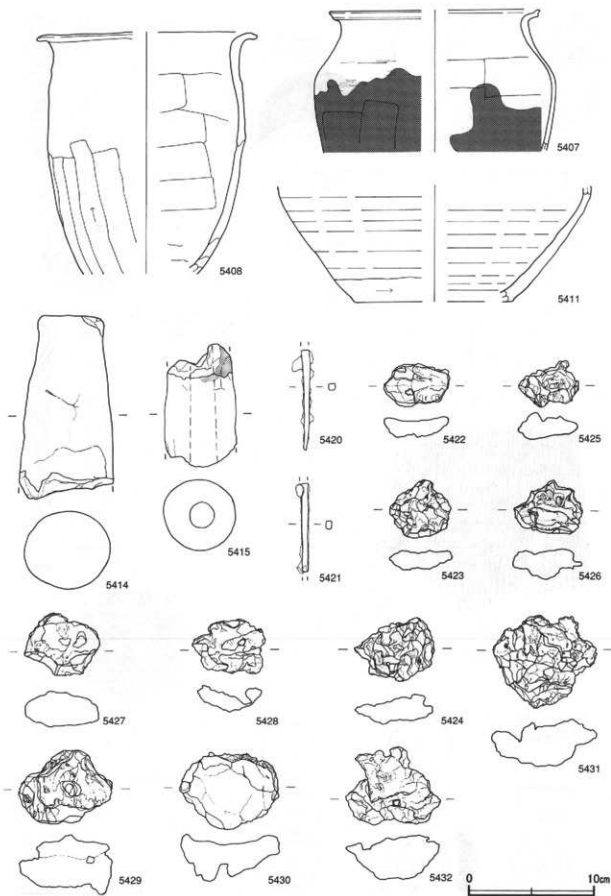
第96图 第648号住居跡实测图



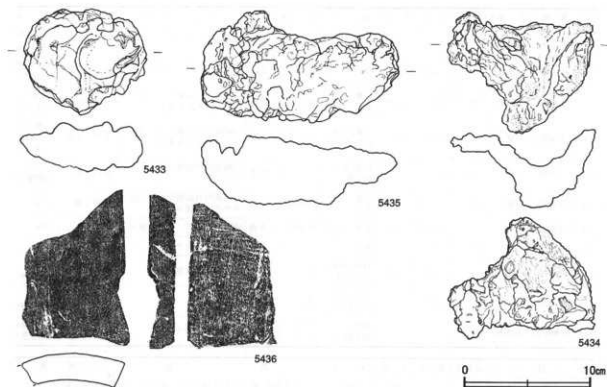
第97图 第648号住居跡出土遺物実測図(1)



第98图 第648号住居跡出土遺物実測図(2)



第99图 第648号住居跡出土遺物実測图(3)



第100図 第648号住居跡出土遺物実測図(4)

第648号住居跡出土遺物観察表 (第97~100図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5384	土師器	坏	[13.0]	(3.2)	-	長石	明赤褐	普通	外面ヘラ削り後ナデ, 内面ナデ	北西部中層	20%
5385	土師器	坏	[11.0]	(4.0)	-	赤色穀子	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	北西部下層	20%
5386	須恵器	坏	16.2	4.3	9.0	小礫, 長石	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際中層	100%, 内面縦溝・ 漆付着, PL36
5387	須恵器	坏	15.1	4.1	9.0	小礫, 石英, 長石	浅黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	竈前床面	100%, 内外面漆 塗着付着, PL36
5388	須恵器	坏	15.1	4.3	8.6	小礫, 石英, 長石	浅黄	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	南壁際中層	100%, PL37
5389	須恵器	坏	13.0	3.9	7.4	小礫, 石英, 長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り	南壁際下層	100%, 口縁部 漆付着, PL37
5390	須恵器	坏	13.4	4.0	7.8	長石, 石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り	北東部下層	90%, PL37
5391	須恵器	坏	13.5	3.8	7.5	小礫, 石英, 赤子	灰	普通	底部回転ヘラ切り後不定方向ヘラ削り	南部中層	70%, PL37
5392	須恵器	坏	14.3	4.2	8.6	小礫, 石英, 長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り	南部下層	85%, 口縁部ヘラ削り 跡付着, PL37-G
5393	須恵器	坏	12.4	3.4	8.6	小礫, 石英, 長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り	南部下層	100%, PL37
5394	須恵器	坏	[13.9]	4.0	[9.0]	石英, 長石, 黒色穀子	灰	普通	底部ヘラ削り	南東部下層	15%
5395	須恵器	コップ形	11.9	7.3	8.2	小礫, 長石, 白色針状炭化物	灰	普通	内外面口クロナデ	北東部床面	85%, 口縁部ヘラ削り 跡付着, 口縁部 黒色穀子付着, PL37-G
5396	須恵器	高台付坏	14.7	5.6	8.4	石英, 長石, 白色針状炭化物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付 け	南西部・中 央部中層	85%, PL37
5397	須恵器	高台付坏	[16.2]	4.7	[10.2]	石英, 長石, 黒子	灰黄	普通	高台貼り付け	覆土上中	20%
5398	須恵器	高台付坏	-	(3.7)	[11.0]	石英, 長石, 黒子	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付 け	南西部中層	30%
5399	須恵器	高台付坏	-	(1.8)	[11.0]	石英, 長石, 黒子	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付 け	覆土上中	5%, 内面面取 れ
5400	須恵器	高台付坏	10.2	4.6	7.0	長石	暗青灰	良好	底部回転ヘラ切り後高台貼り 付け	中央部中層	95%, 内外面 自然釉, PL37
5401	須恵器	盤	[13.2]	2.4	[6.8]	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付 け	中央部中層	20%
5402	須恵器	蓋	[13.5]	3.2	-	小礫, 長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	西部上層	35%

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色	陶	底成	手法の特徴	出土位置	備考
5403	須恵器	長頸瓶	-	(10.2)	-	長石、黒色砂子	灰白	普通	内外面口口ロナテ		中央部下層	25%、外面自然釉、PL28
5404	須恵器	長頸瓶	-	(3.8)	(12.6)	長石	灰	良好	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け		甕左袖上層	10%、底部内外面自然釉
5405	土師器	小形壺	13.0	14.5	7.0	小礫、石英、長石	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ヘラナテ、底部木炭痕		北東部床面	5%、黒色、片蓋遺存、PL37
5406	土師器	壺	(15.9)	20.6	9.2	小礫、石英、長石、白雲母	にぶ黄褐色	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ヘラナテ、底部木炭痕		南西部下層	30%、黒色、片蓋・内面自然釉、5%、黒色、片蓋遺存、PL39
5407	土師器	壺	(24.6)	(17.0)	-	石英、長石、金雲母	にぶ赤褐色	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ヘラナテ		甕下層	20%、外面厚肉着
5408	土師器	壺	(26.1)	(29.0)	-	小礫、石英、長石	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナテ、内面ヘラナテ、輪痕みあり		甕下層	40%
5409	土師器	壺	-	(10.0)	9.8	石英、長石	明赤褐色	普通	内面ヘラナテ、底部木炭痕		甕土中	15%
5410	須恵器	壺	(20.0)	(8.0)	-	長石	灰	普通	内外面口口ロナテ		中央部床面	5%
5411	須恵器	壺	-	(13.9)	(16.8)	石英、長石、黒色砂子	灰	普通	底部下層ヘラ削り		北西部中層	5%、内面自然釉
5412	須恵器	壺	-	(14.3)	-	石英、長石、黒色砂子	黄灰	普通	外面叩き		南西部下層	5%、外面自然釉
5413	灰輪陶器	長頸瓶	(11.8)	(1.5)	-	磁石、黒色砂子	灰白、灰オリーブ	良好	内外面口口ロナテ		甕土中	5%、黒色、片蓋遺存、14号形式

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5414	支脚	(14.8)	(7.5)	(5.2)	(707)	粘土	ナテ、被熱痕、胎土に石英・長石・黒・金雲母含む	甕左袖上層	

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5415	甕口	(9.8)	(5.8)	(3.2)	(242)	粘土	ナテ、被熱痕、胎土に石英・長石・黒・金雲母含む	甕土中	

番号	器種	最大径	孔径	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5416	紡錘車	4.6	0.9	2.6	30.8	粘土	ナテ、胎土に長石含む	甕土中	PL44
5418	紡錘車	3.0	0.9	1.7	51.3	滑石	全面磨光、側面放射状の調整・筋溝「長上」	西壁部床面	PL43-46
5419	紡錘車	(5.1)	0.8	1.5	(10.1)	滑石	全面研磨、側面放射状の調整	南西部下層	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5417	磁石	(4.8)	(3.2)	(2.5)	(39.9)	酸性凝灰岩	両面2面	甕土中	
5420	釘	(8.1)	(0.7)	0.5	(8.35)	鉄	基部全欠く	北西部下層	
5421	釘	(7.2)	(0.5)	0.6	(7.95)	鉄	基部・先端部を欠く	中央部下層	
5436	黄牛丸	(12.3)	(8.2)	2.1	(268.0)	粘土	凸面削り、凹面布目痕	甕土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5422	鉄滓	3.4	5.2	1.6	27.2	表面茶褐色、地黒褐色		甕土中	
5423	鉄滓	4.9	4.6	1.6	44.7	表面茶褐色、地黒褐色		甕土中	
5424	鉄滓	5.0	6.2	2.3	60.0	表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		甕土中	
5425	鉄滓	3.7	4.8	2.2	37.0	表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		甕土中	
5426	鉄滓	4.4	5.5	2.5	63.8	表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		甕土中	
5427	鉄滓	5.1	5.0	3.0	75.4	表面茶褐色、地黒褐色		甕土中	
5428	鉄滓	4.3	3.8	1.9	56.9	表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		甕土中	
5429	鉄滓	6.9	7.5	4.8	215	表面茶褐色、地黒褐色、上下に2割重着		中央部中層	
5430	碗状滓	7.8	6.1	3.8	157.6	表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		中央部中層	
5431	碗状滓	7.3	8.3	3.9	222	青緑、表面茶褐色、地黒褐色		南東部中層	
5432	碗状滓	6.3	7.5	3.6	158.3	表面茶褐色、地黒褐色、伊壁重着		南壁部中層	
5433	碗状滓	8.4	10.0	4.0	358	表面茶褐色、地黒褐色		中央部下層	
5434	碗状滓	9.7	11.7	6.2	419	青緑、表面茶褐色、地黒褐色、一部青灰色		南部中層	
5435	碗状滓	8.8	15.7	5.4	764	青緑、表面茶褐色、地黒褐色		中央部中層	

第649号住居跡 (第101・102図)

位置 調査区中央部のF 8 a 3 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第653号住居跡を掘り込んでいる。

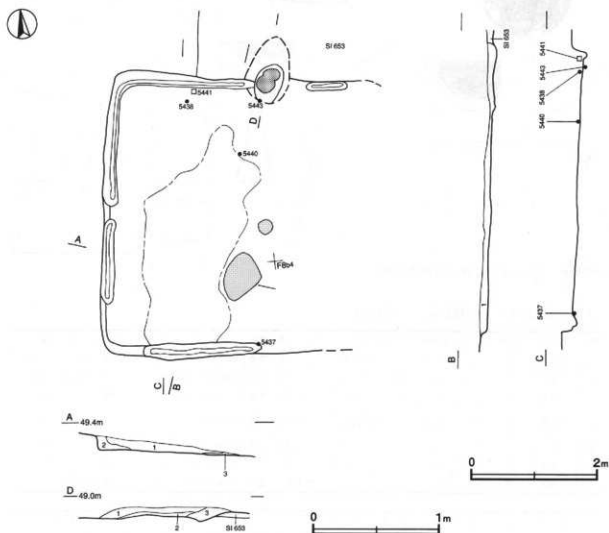
規模と形状 南北長は4.6mで、東西長は東側が傾斜により立ち上がりが確認できず、3.8mのみ確認された。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は16cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部から南壁際にかけて踏み固められている。壁溝が北・西・南壁際の一部で確認された。

竈 北壁に付設されているが覆土が薄く、遺存状態が悪い。焚口部から煙道部までは110cmで、壁外へ70cmほど掘り込んでいる。袖部・天井部は残存しておらず、火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 3 に近い赤褐色 焼土ブロック・ロームブロック微量



第101図 第649号住居跡実測図

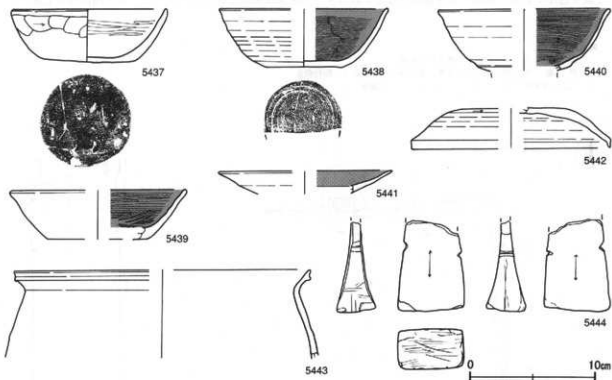
覆土 3層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。中央部から南部にかけて焼土が散在している。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子散在
- 2 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック散在、粘り弱
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、粘性弱、粘り非常に弱

遺物出土状況 土師器片78点(坏24, 碗2, 高台付皿1, 蓋1, 甕50), 須恵器片5点(坏4, 高台付坏1), 石器1点(砥石)が出土している。5437・5438・5440・5443・5444が床面から出土している。須恵器はすべて細片で破断面が摩滅しており、流れ込みと考えられる。

所見 傾斜地にあり覆土が薄く、特に東側は遺存状態が悪かった。時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第102図 第649号住居跡出土遺物実測図

第649号住居跡出土遺物観察表 (第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5437	土師器	坏	12.3	4.3	7.4	石英、長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内面側ナデ、底面外周不整形方向へウケリ	南部床面	75%, PL38
5438	土師器	坏	[13.2]	4.6	6.1	石英、長石、金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	北西部床面	45%
5439	土師器	坏	[13.8]	3.9	[8.0]	石英、長石、粘り	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%
5440	土師器	碗	[13.6]	(4.9)	-	長石、金雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	高台貼り付け	中央部床面	30%
5441	土師器	高台付皿	[13.6]	(1.8)	-	長石、金雲母	にぶい黄褐	普通	高台貼り付け	覆土中	20%
5442	土師器	蓋	[15.8]	(3.2)	-	石英、長石、粘り	にぶい橙	普通	天井部回転ヘラ側り	覆土中	20%
5443	土師器	甕	[23.5]	(7.2)	-	石英、長石、金雲母	明赤褐	普通	口縁部内外面側ナデ、内面ヘラナデ	竈前床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5444	砥石	(7.3)	5.4	3.2	(123.9)	酸性凝灰岩	砥面2面、溝状の擦痕多数、側面に三角形の切れ込み	北西部床面	PL46

第650号住居跡 (第103・104図)

位置 調査区中央部のE8h5区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第648号住居跡を掘り込み、第40号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.9m、短軸2.1mの長方形で、主軸方向はN-91°-Eである。壁高は25~32cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部が踏み固められている。第648号住居跡を掘り込んでいる部分には一部貼床が見られる。

竈 東壁の南端に付設されている。遺存状態が悪く、火床面のみ確認された。

竈土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量、粘性強、締り弱
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、締り弱
- 3 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量、砂粒微量、粘性・締り弱

ピット P1は深さ50cmで北西部に位置しているが、性格は不明である。

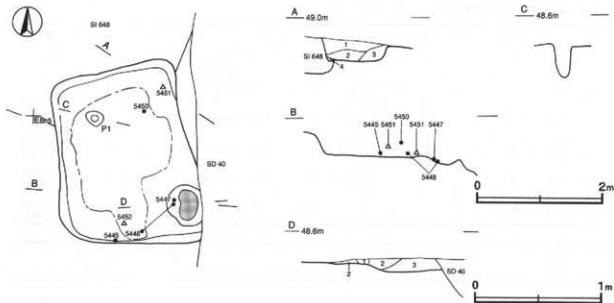
覆土 4層に分層される。ブロック状に堆積し、人為堆積と考えられる。第4層は貼床である。

土層解説

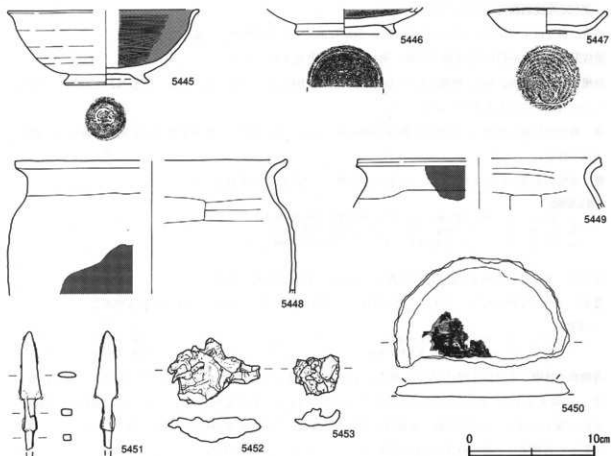
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、締り弱
- 4 褐色 ロームブロック多量、締り強

遺物出土状況 土師器片92点(坏19, 碗7, 小皿1, 甕65), 須恵器片11点(坏1, 高台付坏1, 蓋1, 瓶1, 甕7), 鉄製品1点(鎌), 鉄滓2点が出土している。5447・5449は竈内から出土し、5448は竈内出土の破片と竈前の覆土下層から出土した破片が接合したものである。5450は北部の覆土中層から出土しているが、遺構の時期から判断すると第648号住居跡の遺物が流れ込んだものと考えられる。

所見 南東部に竈を持つ小規模住居のうちの一つである。時期は、出土土器から11世紀前半と考えられる。



第103図 第650号住居跡実測図



第104図 第650号住居跡出土遺物実測図

第650号住居跡出土遺物観察表 (第104図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
5445	土師器	碗	[15.0]	5.9	6.0	石英、長石、金雲母、赤色粒子	にぶい黄緑	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	南壁階下層	40%
5446	土師器	碗	-	(2.1)	[8.1]	石英、長石、赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	20%
5447	土師器	小皿	9.5	1.7	6.4	長石、金雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	室内	80%、内面器面荒れ、PL38
5448	土師器	甕	[21.5]	(10.7)	-	石英、長石、金雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	室内・竈前下層	20%、外面煤付着、焼熟痕
5449	土師器	甕	[19.2]	(4.1)	-	石英、長石、金雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ナデ	室内	5%、外面煤付着、焼熟痕
5450	須恵器	甕	-	(1.4)	[14.0]	長石	灰褐	普通	底部外面ナデ	北部中層	35%、内面磁器墨付着後転用

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5451	鏃	(9.5)	1.8	0.5	(22.7)	鉄	基部基部を欠く。主頭、台形開	北東部下層	PL48

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5452	鉄滓	7.3	5.2	2.1	58.5	着緑、表面茶褐色、地黒褐色	南部中層	
5453	鉄滓	3.6	3.3	1.5	10.8	表面茶褐色、地黒褐色	覆土中	

第651号住居跡（第105・106図）

位置 調査区中央部のE 8 h 4 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第652号住居跡を掘り込み、第42号ピット群のP3に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸2.7mの長方形で、主軸方向はN-90°-Eである。壁高は12~25cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、椽際を除き踏み固められている。

竈 東壁のやや南寄りに付設されている。遺存状態が悪く、火床面のみ確認された。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 3 赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量、締り弱

ピット P1は深さ25cmで北西部に位置しているが、性格は不明である。

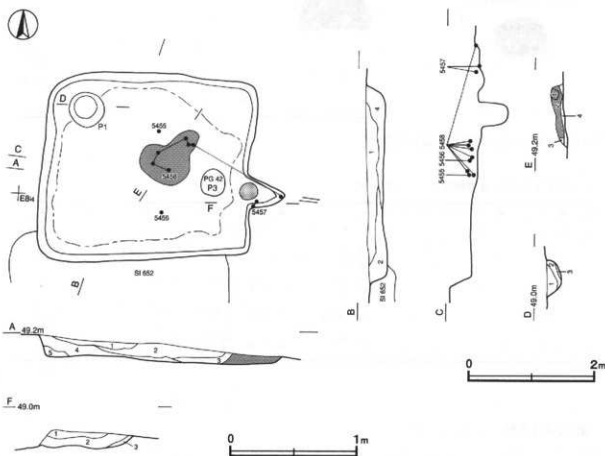
P1土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量、締り弱
- 2 暗褐色 ローム粒子・重質バミス微量、締り弱
- 3 褐色 重質バミス少量、締り弱

覆土 5層に分層される。焼土を多く含み人為堆積と考えられる。また、中央部に粘土塊が見られる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物微量、粘性弱
- 3 赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量、締り弱
- 4 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 5 灰褐色 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量



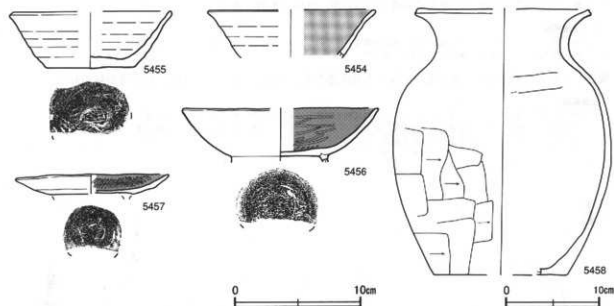
第105図 第651号住居跡実測図

粘土塊土層解説

- 1 におい黄褐色 粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子微量、粘性弱、締り強
 2 暗褐色 粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
 3 褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス微量
 4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片192点(坏29, 碗7, 皿2, 高台付皿1, 鉢4, 甕149), 須恵器片20点(坏12, 蓋2, 甕6), 縄文土器片1点が出土している。5458は竈内の覆土中から出土した破片と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 中央部に粘土塊があり、住居の廃絶時に投棄されたものか、住居の壁が倒壊したものと推測される。5454は内面に漆が付着している。須恵器坏が少量で土師器皿が見られることから、時期は9世紀後葉と考えられる。



第106図 第651号住居跡出土遺物実測図

第651号住居跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5454	須恵器	坏	[13.4]	(3.8)	—	長石	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 内面漆付着
5455	須恵器	坏	[12.6]	4.5	[7.0]	小礫, 石英, 長石, 赤色粒子	明褐色	普通	底部回転ヘラ切り	竈内, 中央部下層	20%
5456	土師器	碗	[15.4]	(4.2)	—	石英, 長石, 金雲母	におい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部下層	40%
5457	土師器	高台付皿	[12.2]	(1.5)	—	石英, 長石	におい褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	竈内	50%, PL.38
5458	土師器	甕	[20.4]	31.9	[15.4]	石英, 長石, 黒雲母	におい褐色	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	中央部下層	40%

第652号住居跡 (第107・108図)

位置 調査区中央部のE8i4区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第651号住居, 第1号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.5m, 短軸3.3mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁高は12~20cmで、各壁とも

やや外傾して立ち上がっている。

床 中央部は第1号道路に掘り込まれており不明であるが、残存している部分では緩やかに東へ傾斜し、竈前が踏み固められている。

竈 北壁中央部に付設されている。上面を第651号住居に掘り込まれており、遺存状態が悪かった。

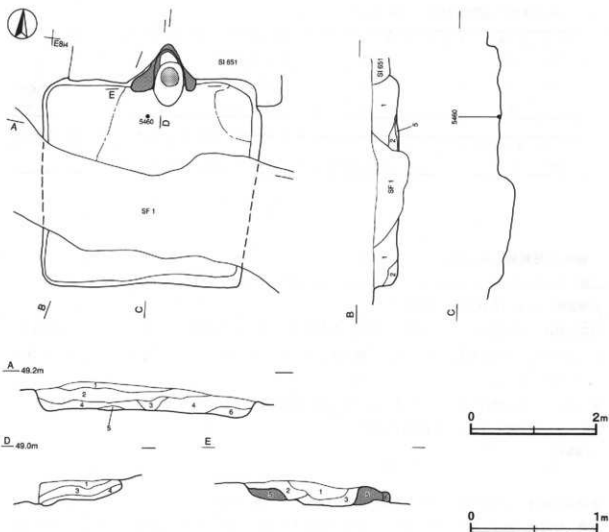
覆土層解説

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 5 灰黄褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性弱 |
| 6 褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |

覆土 6層に分層される。下層はブロック状に堆積している部分があり人為堆積と考えられ、その後、上層が自然堆積したものと考えられる。

土層解説

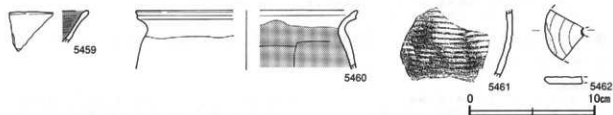
- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | 珪石パミス少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック微量、礫り弱 | 6 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |



第107図 第652号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片188点(坏19, 碗2, 甕167), 須恵器片24点(坏4, 甕19, 紡錘車転用1), 土製品1点(土人形)が出土している。多くが細片で, 図示できるものは少なかった。5459は竈内から出土し, 5460は竈前の床面から出土している。

所見 5460は内面に漆が附着している。土製品は近世のものと思われる土人形の破片で, 第1号道路跡に伴うものである可能性がある。9世紀後葉と考えられる第651号住居に掘り込まれており, 出土土器に内面に黒色処理が施された土師器坏が見られることから, 時期は9世紀中葉と考えられる。



第108図 第652号住居跡出土遺物実測図

第652号住居跡出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5459	土師器	坏	-	(2.5)	-	石英, 長石	にぶい褐	普通	ロクロナデ	竈内	10%
5460	土師器	甕	[17.6]	(4.8)	-	石英, 長石, 金雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘッナデ	竈前床面	5%, 内面漆附着
5461	須恵器	甕	-	(5.5)	-	長石, 白雲母	暗灰	普通	外面叩き	覆土中	10%, 新治産

番号	器種	最大径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5462	紡錘車	(4.1)	-	0.6	(7.45)	須恵器転用	須恵器坏底部を転用, 周縁部研磨	覆土中	

第653号住居跡 (第109図)

位置 調査区中央部のE 8 j 4区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第649号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は3.8mで, 東西長は東側が傾斜により立ち上がりが確認できず, 1.4mのみ確認された。形状は方形もしくは長方形と考えられ, 主軸方向は $N-9^{\circ}-E$ である。壁高は6cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜している。壁溝が北・西・南壁際の一部で確認された。

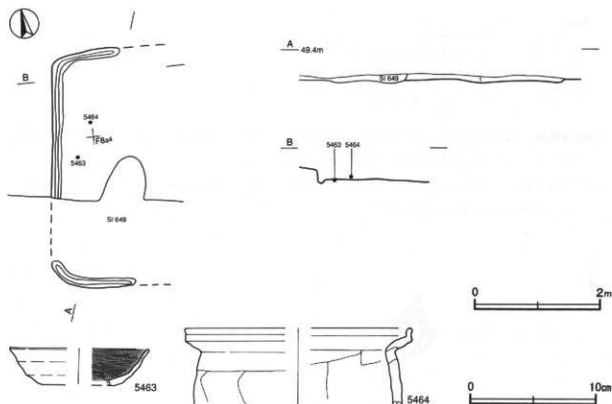
覆土 単一層で覆土は薄く, 堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片36点(坏10, 甕26), 須恵器片1点(甕)が出土している。

所見 傾斜地にあり, 覆土が薄く西側の一部分のみ確認できた。10世紀前葉と考えられる第649号住居に掘り込まれており, 内面に黒色処理が施された土師器坏が見られることから, 時期は9世紀後葉と考えられる。



第109図 第653号住居跡・出土遺物実測図

第653号住居跡出土遺物観察表 (第109図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5463	土師器	環	[11.0]	2.9	[5.8]	石瓦灰石金雲母	明赤褐	普通	外面ロクロナデ	西部床面	30%
5464	土師器	甕	[18.0]	(6.1)	—	石瓦灰石金雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	西部下層	5%, 被熱痕

第654号住居跡 (第110・111図)

位置 調査区中央部のF 8 b 5 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第40号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.7m、短軸4.3mの方形で、主軸方向はN-10°-Eである。壁高は50cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 緩やかに東へ傾斜し、壁際が中央部よりややくぼんでいる。中央部が踏み固められており、壁溝が北・西・南壁の一部で確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。木の根に攪乱されており、遺存状態が悪かった。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 灰黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

ピット P1は北西部に、P2は南西部に位置し、深さはそれぞれ20cmである。柱穴の可能性が考えられるが、東側には確認されず、現状では性格は不明である。

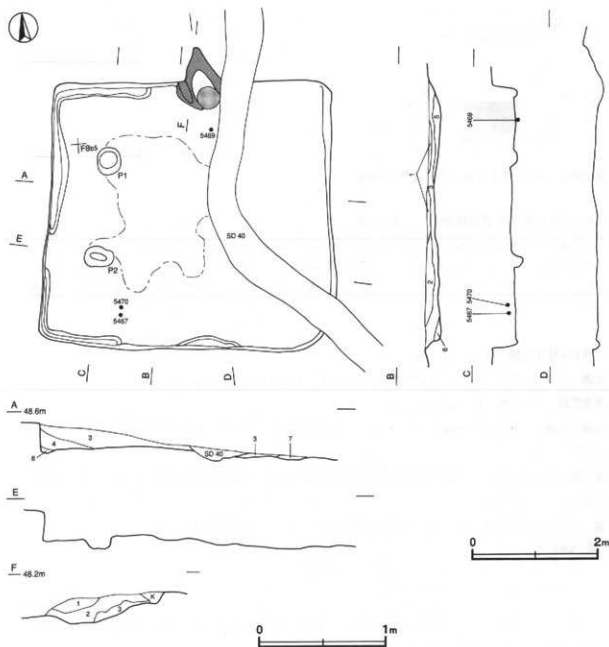
覆土 7層に分層される。西側の斜面上部から流れ込んだ様相を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

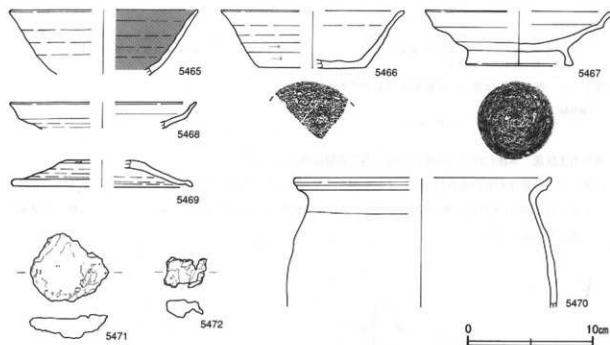
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、埴り強
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片133点(坏8, 堿125), 須恵器片35点(坏20, 高台付坏1, 盤8, 蓋3, 堿3), 鉄滓2点が出土している。多くが覆土中層から下層にかけて出土している。

所見 床面や室内から良好な遺物が出土しなかったが, 覆土中出土の土器や遺構の形状, 主軸方向などから判断すると, 時期は9世紀中葉と考えられる。



第110図 第654号住居跡実測図



第111図 第654号住居跡出土遺物実測図

第654号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	器種	器種	口径	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5465	土器	環	[14.8]	(5.3)	-	-	石灰長石	橙	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
5466	須恵器	環	[14.5]	4.6	[8.6]	-	長石	灰白	普通	底部不定方向ヘラ削り	覆土中	10%
5467	須恵器	盤	[14.8]	4.3	8.5	-	石灰長石	灰白	普通	裏面回転ヘラ削り後高台貼り付け	南西部中層	70%, PL38
5468	須恵器	盤	[14.8]	(2.1)	-	-	長石	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	5%
5469	須恵器	蓋	[14.4]	(2.1)	-	-	石灰長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	敷前下層	5%
5470	土器	甕	[20.2]	(10.3)	-	-	石英, 長石	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	南西部中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
5471	鉄滓	5.5	6.2	1.9	86.6	着磁, 表面茶褐色, 地黒褐色	覆土中	
5472	鉄滓	2.4	3.3	1.4	7.0	灰褐色	覆土中	

第655号住居跡 (第112図)

位置 調査区中央部のF 8 d 8 区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第656号住居, 第42号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南側が調査区域外に延びているため, 南北長は4.6mで, 東西長は東側が第42号溝に掘り込まれているため, 3.0mのみ確認された。形状は方形もしくは長方形と考えられ, 主軸方向はN-13°-Eである。壁高は15cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 残存している部分では緩やかに東へ傾斜し, 南西部が踏み固められている。壁溝が西壁の南端で確認された。

竈 北壁に付設されているが, 第656号住居に掘り込まれており, 遺存状態が悪かった。壁外への掘り込みは50cmである。左袖部は確認できず, 右袖部は地山のロームを一部掘り残し, 砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床面は確認できなかった。

電土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 灰黄褐色 | 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | 粘土粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 赤褐色 | 焼土ブロック多量 | | |

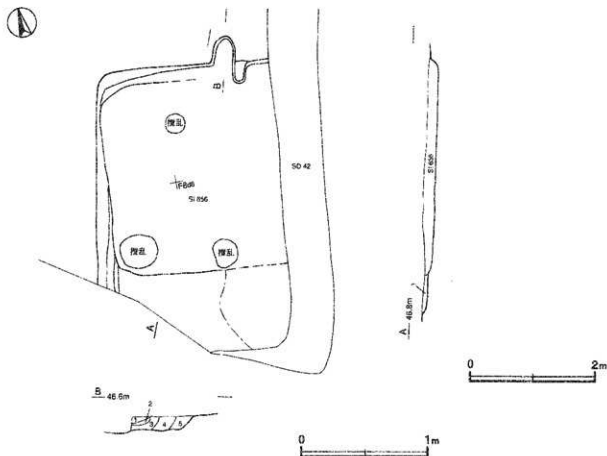
覆土 単一層で覆土は薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、細り粉

遺物出土状況 本跡に伴うと明確に判断できる遺物は出土していない。

所見 多くの部分が他の遺構に掘り込まれており、全容をつかめなかった。本跡を掘り込んでいる9世紀後半と考えられる第656号住居の覆土から、少量ながら8世紀代の土器が出土していることから、時期は8世紀代の可能性が考えられる。



第112図 第655号住居跡実測図

第656号住居跡 (第113図)

位置 調査区中央部のF8c8区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第655号住居跡を掘り込み、第42号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は3.0mで、東西長は東側が第42号溝に掘り込まれているため、2.8mのみ確認された。形状は方形もしくは長方形と考えられ、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は12~30cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部が踏み固められている。壁溝が北・西・南壁の一部で確認された。

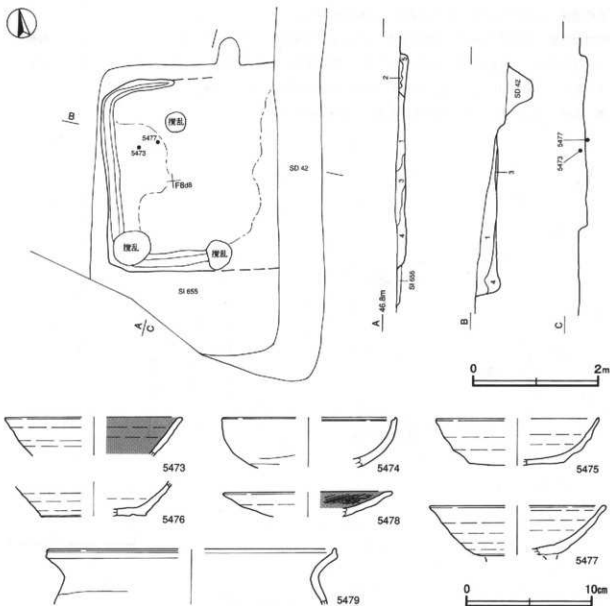
覆土 5層に分層される。西側の斜面上部から流れ込んだ様相を示し、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量、締り弱
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量、締り弱
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量、締り弱
- 5 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量、締り弱

遺物出土状況 土師器片197点(坏56, 碗16, 皿2, 甕123), 須恵器片16点(坏11, 高台付坏1, 蓋2, 甕2)が出土している。

所見 東側が第42号溝に掘り込まれており、全容は不明であるが、時期は出土土器から9世紀後葉と考えられる。また、覆土中からは5474のように8世紀代の土器片が少量出土しており、本跡が掘り込んでいる第656号住居跡の遺物である可能性がある。



第113図 第656号住居跡・出土遺物実測図

第656号住居跡出土遺物観察表 (第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5473	土師器	坏	[14.0]	(3.1)	-	石丸, 長石, 雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	西部下層	5%
5474	土師器	坏	[13.8]	(4.0)	-	長石, 赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ナデ	覆土中	5%
5475	須恵器	坏	[12.8]	3.7	[7.7]	長石, 白雲母, 赤色粒子	明黄褐	不良	底部回転ヘラ切り, 酸化炎焼成	覆土中	20%
5476	須恵器	坏	-	(2.8)	[8.2]	石丸, 長石, 雲母	黄灰	不良	底部回転ヘラ切り, 酸化炎焼成	覆土中	10%
5477	土師器	椀	[13.9]	(4.0)	-	長石, 赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後高台彫り付け	西部下層	20%
5478	土師器	皿	[13.2]	(2.0)	-	長石, 黒雲母	にぶい褐	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
5479	土師器	甕	[22.6]	(4.4)	-	石丸, 長石, 雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ	覆土中	5%

第657号住居跡 (第114・115図)

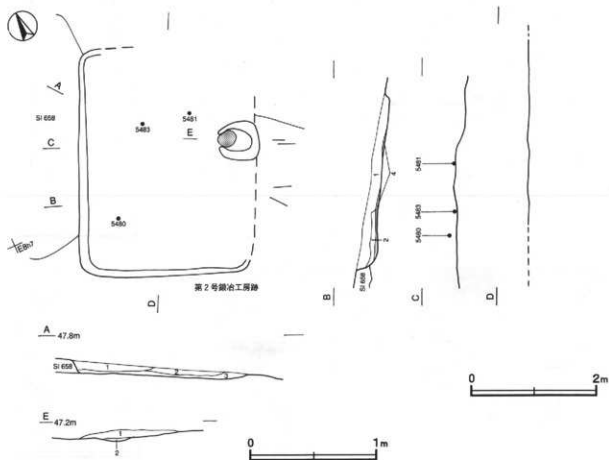
位置 調査区中央部のE 8 g7 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第658号住居跡、第2号鍛冶工房跡を掘り込んでいる。

規模と形状 斜面部にあり、北側と東側の立ち上がりを確認できなかったため、現状では長軸3.7m、短軸2.8mの長方形で、主軸方向はN-113°-Eである。壁高は10~30cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜している。部分的に貼床が見られるが、硬化面は確認されなかった。

竈 東壁に付設されている。遺存状態が悪く、火床面のみ確認された。



第114図 第657号住居跡実測図

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性弱
 2 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化粒子少量、粘性弱

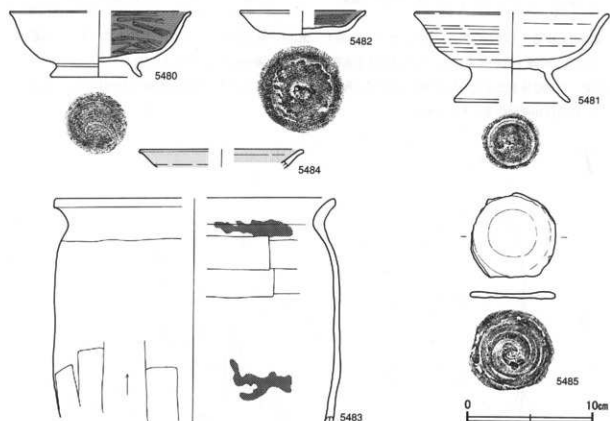
覆土 4層に分層されるが覆土は薄く、堆積状況は不明である。第4層は貼床である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
 2 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、練り強

遺物出土状況 土師器片68点(坏10, 碗8, 皿3, 甕47), 須惠器片6点(坏), 灰釉陶器片1点(皿), 土製品1点(小皿転用円盤), 鉄滓1点が出土している。須惠器片は細片で破断面が摩擦しており、流れ込みと考えられる。

所見 5482は内面に漆が薄く付着しており、漆を塗る際にパレットとして使用されたものと考えられる。時期は小皿の口径や足高台碗の出土から、10世紀後葉と考えられる。



第115図 第657号住居跡出土遺物実測図

第657号住居跡出土遺物観察表 (第115図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5480	土師器	碗	[14.2]	5.3	7.2	長石, 金雲母, 赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転軸余切り後高台貼り付け, 底部内面一定方向ヘラミガキ	南西部下層	80%, PL38
5481	土師器	碗	[15.6]	7.2	[9.2]	長石, 金雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部床面	70%, PL38
5482	土師器	小皿	[9.8]	1.9	6.4	長石, 金雲母	濁	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	覆土中	70%, 内面漆付着, PL38
5483	土師器	甕	[22.2]	(18.0)	-	石英, 長石, 金雲母	濁	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	中央部床面	50%, 内外面漆付着
5484	灰釉陶器	皿	[13.1]	(1.5)	-	緻密, 黒色粒子	灰白, 灰白	良好	ロクロナデ	覆土中	5%, 染紋産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5485	土製円盤	6.8	6.8	0.6	31.1	土層部小皿転用	回転ヘラ切り、底部を円形に打ち欠く	覆土中	PL44

第658号住居跡 (第116・117図)

位置 調査区中央部のE 8 g 7 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第2号鍛冶工房跡を掘り込み、第657号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.2m、短軸2.5mの長方形で、竈は確認されなかったが形態や遺物から東竈と推測され、主軸方向はN-85°-Eである。壁高は15~32cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部東側が踏み固められている。

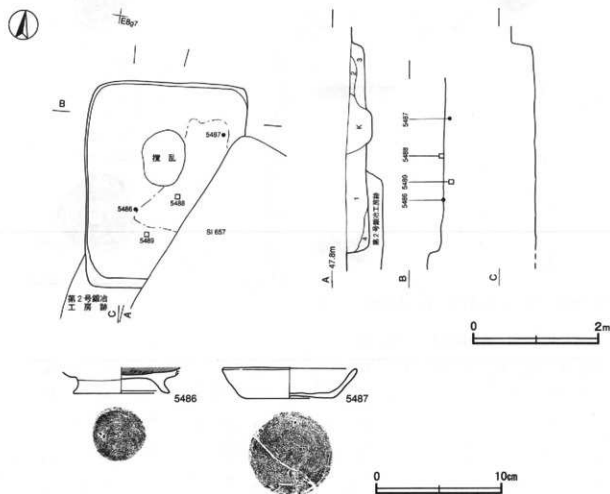
覆土 4層に分層される。層内にロームブロックを不均一に含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

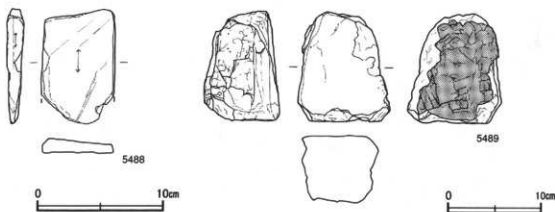
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片19点(坏6, 椀2, 小皿1, 甕10), 須恵器片1点(蓋), 弥生土器片1点, 石器1点(砥石), 焼礫1点が出土している。5487は北東部, 5489は南部の床面から出土している。

所見 10世紀後葉と考えられる第657号住居に掘り込まれていることと, 小皿の口径が10cm以上であることから, 時期は10世紀中葉と考えられる。



第116図 第658号住居跡・出土遺物実測図



第117図 第658号住居跡出土遺物実測図

第658号住居跡出土遺物観察表 (第116・117図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5486	土師器	碗	-	(2.1)	7.6	長石, 金雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後高古割り付け, 底部内面一定方向へラミゴキ	中央部下層	40%
5487	土師器	小皿	10.4	2.4	6.8	長石, 金雲母, 赤色粒子	にぶい地	普通	底部回転糸切り	北東部床面	90%, PL38

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5488	砥石	(9.2)	5.8	1.3	(82.2)	頁岩	砥面2面	中央部下層	PL46
5489	焼礫	13.1	11.0	8.2	1590	砂岩	焼熱痕, 炭化物付着	南東部床面	PL47

第661号住居跡 (第118図)

位置 調査区中央部のF8a7区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第662・663号住居跡を掘り込み, 第1902号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 遺存状態が悪く, 北と東側の壁を確認できなかった。現状では長軸2.3m, 短軸2.0mの長方形である。主軸方向も不明であるが, 南壁から判断するとN-110°-Eである。壁高は16~20cmで, 各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜している。中央部に貼床がされており, 踏み固められている。また, 南東部から少量の焼土や粘土が出土している。

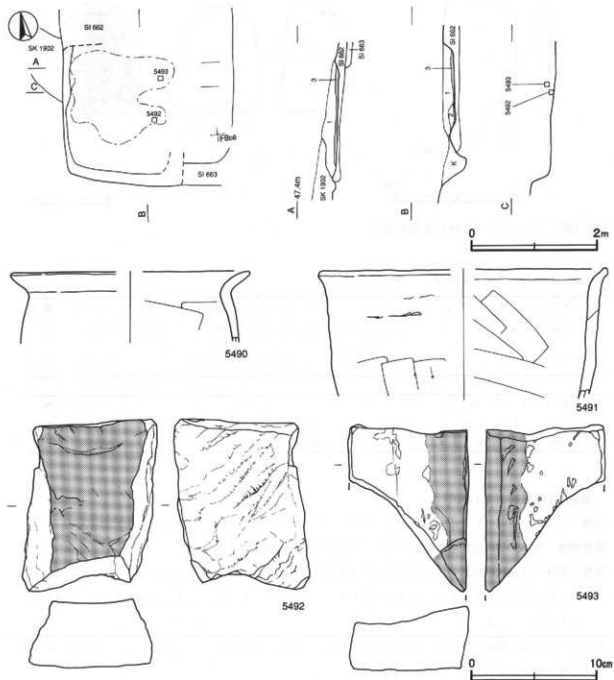
覆土 3層に分層されるが, 覆土は薄く堆積状況は不明である。第3層は貼床である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性弱
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 粘性弱, 礫り強

遺物出土状況 土師器片34点(坏8, 碗1, 甕18, 瓶7), 須恵器片5点(坏), 灰軸陶器片1点(瓶カ), 焼礫2点が出土している。5492は南東部の床面から出土した。

所見 南東部の床面から出土した5492の周囲にはわずかに焼土や粘土が見られ, 遺構としては検出されなかったが, 甕かそれに類する火炆の存在が推測される。灰軸陶器片は細片で図示できなかったため, 一覧表(表13)に記載した。10世紀後葉と考えられる第662号住居跡を掘り込んでいること出土土器から, 時期は11世紀前半と考えられる。



第118図 第661号住居跡出土遺物実測図

第661号住居跡出土遺物観察表 (第118図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5490	土師器	甕	[19.0]	(5.8)	-	石英, 長石	橙	普通	口縁部内外面横ナゲ, 内面ヘラナゲ	覆土中	10%
5491	土師器	瓶*	[22.6]	(10.5)	-	石英, 長石, 金雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナゲ, 内面ヘラナゲ, 輪轆み痕	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5492	焼曜	13.7	10.9	5.4	1260	砂岩	表面に被熱痕, 炭化物付着	南東部床面	
5493	焼曜	(13.5)	9.6	5.3	(470)	砂岩	表・裏・側面に被熱痕, 炭化物付着	東部下層	

第662号住居跡 (第119・120図)

位置 調査区中央部のF 8 a 7 区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第663号住居跡を掘り込み、第661号住居、第1902・1913号土坑、第43号ピット群のP6・P8～P11に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.4m、短軸2.8mの長方形で、主軸方向は $N-10^{\circ}-E$ である。壁高は26～34cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。また、竈の西側の壁に壁外へ30cmほど半円形に掘り込んだ部分がある。

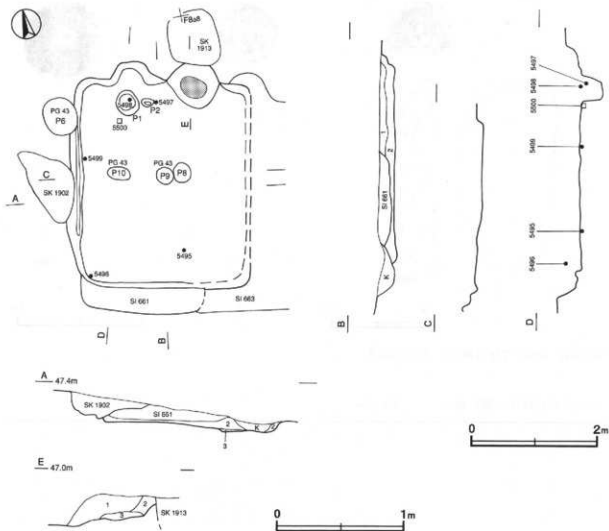
床 緩やかに東へ傾斜している。第663号住居跡を掘り込んでいる部分には一部貼床が見られる。

竈 北壁のやや東寄りに付設されている。遺存状態が悪く、火床部のみ確認できた。焚口部から煙道部までは80cmで、壁外へ35cmほど掘り込んでいる。袖部と天井部は残存しておらず、火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量、細
2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
3 赤褐色 焼土ブロック多量、細り強

ピット 2か所。P1は北西部に位置し、深さは30cmである。柱穴の可能性が考えられるが、1か所しか確認できなかった。P2は深さ10cmでP1の東側に位置しているが、性格は不明である。



第119図 第662号住居跡実測図

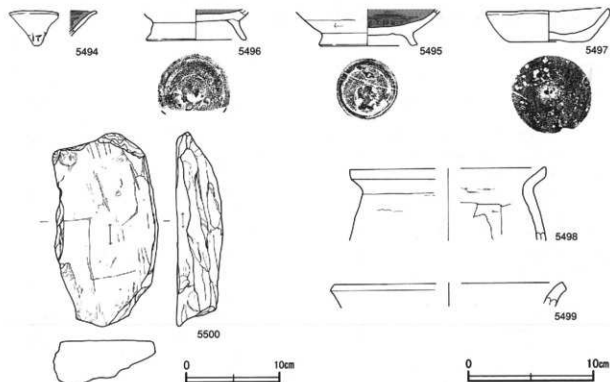
覆土 3層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。第3層は貼床である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性弱、締り強
 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、粘性弱
 3 暗褐色 ローム粒子少量、粘性弱、締り強

遺物出土状況 土師器片100点(坏33, 碗5, 小皿1, 甕61), 須恵器片12点(坏4, 甕8), 縄文土器片1点, 石器2点(砥石1, 磨石1)が出土している。西北部と西壁際にやや集中しているが, 細片が多かった。

所見 竈の西側の壁に壁外へ30cmほど半円形に掘り込んだ部分があり, その前面にP1がある。周囲には細片が多いものの土器の散布が見られる。棚的な性格も考えられるが, P1が柱穴であった場合は使いづらい位置であり, 性格は不明である。5494は体部外面に「□上」と墨書があり, 当遺跡で出土している墨書の類例から判断すると, 一文字目のわずかに残る墨書は「井」の第三画の一部と推測される。ただし, 5494は覆土中からの出土であり, 流れ込んだものである可能性がある。時期は小皿の口径が第663号住居跡のものよりやや小さく, 第663号住居跡との時期差を考えると, 10世紀後葉と考えられる。



第120図 第662号住居跡出土遺物実測図

第662号住居跡出土遺物観察表 (第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5494	土師器	坏	-	(2.0)	-	長石, 金雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 体部外面面新□上, PL.02
5495	土師器	碗	-	(2.9)	7.1	石英, 長石, 黒雲母, 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転へつ切り後裏台貼り付け, 底部内面一定方向へラミガキ	南部床面	50%
5496	土師器	碗	-	(2.4)	[7.8]	石英, 長石	明赤陶	普通	底部回転へつ切り後裏台貼り付け, 底部内面不定方向へラミガキ	南西角中層	30%
5497	土師器	小皿	9.9	2.6	6.4	石英, 長石, 黒雲母, 赤色粒子	橙	普通	底部回転へつ切り	北壁際下層	95%, PL.38

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5498	土師器	甕	[15.5]	(5.8)	-	長石、黒雲母	褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面へラナデ、輪積み痕	北西部下層	5%
5499	土師器	甕	[18.2]	(1.9)	-	石英、長石	褐	普通	口縁部内外面横ナデ	西壁階下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5500	砥石	20.7	11.2	4.9	1370	泥岩	砥面2面	北西部下層	PL47

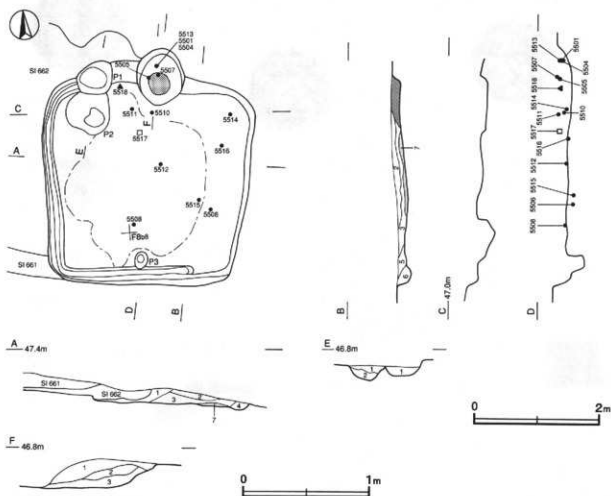
第663号住居跡 (第121~123図)

位置 調査区中央部のF8a7区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

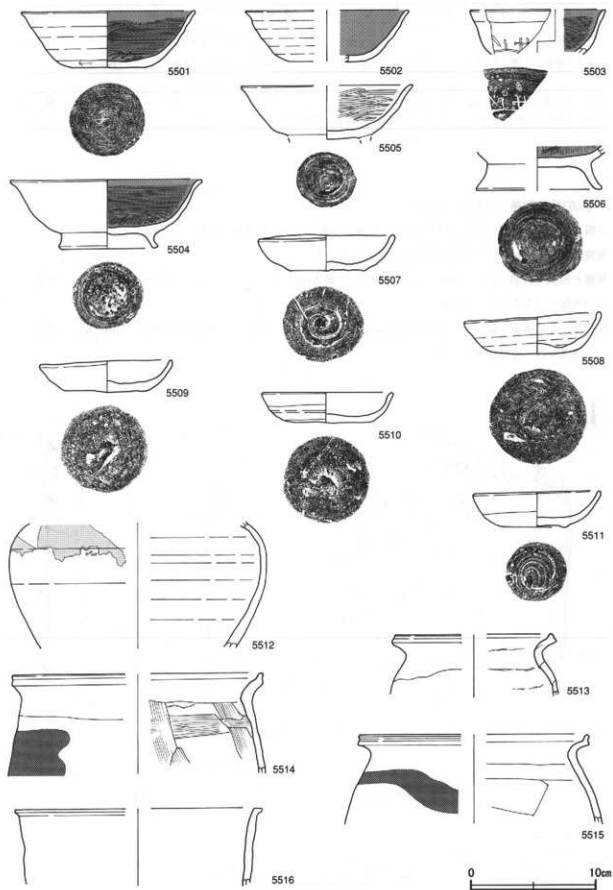
重複関係 第661・662号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.3m、短軸3.1mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は18~20cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

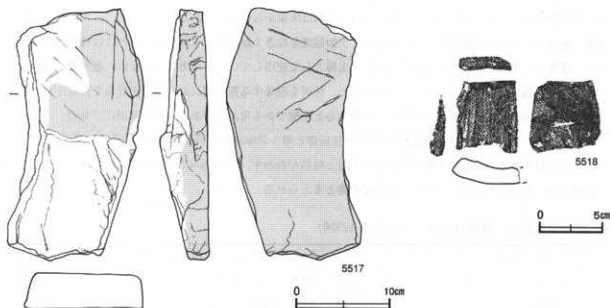
床 緩やかに南東へ傾斜し、中央部が踏み固められている。中央部から東側にかけて、一部に貼床がされている。壁溝が西・南壁際を巡っている。



第121図 第663号住居跡実測図



第122图 第663号住居跡出土遺物実測図(1)



第123図 第663号住居跡出土遺物実測図(2)

竈 北壁中央部に付設されている。遺存状態が悪く、火床部のみ確認できた。笑口部から煙道部までは90cmで、壁外へ30cmほど掘り込んでいる。袖部と天井部は残存しておらず、火床部は床面とはほぼ同じ高さで、火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量、粘性弱
- 2 褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量、粘性・粘り弱
- 3 褐色 焼土ブロック多量、炭化物少量、ローム粒子微量、粘り非常に弱

ピット 3か所。P1とP2は北西部に位置し、深さはP1が15cm、P2が20cmである。土層観察ではP2がP1を掘り込んでおり、2つは同時期には機能していなかったと考えられる。2か所とも掘り方からは柱穴とは考えられず、性格は不明である。P3は深さ28cmで南壁際中央の竈に対する位置にあり、出入り口施設に伴うものと考えられる。

P1土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

P2土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量
- 2 明褐色 ロームブロック多量

覆土 7層に分層される。焼土・炭化物を多く含み、人為堆積と考えられる。第7層は貼床である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘り弱
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性・粘り弱
- 3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘り弱
- 4 褐色 ローム粒子少量、粘性弱
- 5 極暗褐色 ロームブロック微量、粘性弱
- 6 暗褐色 ロームブロック中量、粘り弱
- 7 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量、粘り強

遺物出土状況 土師器片188点(坏57, 腕6, 小皿6, 甕119), 須恵器片19点(坏6, 高台付坏1, 長頸瓶2, 甕8, 瓶2), 瓦1点(平瓦), 焼礫1点が竈内と竈前にやや集中して出土している。火床面上からは下から5504・土師器甕体部片・5501・5513が重なって出土し, 5505・5507がその前に並んで出土している。5501・5504・5505・5507はすべて逆位である。5509は竈内の覆土下層から, 5517は中央部やや竈寄りから被熱した面が下に

向いた状態で出土している。5506・5512・5514～5516は床面からの出土である。

所見 室内から多くの土器が出土しているが、土師器甕を除き土師器杯・土師器小皿などには被熱痕が見られない。重なって出土した5501・5504も同様で、支脚として使用していたとは考えられない。甕の遺存状態が悪く、覆上が人為堆積と考えられることと併せると、住居を廃絶する際に甕に対する祭祀行為を行ったものと考えられる。5503は坏々としたが、口径から推測すると小碗である可能性があり、体外外面に「井」字とヘラ書きされている。同様の文字は、当遺跡の第178号住居跡と第1号濠跡や、岩瀬町間中遺跡からも出土している。5512・5516は床面からの出土であるが、他の土器と時期が合わず、流れ込みである可能性がある。時期は小皿の口径が10～11cmと大きいことから、10世紀中葉と考えられる。

第663号住居跡出土遺物観察表 (第122・123図)

番号	種別	器種	口径	径	高さ	取径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5501	土師器	杯	13.6	4.5	6.0		灰石、金雲母、赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り	室内	95%、外面煤け付着、PL39
5502	土師器	杯	[13.0]	4.1	[6.0]		長石、金雲母	明褐	普通	底部回転ヘラ切り	P 2内	20%
5503	土師器	杯々	[10.7]	(2.5)	-		長石	灰褐	普通	ロクロナデ	掘中	5%、内面ヘラ付着、外面煤け付着
5504	土師器	碗	15.1	5.5	7.2		長石、金雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	室内	80%、PL39
5505	土師器	碗	[13.6]	(4.3)	-		石灰、灰石、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	室内	60%
5506	土師器	碗	-	(3.4)	[9.5]		石灰、灰石、金雲母、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け、底部内面一定方向ヘラミガキ	南東部床面	40%
5507	土師器	小皿	10.6	2.8	6.0		石灰、灰石、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	室内	95%、PL39
5508	土師器	小皿	11.0	3.4	7.4		石灰、灰石、赤色粒子	明褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	中央部下層	95%、PL39
5509	土師器	小皿	10.4	2.6	6.4		石灰、灰石、赤色粒子	緑黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	室内	100%、PL39
5510	土師器	小皿	10.4	2.5	7.1		石灰、灰石、赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	掘下層	95%、PL39
5511	土師器	小皿	10.1	3.0	4.8		小粒、石灰、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転系切り	掘前中層	95%、PL39
5512	灰土器	長頸瓶	-	(10.1)	-		小粒、石灰、黒色粒子	灰	良好	ロクロナデ	中央部床面	10%、内面煤け付着、外面煤け付着
5513	土師器	小形甕	[12.4]	(5.0)	-		石灰、灰石、赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、輪槍み削	室内	5%、被熱痕
5514	土師器	甕	[19.8]	(8.0)	-		石灰、灰石	橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	北東部床面	10%、外面煤け付着
5515	土師器	甕	[18.2]	(7.2)	-		石灰、灰石、赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面ヘラナデ	中央部床面	5%、外面煤け付着
5516	灰土器	瓶	[19.6]	(6.2)	-		石灰、灰石、赤色粒子	灰黄	普通	ロクロナデ	北東部床面	5%

番号	器種	長さ	幅	高さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
5517	焼磚	30.1	16.0	4.4	3420	砂岩	被熱痕	中央部下層	
5518	平瓦	(6.0)	(5.2)	1.8	(67.7)	粘土	内面布目痕	掘下層	

第664号住居跡 (第124・125図)

位置 調査区中央部のE 8 j 8区に位置し、西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第665号住居跡を掘り込み、第1913号土坑、第43号ピット群のP1に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.9m、短軸2.9mの長方形で、主軸方向はN-97°-Eである。壁高は10～30cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し、中央部とP2の周囲が踏み固められている。第665号住居跡を掘り込んでいる部分には一部貼床が見られる。壁溝が西壁の一部で確認された。

竈 東壁の南寄りに付設されている。遺存状態が悪く、火床部のみ確認された。

竈土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量、粘性弱
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

ピット 2か所。P1は深さ36cmで西北部に位置しているが、性格は不明である。P2は深さ18cmで西壁際中央にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。

貯蔵穴 一辺約60cmの隅丸方形で、深さは40cmである。南西部に位置し、底面はほぼ平らである。

貯蔵穴土層解説

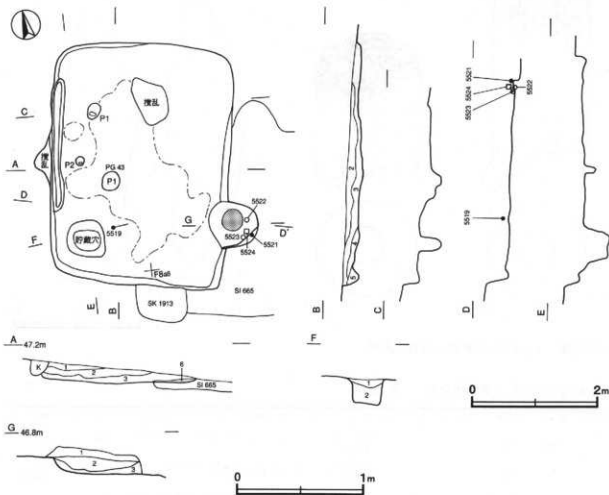
- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、自然堆積と考えられる。第6層は貼床である。

土層解説

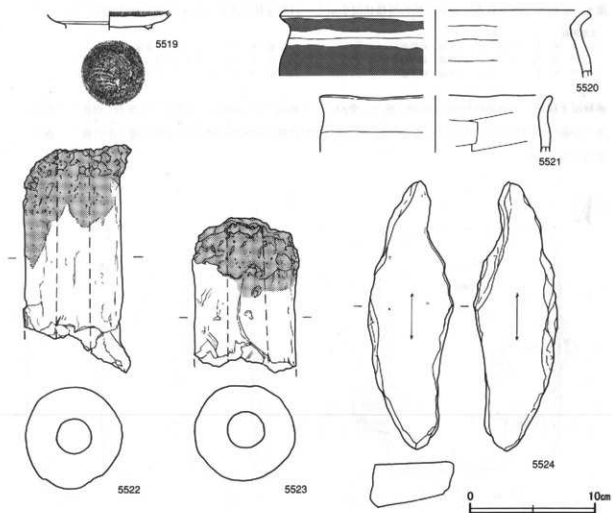
- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、粘性弱 | 4 暗褐色 ロームブロック少量、粘性弱 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量、練り弱 | 5 暗褐色 ローム粒子少量、粘性・練り弱 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、練り弱 | 6 暗褐色 ロームブロック中量、粘性弱・練り強 |

遺物出土状況 土師器片106点(坏20, 碗2, 甕84), 土製品2点(羽口), 石器1点(砥石)が出土している。多くが細片で図示できるものは少なかった。5522・5523は竈の火床面の奥に先端部を覆土中に挿し、直立した状態で出土した。



第124図 第664号住居跡実測図

所見 2点の羽口が特異な状態で出土している。火床面の奥にあり、袖部は確認されなかったものの、位置から判断しても袖部の心材とは考えられない。羽口は支脚に転用されていた可能性が考えられ、その場合は二掛け横並びになるものと考えられる。第1821号土坑からは羽口が1点同様な状態で出土しており、平地式建物の炉で支脚として使用していた可能性があり、本跡との関連性がうかがえる。あるいは、本跡の周囲には竈祭祀を行った可能性のある住居跡が多く、この羽口も竈を廃棄する際の祭祀行為に関わるものであろうか。本跡内には鍛冶関連の遺構はなく、周囲の遺構から持ってきたもの、あるいは居住者が鍛冶関連の職人であったと推測することができようか。時期は底部回転糸切り技法の土師器碗の存在と、同様の住居形態を持つ第650号住居跡の年代観から11世紀前半と考えられる。



第125図 第664号住居跡出土遺物実測図

第664号住居跡出土遺物観察表 (第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5519	土師器	碗	-	(1.4)	-	石英、長石、赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け	南西部下層	20%
5520	土師器	壺	[24.0]	(5.2)	-	石英、長石、金雲母	にぶい褐	普通	口縁部内外面横ナデ、内面へラナデ	覆土中	5%、外面僅行着
5521	土師器	壺	[18.6]	(4.5)	-	石英、長石、金雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ、内面へラナデ	竈内	5%

番号	器種	長さ	最大径	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
5522	羽口	(18.3)	8.2	2.8	(990)	粘土	ナテ, 被熱痕, 先端部鉄付着, 胎土に石英・長石・金雲母・植物繊維含む	壺内	PL44
5523	羽口	(12.5)	8.5	3.25	(679)	粘土	ナテ, 被熱痕, 先端部鉄付着, 胎土に石英・長石・金雲母・植物繊維含む	壺内	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備 考
5524	砥石	21.6	6.6	3.5	640	花崗岩	砥面2面	壺内	PL46

第665号住居跡 (第126・127図)

位置 調査区中央部のE 8 j 8 区に位置し, 西から東へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第664号住居, 第1913号土坑に掘り込まれている。

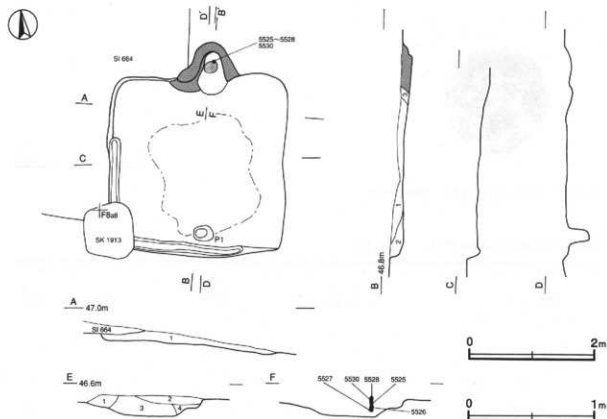
規模と形状 一辺が2.8mの方形で, 主軸方向はN-7°-Eである。壁高は16cmで, 各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 緩やかに東へ傾斜し, 中央部が踏み固められている。壁溝が西壁と南壁際の一部で確認された。

竈 北壁中央部に付設されている。遺存状態が悪く, 火床部と左袖部の一部のみ確認された。焚口部から煙道部までは85cmで, 壁外へ55cmほど掘り込んでいる。天井部は残存しておらず, 袖部はロームと粘土で構築されている。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ, 火床面は被熱し赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗 褐 色 焼土ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗 赤 褐色 ローム粒子・焼土ブロック中量, 炭化粒子微量, 粘性・締り弱
- 4 暗 赤 褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量, 締り弱



第126図 第665号住居跡実測図

ピット P1は深さ32cmで、南壁際中央の竈に対面する位置にあり、出入口施設に伴うものと考えられる。

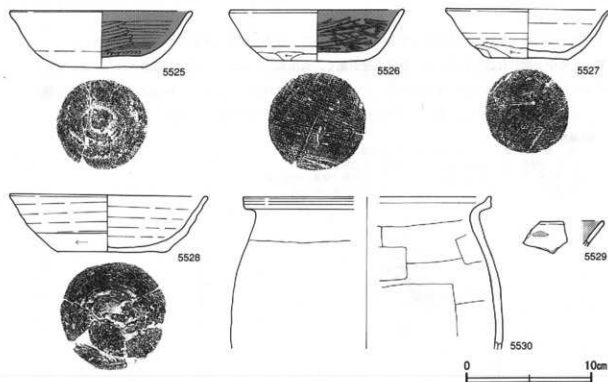
覆土 3層に分層されるが、覆土は薄く堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 3 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
 2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片34点(坏29, 甕5), 須恵器片4点(坏3, 甕1), 灰釉陶器片1点(瓶)が出土している。竈の火床面奥に、下から5527・5526・5525・5530・5528が重なって出土した。5527は正位で、他はすべて逆位である。

所見 竈内から重なって出土した5525～5528・5530は5530を除き被熱しておらず、支脚として使用していたとは考えられない。住居を廃絶する際に竈に対する祭祀行為を行ったものと考えられる。時期は食膳具に須恵器坏がまだ見られることから、9世紀後葉と考えられる。



第127図 第665号住居跡出土遺物実測図

第665号住居跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5525	土師器	坏	14.6	4.8	7.0	小礫, 石英, 長石, 金雲母	赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り, 底部内面一定方向ヘラミガキ	竈内	80% 内面磁材付着, 内面磁器片付着, PL.39
5526	土師器	坏	13.8	4.2	7.7	石英, 長石, 黒雲母, 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部一定方向ヘラミガキ, 底部内面不定方向ヘラミガキ	竈内	90%, PL.39
5527	須恵器	坏	13.0	4.0	6.6	長石, 白雲母	黄灰	普通	底部不定方向ヘラ削り	竈内	90%, PL.39
5528	須恵器	坏	15.6	4.5	8.6	石英, 長石, 黒雲母	橙	不良	底部回転ヘラ切り, 酸化炎焼成	竈内	80% 内面炭化層, 内面磁材付着, PL.40
5529	須恵器	坏	-	(2.1)	-	長石	灰黄褐色	普通	ロクロナデ	覆土中	5%, 内面磁材付着
5530	土師器	甕	[19.5]	(12.2)	-	石英, 長石, 金雲母	明赤褐色	普通	口縁部内外面横ナデ, 内面ヘラナデ	竈内	10%, 被熱気, 外面磁材付着